

# 多利向山古墳群

—近畿自動車道舞鶴線に伴う  
埋蔵文化財調査報告書(IV)—

1986.3

財団法人 兵庫県文化協会

# 多利向山古墳群

—近畿自動車道舞鶴線に伴う

埋蔵文化財調査報告書(IV)—

1986.3

社団法人 兵庫県文化協会

## 例　　言

1. 本報告書は、近畿自動車道舞鶴線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、昭和57年度・58年度・60年度に実施した兵庫県氷上郡春日町多利所在の多利向山古墳群の発掘調査報告書で、昭和57年度調査区をC尾根支群、昭和58年度調査区をA尾根支群、昭和60年度調査区をB尾根支群と呼称している。
2. 発掘調査は日本道路公団の委託を受け、兵庫県教育委員会が実施した。
3. 本報告書に使用した標高値は、日本道路公団が設定したBMを使用した。
4. 使用した写真のうち、遺物写真については森 昭氏に、C尾根支群のラジコンヘリコプターによる空中写真は岡田克巳氏に、B尾根支群の航空写真はアジア航測株式会社に依頼した。
5. A尾根支群A—1号墳出土のガラス玉の分析とC尾根支群C—1号墳木棺内検出の赤色顔料の分析及び出土玉類と鉄製品のX線透過試験については、奈良国立文化財研究所にお願いした。
6. 第6図周辺遺跡分布図は、国土地理院発行の2.5万分の1「柏原」・「宮田」・「黒井」・「市島」を使用した。
7. 出土遺物の整理と報告書作成作業は、明石市魚住町所在の魚住分館と神戸市兵庫区所在の埋蔵文化財調査事務所で行った。

# 本文目次

## 第1章 調査の契機と経過

第1節 調査の契機と経過.....	(加古) .....	1
第2節 調査体制.....	(〃) .....	3

## 第2章 位置と環境

第1節 遺跡の位置.....	(加古) .....	7
第2節 地理的環境.....	(〃) .....	7
第3節 歴史的環境.....	(〃) .....	10

## 第3章 各尾根支群の調査

### 第1節 A尾根支群の古墳

1. A—1号墳.....	(村上) .....	13
2. 小 結.....	(〃) .....	24

### 第2節 B尾根支群の古墳

1. B—1号墳.....	(山田) .....	25
2. B—3号墳.....	(〃) .....	41
3. 小 結.....	(〃) .....	41

### 第3節 C尾根支群の古墳

1. C—1号墳.....	(加古) .....	46
2. C—2号墳.....	(〃・岸本) .....	62
3. C—3号墳.....	(〃) .....	82
4. C—4号墳.....	(〃) .....	90
5. 小 結.....	(岸本) .....	93

## 第4章 まとめ

第1節 土 器.....	(岸本) .....	98
第2節 玄室方形プラン横穴式石室について.....	(〃) .....	99
第3節 多利向山古墳群の構造.....	(〃) .....	102
第4節 多利地域内の多利向山古墳群の位置.....	(〃) .....	103

## 挿 図 目 次

第1図	多利向山古墳群の分布状況	2
第2図	C尾根支群発掘作業風景	5
第3図	C尾根支群現地説明会風景	5
第4図	C尾根支群発掘調査風景	6
第5図	春日町位置図	7
第6図	周辺の遺跡分布図	8
第7図	多利向山古墳群（C—2号墳）から多利遺跡・松ノ本古墳群を望む	10
第8図	山垣遺跡出土木簡	11
第9図	多利前田遺跡 土塁墓遺物出土状況	12
第10図	A—1号墳 墳丘測量図（調査前）	14
第11図	A—1号墳 墳丘測量図（調査後）	15
第12図	A—1号墳 土層断面図	17・18
第13図	A—1号墳 土塁	19
第14図	A—1号墳 出土ガラス製小玉断面	20
第15図	A—1号墳 出土玉類実測図（1）	21
第16図	A—1号墳 出土玉類実測図（2）	22
第17図	B尾根支群地形測量図（調査前）	26
第18図	B尾根支群地形測量図（調査後）	27
第19図	B—1号墳 墳丘測量図（調査後）	28
第20図	B—1号墳 土層断面図	29・30
第21図	B—1号墳 第1主体部平面図	31
第22図	B—1号墳 第2主体部平面図	32
第23図	B—1号墳 第2主体部棺底鉄製品出土状況	33
第24図	B—1号墳 第2主体部出土須恵器	35
第25図	B—1号墳 出土鉄製品	36
第26図	B—1号墳 出土鉄刀	37
第27図	B—1号墳 出土鉄製品	38
第28図	B—3号墳 墳丘測量図・土層断面図	42
第29図	B尾根支群発掘調査風景	44
第30図	B—1号墳 遺物出土分布図	45
第31図	C尾根支群地形測量図（調査前）	47・48

第32図	C 尾根支群土層断面図	49・50
第33図	C—1号墳 土層断面図	51・52
第34図	C—1号墳 墓溝断面図	53
第35図	C—1号墳 墓丘測量図（調査前）	54
第36図	C—1号墳 墓丘測量図（調査後）	55
第37図	C—1号墳 主体部	56
第38図	C—1号墳 出土土器	58
第39図	C—1号墳 出土鉄製品	61
第40図	C—1号墳 出土鉄剣	61
第41図	C—2号墳 墓丘測量図（調査前）	62
第42図	C—2号墳 墓丘測量図（調査後）	63
第43図	C—2号墳 墓溝土層断面図	64
第44図	C—2号墳 土層断面図	65・66
第45図	C—2号墳 横穴式石室平面図	67・68
第46図	C—2号墳 遺物出土状況（第2次床面）	70
第47図	C—2号墳 遺物出土状況（第1次床面）	71
第48図	C—2号墳 墓溝内須恵器出土状況	72
第49図	C—2号墳 出土土器（1）	74
第50図	C—2号墳 出土土器（2）	75
第51図	C—2号墳 出土土器（3）	76
第52図	C—2号墳 出土金環	76
第53図	C—2号墳 出土土玉	80
第54図	C—2号墳 出土鉄刀	81
第55図	C—2号墳 出土鉄製品	81
第56図	C—3号墳 墓丘測量図（調査前）	82
第57図	C—3号墳 墓丘測量図（調査後）	83
第58図	C—3号墳 出土土器（1）	84
第59図	C—3号墳 土層断面図	85・86
第60図	C—3号墳 出土土器（2）	87
第61図	C—3号墳 主体部	88
第62図	C—4号墳 出土土器	90
第63図	C—4号墳 墓丘測量図（調査前）	90
第64図	C—4号墳 土層断面図	91・92

第65図	C尾根支群出土遺物分布状況	95・96
第66図	多利向山古墳群出土須恵器型式図	99
第67図	播磨地域の玄室方形プランおよびT字形横穴式石室墳分布図	101

## 図 版 目 次

図版 1	多利向山古墳群 遠景	
図版 2	多利向山古墳群 A尾根支群	上 A尾根支群 遠景 下 A-1号墳 遠景(調査前)
図版 3	多利向山古墳群 A尾根支群	上 A-1号墳 全景(表土除去後) 下 A-1号墳 全景(表土除去後)
図版 4	多利向山古墳群 A尾根支群	上 A-1号墳 全景 下 A-1号墳 溝土層堆積状況
図版 5	多利向山古墳群 A尾根支群	上 A-1号墳 土塁全景(北から) 下 A-1号墳 土塁全景(東から)
図版 6	多利向山古墳群 A尾根支群	上 A-1号墳 山土玉類 下 A-1号墳 出土玉類
図版 7	多利向山古墳群 A尾根支群	上 A-1号墳 出土玉類X線写真 下 A-1号墳 同 上
図版 8	多利向山古墳群 B尾根支群	上 B尾根支群 遠景(北から) 下 B尾根支群 遠景(北から)
図版 9	多利向山古墳群 B尾根支群	上 B-1号墳 遠景(西から) 下 B-1号墳 全景(調査前)
図版10	多利向山古墳群 B尾根支群	上 B-1号墳 尾根側溝(東から) 下 B-1号墳 全景
図版11	多利向山古墳群 B尾根支群	上 B-1号墳 第1主体部 下 B-1号墳 第2主体部遺物出土状況
図版12	多利向山古墳群 B尾根支群	上 B-1号墳 第2主体部(北から) 下 B-1号墳 第2主体部(東から)
図版13	多利向山古墳群 B尾根支群	上 B-1号墳 第2主体部鉄刀出土状況 下 B-1号墳 第2主体部鉄製品出土状況

- 図版14 多利向山古墳群 B尾根支群 上 B-1号墳 周溝  
下 B-1号墳 全景
- 図版15 多利向山古墳群 B尾根支群出土遺物 B-1号墳 第2主体部出土土器(1)
- 図版16 多利向山古墳群 B尾根支群出土遺物 B-1号墳 第2主体部出土土器(2)
- 図版17 多利向山古墳群 B尾根支群出土遺物 上 B-1号墳 第2主体部出土土器(3)  
下 B-1号墳 出土土器
- 図版18 多利向山古墳群 B尾根支群出土遺物 上 B-1号墳 出土鉄鎌  
下 B-1号墳 出土鉄鎌・鉄製品
- 図版19 多利向山古墳群 B尾根支群出土遺物 B-1号墳 出土鉄製品
- 図版20 多利向山古墳群 C尾根支群 上 C尾根支群 速景(調査前)  
下 C-1号墳 出土土器
- 図版21 多利向山古墳群 C尾根支群 上 C-2号墳 出土土器  
下 C-3号墳 出土土器
- 図版22 多利向山古墳群 C尾根支群 上 C-1号墳 全景(南から)  
下 C-1号墳 南尾根周溝
- 図版23 多利向山古墳群 C尾根支群 上 C-1号墳 主体部(東から)  
下 C-1号墳 墓塚内副葬土器一括
- 図版24 多利向山古墳群 C尾根支群 上 C-1号墳 棺内鉄鎌出土状況  
下 C-1号墳 棺内鉄鎌出土状況
- 図版25 多利向山古墳群 C尾根支群出土遺物 C-1号墳 出土土器(1)
- 図版26 多利向山古墳群 C尾根支群出土遺物 C-1号墳 出土土器(2)
- 図版27 多利向山古墳群 C尾根支群出土遺物 上 C-1号墳 出土土器(3)  
下 C-1号墳 出土鉄製品
- 図版28 多利向山古墳群 C尾根支群 C-2号墳 全景(調査後)
- 図版29 多利向山古墳群 C尾根支群 上 C-2号墳 地山切斷状況  
下 C-2号墳 南尾根周溝及び土器出土状況
- 図版30 多利向山古墳群 C尾根支群 上 C-2号墳 閉塞状況  
下 C-2号墳 石室内遺物出土状況
- 図版31 多利向山古墳群 C尾根支群 上 C-2号墳 第2次埋葬石室全景(北西より)  
下 C-2号墳 第2次埋葬石室全景(北東より)
- 図版32 多利向山古墳群 C尾根支群 上 C-2号墳 第1次埋葬石室全景(北西より)  
下 C-2号墳 第1次埋葬石室全景(北東より)
- 図版33 多利向山古墳群 C尾根支群 上 C-2号墳 石室構築状況(北西より)  
下 C-2号墳 石室構築状況(北東より)

図版34 多利向山古墳群 C尾根支群	上 C-2号墳 石室構築状況
	下 C-2号墳 石室構築状況
図版35 多利向山古墳群 C尾根支群	上 C-2号墳 全景(調査後)
	下 C-2号墳 全景(盛土除去後)
図版36 多利向山古墳群 C尾根支群	上 C-2号墳 石室構築状況
	下 C-2号墳 石室構築状況
図版37 多利向山古墳群 C尾根支群出土遺物	C-2号墳 出土土器(1)
図版38 多利向山古墳群 C尾根支群出土遺物	C-2号墳 出土土器(2)
図版39 多利向山古墳群 C尾根支群出土遺物	C-2号墳 出土土器(3)
図版40 多利向山古墳群 C尾根支群出土遺物	C-2号墳 出土土器(4)
図版41 多利向山古墳群 C尾根支群出土遺物	上 C-2号墳 出土土器(5)
	下 C-2号墳 出土遺物
図版42 多利向山古墳群 C尾根支群	上 C-3号墳 全景(南より)
	下 C-3号墳 全景(東より)
図版43 多利向山古墳群 C尾根支群	上 C-3号墳 墓域内出土遺物
	下 C-3号墳 墓域内出土遺物
図版44 多利向山古墳群 C尾根支群出土遺物	C-3号墳 出土土器(1)
図版45 多利向山古墳群 C尾根支群出土遺物	C-3号墳 出土土器(2)
	C-4号墳 出土土器

## 表 目 次

第1表	周辺の遺跡分布一覧表.....	9
第2表	A-1号墳 出土玉類観察表.....	23・24
第3表	B-1号墳 出土鉄鏃計測表.....	38
第4表	B-1号墳 出土土器観察表.....	39・40
第5表	C-1号墳 出土土器観察表.....	59・60
第6表	C-2号墳 出土土器観察表.....	77~80
第7表	C-2号墳 出土土玉計測表.....	80
第8表	C-3号墳 出土土器観察表.....	89
第9表	C尾根支群の概要.....	97
第10表	兵庫県下の玄室方形プランおよびT字形横穴式石室墳地名表.....	101

# 第1章 調査の契機と経過

## 第1節 調査に至る契機と経過

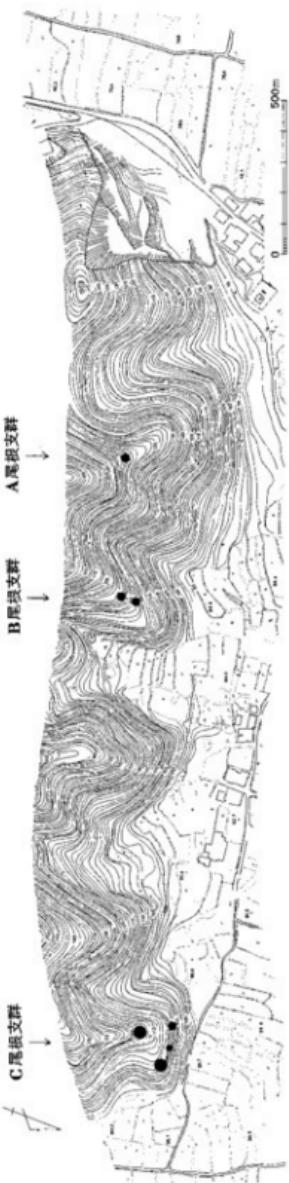
兵庫県下を東西に走る中国縦貫自動車道、山陽自動車道に続き、丹波と丹後を南北につなぐ高速道路——近畿自動車道舞鶴線が計画された。この道路は、中国縦貫自動車道の吉川ジャンクションから始まり、京都府の舞鶴インターチェンジまで総延長76.5kmある。周知の遺跡数は少なく、埋蔵文化財の有無については未知の部分が多くあると思われたので、道路建設工事に先立ち、昭和53年から遺跡分布調査と、それに伴って遺跡確認調査が実施してきた。その結果、昭和60年までに、三田市2地区、多紀郡15地区、氷上郡15地区の新たな遺跡が確認され、道路予定地内における全面発掘調査が進められ、ほぼ完了しつつある。

今回報告の多利向山古墳群は、兵庫県氷上郡春日町多利所在の向山北麓において新規に確認された尾根筋に点在する古墳群で、西からA尾根支群、B尾根支群、C尾根支群と呼ぶことにした。

### 第1次調査

第1次調査はC尾根支群の全面調査で、昭和57年4月から9月までの5ヶ月間発掘調査を実施した。C尾根支群は、向山北麓の東端で南東から北に延びる尾根に位置しており、昭和56年度の遺跡分布調査の際に確認された古墳群である。C尾根支群で最も高い所に位置するC-1号墳は、南側に墳丘を造り出すためと思われる尾根の切断が認められ、墳頂部分は径7m程度の平坦面があった。地元では中世に寺が建っていたとの伝承があり、建物址と古墳との両方の遺構確認を行った。C-2号墳は、C-1号墳の北東に位置し、墳頂部付近に盗掘のためと思われる大きな擾乱塗があり、ボーリングステッキによる探査で石室を内部主体とすることが想定された。墳丘の高まりから横穴式石室と思われた。C-3号墳は、C-1号墳の北西に位置しており、墳丘斜面上方部には、墳丘を造り出すための馬蹄形の削り出しが認められた。墳丘の隆起部分は低く、木棺墓を内部主体とすることが想定された。C-2号墳とC-3号墳の間に位置するC-4号墳は、遺跡分布調査の際には未確認であったが、伐採後の測量調査の際に墳丘らしき高まりが認められたため、古墳を想定して調査を行った。発掘調査は4基の古墳とも墳丘を4区画にし、墳頂部中央で直交するように畦畔を設定して表土掘削を行った。斜面の傾斜角度が急で、墳丘盛土はかなり流出しており、墳丘掘部を明確に検出するのは非常に困難であった。C-1号墳も墳頂部は擾乱を受けており、墓塚の検出が困難な状況であった。遺構検出後、埋葬施設の確認と古墳の構築状況を確認するためにトレンチを設定して断ち割って土層断面を観察した。C-2号墳も盛土、床面の土を除去して石室の構築状況を調べた。C-2

第1図 多利向山古墳群の分布状況



号墳は、古式の横穴式石室の様相を呈しており、貴重な遺構であったが、設計工法的に無理で移設することも考えられたが、盗掘のための破壊が著しくて移設後の保存対策がむずかしく、他の古墳同様やむなく記録保存の処置をとった。

#### 第2次調査

第2次調査はA尾根支群、B尾根支群の確認調査で昭和58年9～11月に実施した。A尾根支群、B尾根支群の古墳はC尾根支群の調査時に伐採後にC-4号墳が確認されたため、他の尾根筋にも分布調査の際に見落された古墳があるものと思われたため、調査員が伐採後の尾根筋を踏査したところA尾根支群で1基、B尾根支群で3基の古墳と思われる隆起を確認した。古墳確認のため、伐採された雑木をかたづけたあと墳丘と思われる部分を中心に行き土層観察を行ったところ、斜面に人為的に削平された地山面や溝を検出した。この状況は、C尾根支群で見られた墳丘構築状況と同様で、墳丘の隆起部分が低いことから木棺を内部主体とするものであろうと思われた。

#### 第3次調査

第3次調査はA尾根支群の西側、向山北麓の西端尾根頂上にみられた墳丘状の高まりの確認調査であったが、トレンチを設定して土層確認を行ったところ表土下がすぐ岩盤で造構と思われる施設は検出されなかった。調査は、昭和58年11月5日から11月10日までの5日間で終了した。

#### 第4次調査

第4次調査は、第2次調査で確認されたB尾根支群の全面調査で、昭和60年7月16日～8月30日まで調査が行なわれた。当初3基の古墳を

想定して表土掘削を行い、遺構精査に努めたが1基は古墳と断定できる資料が得られなかつた。B-3号墳と名称した1基も盛土がすべて自然流出して主体部を検出することができなかつた。このため、B尾根支群の調査で明確に主体部を確認できたのは、B-1号墳と名称した1基のみである。

## 第2節 調査体制

発掘調査・整理調査ともに、日本道路公団の委託を受けて、兵庫県教育委員会が調査を実施した。

### 昭和57年度発掘調査（多利向山C尾根支群）の体制

調査事務	社会教育・文化財課	課長	藤本繁
		文化財担当参事	吉村芳郎
		副課長	道畠實
		課長補佐	池田義雄
		"	堀洋
		係長	大村敬通
		主任	西口和彦
		"	小川良太
		技術職員	水口富夫
		事務職員	杉本恵子
調査担当	社会教育・文化財課	技術職員	加古千恵子
		"	岸本一宏
調査補助員	岸部邦子 藤田敬子	岸部明子 高見三郎	成田雅俊 畠敏幸
調査作業員	荒木俊雄 高見和夫 畠三之助 三井信子	上田洋子 高見さわ子 畠たか子 柳田茂	岡四あやの 高見章造 畠道雄 山本和子
			荻野喜代蔵 高見千代野 福西たまの
			荻野みさえ 高見つや子 三浦美津恵

昭和58年度整理調査（多利向山C尾根支群）の体制

調査事務	社会教育・文化財課	課長	西沢 良之
		文化財担当参事	大西 章夫
		副課長	森崎 理一
		課長補佐	池田 義雄
		係長	大村 敬通
		〃	樺本 誠一
		主査	松下 勝
		主任	八家 均
		技術職員	大平 茂
		事務職員	杉本 恵子
調査担当	社会教育・文化財課	技術職員	加古 千恵子
		〃	岸本 一宏

整理作業員 荒木 俊雄 上田 洋子 舟川 信也

昭和59年度整理調査（多利向山C尾根支群）の体制

調査事務	社会教育・文化財課	課長	西沢 良之
		文化財担当参事	大西 章夫
		副課長	森崎 理一
		課長補佐	和田 富男
		係長	大村 敬通（指導係）
		〃	樺本 誠一（調査係）
		管理係長	小西 清
		主査	坂本 豊明
		技術職員	大平 茂
		〃	森内 秀造
		事務職員	杉本 恵子
調査担当	社会教育・文化財課	技術職員	加古 千恵子
		〃	岸本 一宏

整理作業員 木村 淑子 早川亜紀子 平井 美鈴 前田 陽子 審谷 美音  
森口 恵里



第2図 C尾根支群発掘作業風景



第3図 C尾根支群現地説明会風景

#### 昭和58年度発掘調査（多利向山A尾根支群）の体制

調査担当 社会教育・文化財課 主 任 辅 老 拓 治  
技術職員 村 上 賢 治

現場事務員	百木光佐子					
調査作業員	有牛 徳治	大槻 芳裕	大野 嘉久	荻野 敦己	荻野 省三	
	荻野 拓哉	荻野 亨朗	荻野弥之助	竹内 潔	中川 敏博	
	西山 輝男	西山 譲	吉見 淳司	荻野ひさの	近藤美恵子	
	西本 寿子	野口はづ子	本庄 直美	吉見 貞子	吉見のぶえ	
	吉見よし子					

#### 昭和60年度発掘調査・整理（多利向山B尾根支群）の体制

調査事務	社会教育・文化財課	課 長	北 村 幸 久
		文化財担当参事	森 崎 理 一
		副 課 長	黒 田 賢一郎
		課 長補 佐	和 田 富 男
		係 長	樋 木 誠 一
		技術職員	森 内 秀 造

調査担当 社会教育・文化財課

渡辺 異  
主査 井守徳男  
技術職員 山田清朝

調査協力者 (株)新井組

長谷川範明 東矢 高明 谷川 茂喜 舟川 信也 土屋 秀樹  
荻野 亨朗 荻野 千良 畑 久之 三原 慎吾  
中納久美代



第4図 C尾根支群発掘調査風景

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 遺跡の位置

多利向山古墳群は、兵庫県氷上郡春日町多利字向山に所在している。古墳群の所在する春日町は、兵庫県の中央東寄り、丹波地域の北寄りで京都府天田郡と接している。

面積は76.8ha、人口13,000人で、行政的にみて氷上郡の中央部にあり、北は市島町、東は西紀町、西は氷上町、南は丹南町と接している。

古墳群の所在する多利地区は春日町の北西部で西側を竹田川が北流しており、竹田川の左岸沿いに国道175号線と国鉄福知山線が通っている。国鉄黒井駅からは北東約3kmの地点で、京都府福知山市まで13kmの道のりである。

### 第2節 地理的環境



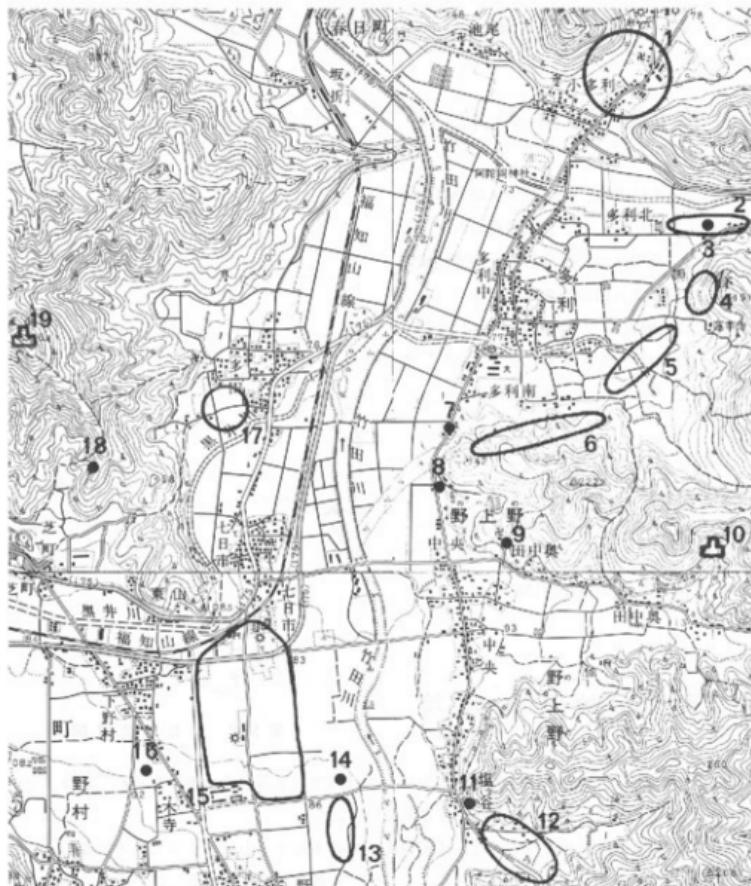
第5図 春日町位置図

春日町の地形は、丹波山地系多紀連山山地と播磨山地系東部中央山地に囲まれており、その間に氷上低地と呼ばれる沖積平野が形成されている。

多利向山古墳群の立地する場所は、標高564.8mの多紀連山山地の一部である妙高山より西侧、竹田川側に張り出した尾根の支脈である向山の北麓の北斜面に位置している。古墳群は、標高104～130mに立地しているが、それぞれ点在しており、北東500mに位置する9基の木棺墓で構成される松ノ本古墳群とは様相を異にしている。

竹田川を挟んだ多利地区、多田地区にかけて中位段丘・下位段丘が形成されていて、竹田川两岸には下位段丘、低地が形成されている。また、北の柏野地区には高位段丘が、南の野上野地区には中位段丘が形成されている。

遺跡の所在する多利集落の西南10kmの地点、氷上町石生水分付近には標高95mの分水界があ



- |           |            |              |            |
|-----------|------------|--------------|------------|
| 1. 柏野古墳群  | 2. カナツキ遺跡  | 3. カナツキ古墳    | 4. 松ノ本古墳群  |
| 5. 多利遺跡   | 6. 多利向山古墳群 | 7. 芝ノ西古墳     | 8. 二間塚古墳   |
| 9. 野上野窯跡  | 10. 野上野窯跡  | 11. 野々間遺跡    | 12. 塩ヶ谷古墳群 |
| 13. 野村遺跡  | 14. 山垣遺跡   | 15. 春日・七日市遺跡 | 16. 野村城跡   |
| 17. 多田散布地 | 18. くど山古墳  | 19. 黒井城跡     |            |

第6図 周辺の遺跡分布図 (1 : 25,000)

第1表 周辺の遺跡分布一覧表

番号	遺跡名	所在地	立地	遺跡概要	時代
1	柏野古墳群	小多利字柏野、新林、高山ノ下	丘陵	円墳。	古墳中期
2	カナツキ遺跡	多利字カナツキ	水田		縄文
3	カナツキ古墳	〃字カナツキ	水田	円墳。横穴式石室。	
4	松ノ木古墳群	〃字松ノ木	山麓	円墳。木棺直葬墓。箱式石棺。	古墳後期
5	多利遺跡	〃字寺ノ下、小向、高中、前田	畠	権柱建物群。土塙墓（和諧、輪入青白磁、白磁など）	奈良～室町
6	多利向山古墳群	〃字向山	山麓	3尾根支群で構成。円墳7基。木棺直葬墓。横穴式石室。	古墳後期
7	芝ノ西古墳群	〃字芝ノ西	山麓	2基以上で構成。	
8	二間塚古墳	野上野字田中	水田	前方後円墳（全長37.0m、前方部長17.0m、後円部径23.0m）	古墳中期
9	野上野薫跡	〃字田中	山麓	須恵器採集。	
10	野上野城跡	〃字奥山	山頂	吉住氏の居城	
11	野々間遺跡	〃字野々間	丘陵	銅鏡2口出土。（外縁付紐2式、4区裂葵摩文銅鏡、局平紐式4区裂葵摩文銅鏡）	弥生
12	塙ヶ谷古墳群	〃字塙ヶ谷	丘陵	円墳。横穴式石室	古墳後期
13	野村遺跡	野村	水田	竹田川の氾濫原。水田下30cmより有縫式釦製石剣出土。弥生土器、土師器多数出土。	弥生～古墳
14	山垣遺跡	棚原字山垣	畠	里長に關係する跡跡。周囲に堀をめぐらす。埴物1種。木簡21点をはじめ、500数点の木器が出土。円面鏡や墨書き土器も出土。	奈良前期
15	春日・七日市遺跡	七日市	水田	後期旧石器時代の櫛群。弥生中期～古墳前期の方形壠溝墓・円形壠溝墓・住居址など30基。奈良～平安時代の獨立柱建物群。墨書き土器、人形。	後期旧石器～平安
16	野村城跡	野村			戦国
17	多田散布地	多田		散布地。	
18	くど山古墳	黒井字上丸	山麓	円墳。横穴式石室。	古墳後期
19	黒井城跡（保月城跡）	黒井字天神	山頂	赤井直正の居城。天正7年明智光秀により落城。本丸・二ノ丸・三ノ丸。	室町～戦国

る。この分水界で、瀬戸内海に注ぐ加古川の支流である佐治川と日本海に注ぐ由良川の支流である竹田川に分れる。丹後地方と播磨地方を結ぶ古くからの交通の要所であったと思われる。

### 第3節 歴史的環境

春日町内においては、今まで発掘調査はほとんど行われておらず、周知の遺跡としては磨製石剣が出土した野村遺跡や前方後円墳二間塚などその他の若干の古墳群が知られている程度であった。昭和56年に、は場整備事業に伴なう事前調査で春日・七日市遺跡が確認されたのを契機として、その後幾自動車道舞鶴線建設工事に伴なう発掘調査で多くの遺跡が確認され、春日町が氷上郡内において歴史的に重要な地域であったことを証明する資料が急速に増加しつつある。特に竹田川左岸の下位段丘面に立地する春日・七日市遺跡は、南北200m以上、東西600m以上の広範囲で旧石器時代から平安時代までの遺構が存在する大規模な複合遺跡であることが判明している。

以下、時代の順を追って周辺の遺跡概観を述べてみる。

旧石器時代では、前述の春日・七日市遺跡がある。始良火山灰層の下層より石器と共に礫群などの遺構が検出され、昭和59年度に調査された多紀郡西紀町の板井・寺ヶ谷遺跡と同様、後期旧石器時代、約2万数千年前のものと思われている。

縄文時代は、多利集落の北東部に仮称カナツキ遺跡が確認されている。多利遺跡の小向地区でも確認調査の際に縄文後期の完形の深鉢が出土したが、周辺からは遺構は検出できなかった。

弥生時代は、周知の遺跡として石剣が出土した野村遺跡がある。石剣は銅劍型の磨製石剣で瓦粘土採集中に表土下30cmの所で單

独で出土しており、遺構は確認されなかった。東の野上野地区では2口の銅鐸が出土した野々間遺跡がある。昭和56年に丘陵斜面を削平中に偶然に見つかったもので、うち2号銅鐸は埋納坑に埋置された状態で検出され、銅鐸の埋納方法を知る手がかりとなった。春日・七日市遺跡では、昭和56年の調査で弥生時代中期～後期の方形周溝墓群や竪穴式住居跡群が確認され、昭和59年の調査でも弥



第7図 多利向山古墳群（C—2号墳）から  
多利遺跡・松ノ本古墳群を望む

生時代中期～古墳時代前期の堅穴式住居跡群を検出するなど大規模な集落であったことがわかる。また、多利地区より南3.5km離れた国領遺跡でも近畿自動車道建設に伴なう発掘調査で、昭和59年度に弥生時代後期末の堅穴式住居跡17基が検出されている。

古墳時代では、県指定の中期の前方後円墳二間塚古墳がよく知られている。内部主体は不明であるが、墳形は整っており、周濠と思われる痕跡もよく残っている。

みかん山、茶畠などの造成ですでに消滅してしまっている古墳も多いが、ほとんどは後期古墳である。多利集落を囲むように、北側には柏野古墳群、東側には松ノ木古墳群、南側には多利向山古墳群があるが、それぞれ埋葬形態は異っている。松ノ木古墳群は昭和58年に発掘調査され、木棺直葬墓を内部主体とする9基の円墳と1基の箱式石棺が確認された。尾根の急斜面を削平して埴丘を整形している点では同様であるが、群集墳としてまとまった形態で構成されており、各尾根に点在している多利向山古墳群のあり方とは様相を異にしている。他に、道路建設予定外のため調査は行われていないが、松ノ木古墳群と多利向山古墳群の中間地点である蓮華寺の裏山にも、横穴式石室を内部主体とする古墳群が存在することが分布調査の際に確認されている。

多利地区より西南10km離れた水上町石生の水分付近に所在する親王塚古墳は、墳径42mの水上郡最大の円墳で、内部主体は堅穴式石室である。変形三神三獣鏡が出土しており、同鏡が大阪府茨木市紫金山古墳、奈良県北葛城郡広陵町新山古墳、山口県厚狭郡山陽町長光寺山古墳から出土しており、一般には中期古墳として比定されているが、前期古墳としての様相も持ちあわせている。

歴史時代になると、奈良時代前半の遺跡として、やはり近畿自動車道舞鶴線建設に伴い昭和58年に発掘調査された山垣遺跡がある。奈良時代の最小の行政単位である里に関する木簡などが21点出土し、里に関連した役所跡と推定されるが、曲物等の他に木製農耕具が多量に出土しており、全国的にも初めての調査例であった。また、前述の春日・七日市遺跡からは奈良～平安時代の大規模な掘立柱をもつ建物跡群が数十棟検出されており、山垣遺跡に続く役所跡として注目すべきものがある。

中世の遺跡も増加しつつある。多利向山古墳群の所在する向山北麓下の北東平野部のやや谷地形に立地する多利遺跡の前田地区では、平安時代末～鎌倉時代初頭にかけての掘立柱建物8棟と土塙墓が検出されている。とくに土塙墓内には、和鏡、青白磁の蓋付小壺・合子、白磁小皿、土師皿、鉄製品、漆が副葬されており、遺跡の性格を考える

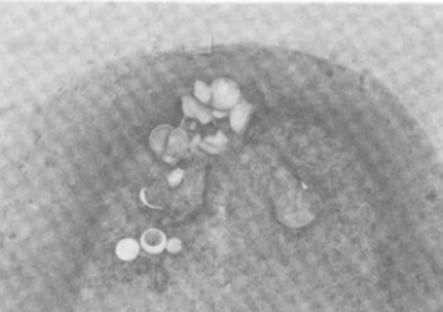


第8図 山垣遺跡  
出土木簡

うえで莊園との関連が考えられる。

黒井の町の背にある城山には、建武3年（1335）に赤松貞範が築城したという黒井城（保月城）があり、石垣及び堀割など繩張りがよく残っている。野村城跡、野上野城跡など中世城跡が多く、戦略的にこの地が交通の要所であったことを示している。国領遺跡からも、平安時代末～鎌倉時代の掘立柱建物跡20棟、木棺墓、土塚、井戸などが検出されている。国領地区は、南は佐中町や斐割町を経て多紀郡に通じ、東は大路を経て園部・龜岡など京都府に通じることもでき、交通の要地であったことが遺跡のあり方からも推定できる。

このように、多利向山古墳群の所在する春日盆地は、地理的にも歴史的にも播磨、揖津、丹後を結ぶ交通の要地であったことが、近年の発掘調査の成果で明らかになりつつある。



第9図 多利前田遺跡 土塚墓遺物出土状況

#### 〔参考文献〕

- 。経済企画庁総合開発局國土調査課『縮尺20万分の1 土地分類図付属資料 兵庫県』 昭和49年
- 。村川行弘・村川義典・春日七日市遺跡発掘調査団『春日七日市遺跡』 昭和59年
- 。兵庫県教育委員会『春日・七日市遺跡現地説明会資料1～3』 昭和59年
- 。春日町歴史民俗資料館『春日町歴史民俗資料館展示あんない』 昭和59年
- 。余田邦雄『丹波春日町出土の磨製石剣』 『考古学雑誌』54-4 昭和39年
- 。兵庫県教育委員会『松ノ本古墳群』 兵庫県文化財調査報告書第26冊
- 。丹波史談会『氷上郡志（上巻）』 昭和47年（復刻）
- 。財團法人国土地理協会『全国遺跡地図28 兵庫県』 昭和57年
- 。兵庫県教育委員会『山垣遺跡』 近畿自動車道関係埋蔵文化財調査略報 昭和59年
- 。種定淳介『丹波・野々間遺跡の銅鐸』 『兵庫教育』34-7 兵庫県教育委員会 昭和58年
- 。兵庫県教育委員会『国領遺跡』 遺跡説明会資料 昭和60年

## 第3章 各尾根支群の調査

### 第1節 A尾根支群の古墳

春日町多利の集落の南側に横たわる山塊から、北向きに幾筋かの尾根が延びているが、A尾根支群は、西から2番目の尾根の突端に位置する。この尾根は稜線が字境であり、西側は字芝ヶ西、東側は字向山となる。A尾根支群には1基の円墳しか存在しないが、この円墳（A-1号墳）も字境に立地している。

尾根は非常に幅の狭いもので、平坦面はほとんど見られない。標高141.0～157.5mにかけて急傾斜をしているが、標高141.0mから下は傾斜を緩めながら北側へ延び、舌状の張り出しがある。A-1号墳は、この傾斜変換点に築かれており、尾根を削って平坦面を作り出し墳丘を築いている。この古墳は、昭和57年度C尾根支群の調査中に踏査を行った結果発見されたものである。昭和58年度、発掘調査を行うため伐採済の雑木を片付けたところ、明らかに古墳であると判断できた。そのため当初から全面調査を行った。

#### 1. A-1号墳

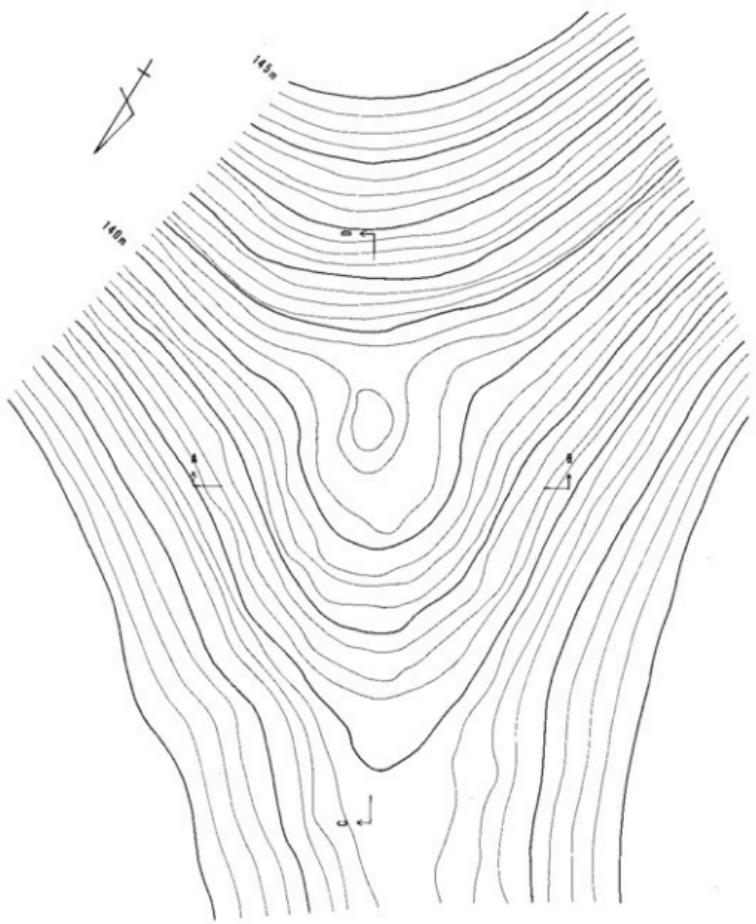
##### a 墳丘

墳形は、立地している尾根の幅が狭いという地形に制約されて不整円形をしている。墳丘規模は、尾根上に長軸を、それと直交する方向に短軸をとり、長軸11.3m、短軸10.7m、残存高1.0mを測る。

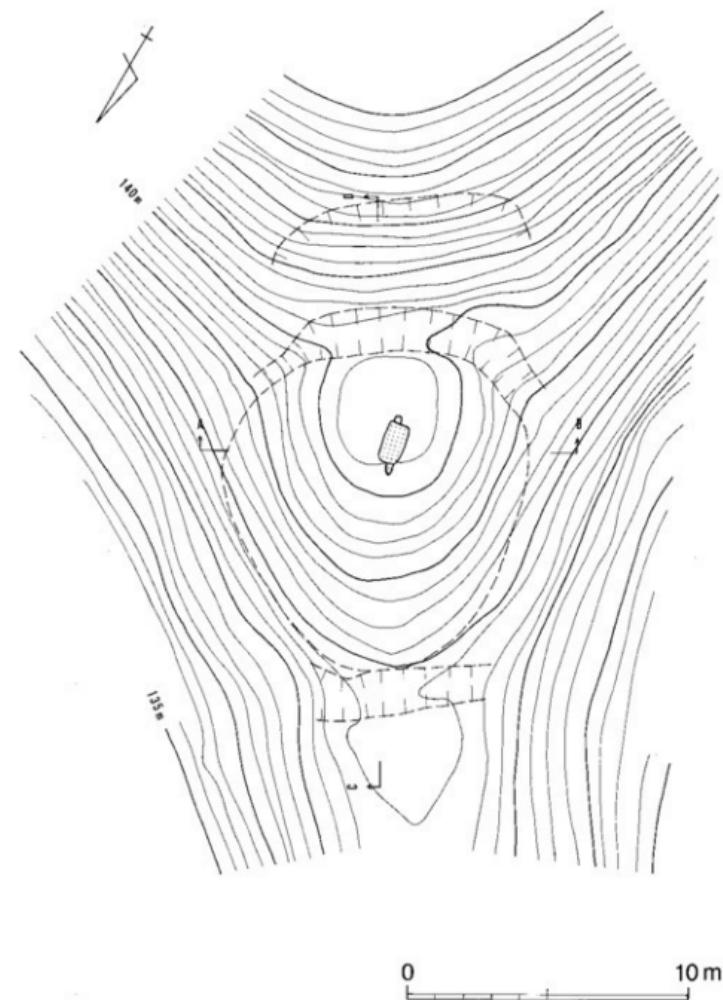
墳丘を築造するために3つの旧地形の整形を行っており、墳丘より上方の斜面の掘削、墳丘の裾と斜面とを画する溝の掘削、墳丘基底面の掘削という作業が行われている。

墳丘より上方斜面の掘削は標高141.0mを上限として弧状に削られており、その範囲は幅9.0m、高さ2.5mにわたっている。

この掘削面と墳丘裾を画すため溝が掘られているが、この溝は墳丘の約1/4を巡っているだけである。溝の深さは尾根稜線上の部分が最も深く、約40cmを測る。溝幅は0.7m～1.6mを測るが、東端は急に狭くなっている。墳丘裾を画す溝は、墳丘の北側でも検出されている。幅1.5m、深さ50cmの浅い溝で、岩盤をも掘り込んで作られている。この溝は、墳丘に沿って弧状に巡っているのではなく、ほぼ直線的に尾根を分断したといった感じのものである。この部分は尾根幅が狭くなっているため、弧状に掘る必要がなかったものと考えられる。



第10図 A-1号填埋丘測量図（調査前）



第11図 A-1号填埋堆測量図（調査後）

墳丘の築造は、大きく3段階に分ける事ができる。第1段階は、尾根を削り平坦面を作り出すとともに、削り出した土を平坦面の下方に積み、平坦面を大きくした段階である。第2段階では墳丘の横断面で見られるように、尾根の両斜面を更に削り、墳丘の裾を定めている。この2つの工程で、古墳の基底面が作り出され、墳丘規模が定まっている。第3段階は、第2段階までに作り出された基底面に土を盛り、墳丘を構築していった段階である。

#### b 埋葬施設

本墳は、墳丘の上部が流失しており、主体部と考えられる遺構は検出されなかった。ただ墳丘の中心より上方の、調査時における墳頂付近で土塗と擾乱塗が検出されている。擾乱塗は、長さ約1.4m、幅0.8mの不整形をしており、深さは1.0mを測る。底は、墳丘構築の時に第1段階で削り出した基底面にまで達している。

土塗は、この擾乱塗のため2つに分断され、擾乱塗の南側と北側にそれぞれ長さ30cmと60cm程度が残っているだけである。断面は、半径20cmの半円形をしており、黒色土が堆積していた。この埋土からは、遺物は出土していない。元は全長2.4m、幅40cmの細長い土塗であったと考えられる。

#### c 遺物出土状況

遺物は、石製管玉12個、ガラス製小玉53個、ガラス製管玉1個が出土しているが、いずれも表土あるいは擾乱塗の埋土からである。擾乱塗の南壁際で、底から50cmの埋土中からまとめて出土した一群は、首飾りの一部ではなかったかと思われるような状況を示している。

その他の遺物は、須恵器の杯身の細片が流土中より1点出土しているだけである。

#### d 出土遺物

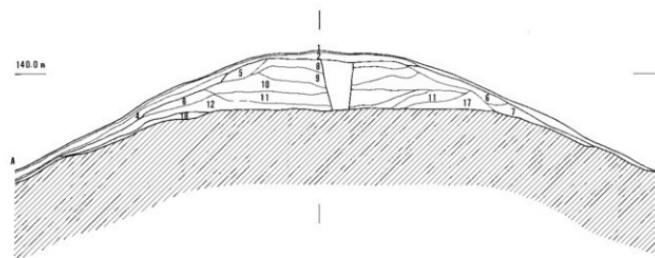
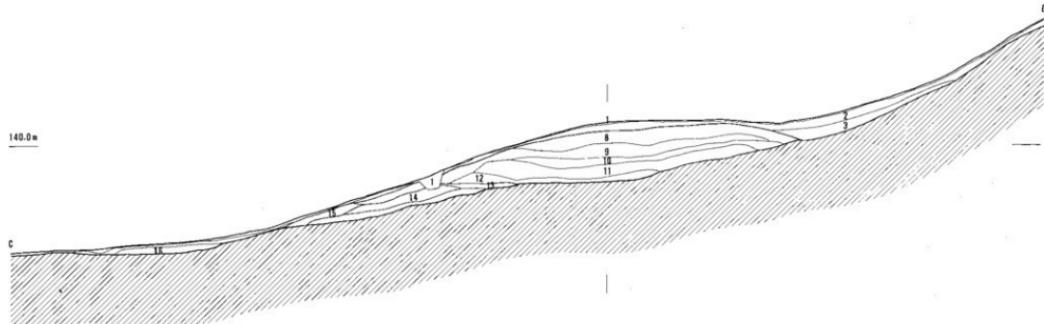
##### 1. 玉類

ガラス製小玉（第15図2～49、第16図50～54）

ガラス製小玉は、その大きさからA、B2種類に分ける事ができる。

A類は、径3mm、厚さ2mm前後の小さなものである（2～25）。孔の周辺は平坦面をなさず丸味をもっている。色調は、青色・藍色を基調として、それぞれに濃いもの淡いものがある。

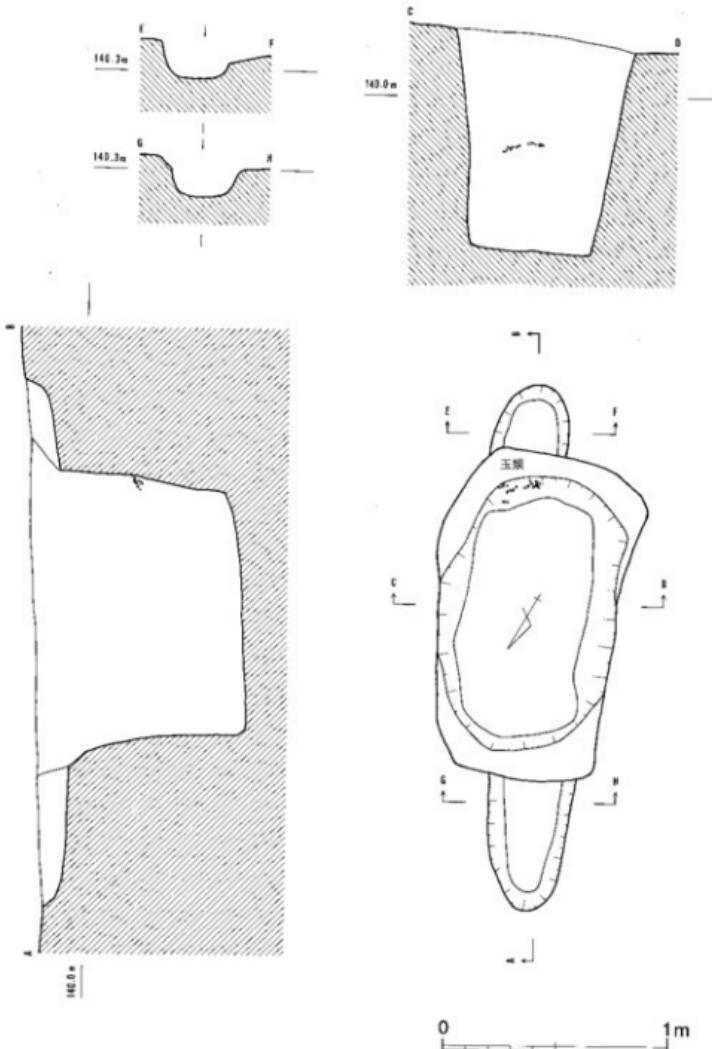
B類は、径7～8mm、厚さ5～7mm程度のものである（26～54）。このB類は更に、端面が平坦面をなすものと曲面をなすものとに分類できる。两者とも玉の側面は丸味をもっているが（34・36）などのように直線的なものもある。いずれも気泡が孔と並行してのびている。前者は、孔の端部が鋭く、管状のものを切断したような状況を示している。一方後者は、孔の端部が丸味をもち、新たに穿孔されたような感じを受ける。



- 1. 腐殖土
- 2. 暗黄色土
- 3. 黑色土
- 4. 黑褐色土
- 5. 暗黄色土
- 6. 暗赤褐色土
- 7. 暗黄色土
- 8. 暗黄色土
- 9. 暗赤黄色土
- 10. 暗黄褐色土
- 11. 暗赤色土
- 12. 暗黄褐色土
- 13. 暗赤色土
- 14. 暗黄褐色土
- 15. 暗黄色土
- 16. 暗赤褐色土
- 17. 暗黄褐色土
- 18. 暗黄褐色土

0 5m

第12图 A—1号填土剖面图



第13図 A-1号填土坡

### ガラス製管玉（第15図1）

A類のガラス小玉と同様な径と色調を持つ管玉である。側面は、全くの直線というのではなく若干曲っており、端面も丸味をもつ。

### 石製管玉（第16図55～66）

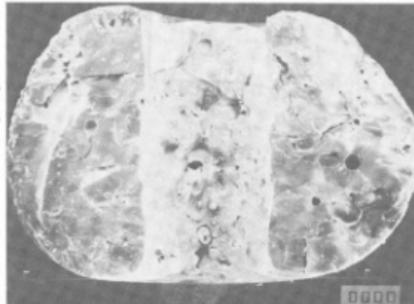
出土した12個の管玉のうち、（55～65）は碧玉、（66）は軟質の石（石材は未鑑定）で製作されている。

（55～64）は、（63・64）の径がやや細いものの、ほとんどが径8.60～9.05mmとそろっており、色調も緑色と同じである。長さは21.0～28.8mmまで様々であるが、27.0mm前後のものが多く、同一石材から作られたような感がある。いずれの管玉も端面は平坦に、側面は直線的に研磨されている。端面については、やや角度を持った二面から成る事もあるが、これは石材を切断した際の面とその後研磨した際の面が、若干の角度を持っていた事によると思われる。孔は一方向から穿たれているものと両側から穿たれているものがある。両側穿孔のものは、孔の位置がずれているものが多い。特に（55、56）では著しく、管玉の中央付近で両側から穿たれた孔が接するような感じで通じている。（55）は、一度穿孔した後再び反対方向から穿孔している。

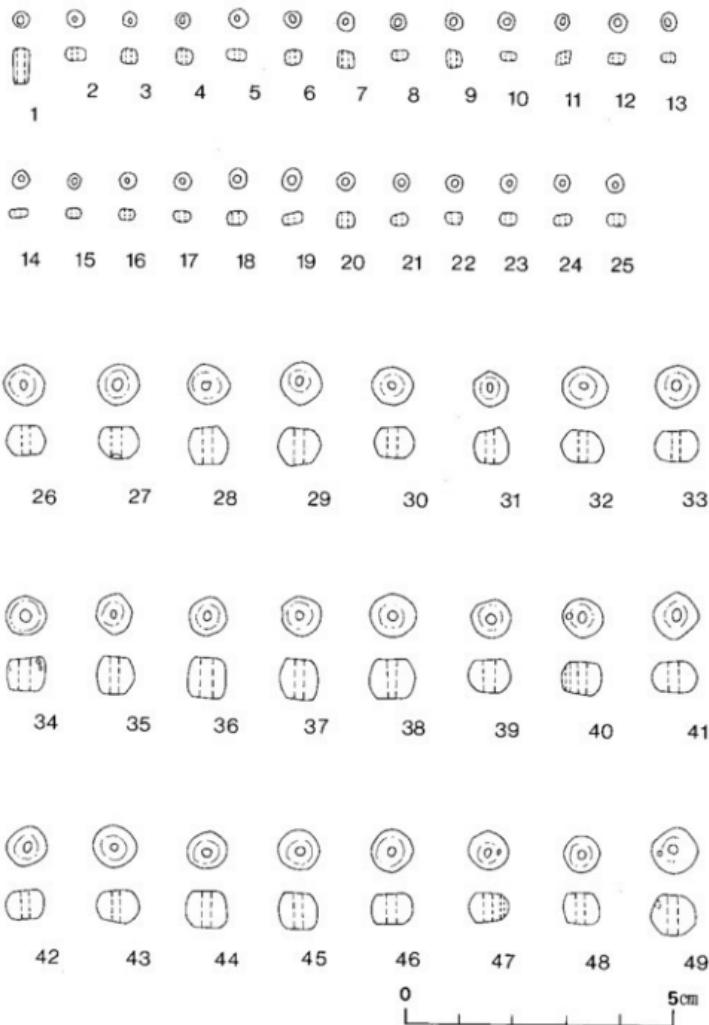
（66）は、破損がひどいが、現在残っている資料を見る限りでは一方向から穿孔されたものようである。

（註）ガラス小玉の成分については、奈良国立文化財研究所遺物処理研究室の肥塚隆康氏に分析をお願いした。X線マイクロアナライザーフ

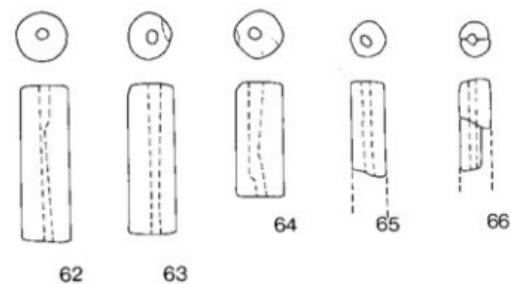
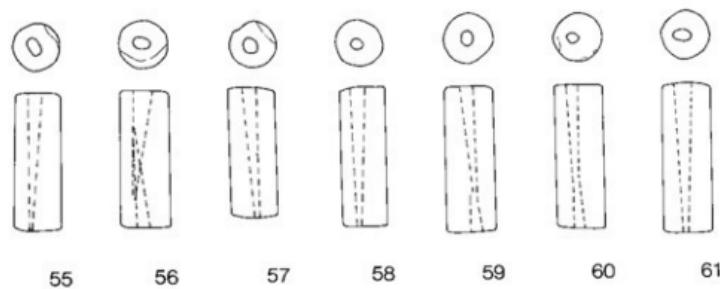
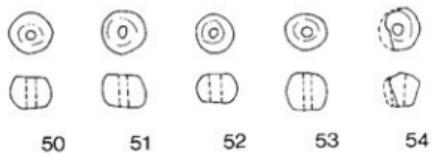
析によると、A類の小玉の場合、主成分はAl、SiでK、Ca、Fe、Cu、Ti?、Pbを含み、B類の小玉の場合、主成分はAl、SiでK、Ca、Mn、Fe、Cu、Pbを含むという結果が出ていた。蛍光X線分析では、A類、B類の両者とも、淡青色の方が濃青色よりCuが多くFeがやや少ないという結果が出ており、またB類にFe、Cu、Pbをわずかに含む事を確認しているとのコメントをいただいている。



第14図 A-1号墳出土ガラス製小玉断面



第15図 A-1号墳出土玉類実測図(1)



第16図 A-1号墳出土玉類実測図(2)

第2表 A-1号墳出土玉類観察表

## ガラス小玉

(単位:長さmm、重さmg)

No.	径	厚	孔 径	重 量	色 調
1	3.00	6.50	1.20	75	藍色
2	3.25	2.15	1.05	34	藍色
3	2.95	2.40	0.95	30	淡青色
4	3.05	2.60	1.05	43	青色
5	3.35	2.15	1.10	39	藍色
6	3.10	2.75	1.10	43	淡青色
7	3.35	2.65	1.05	49	青色
8	2.85	1.60	1.00	21	淡蓝色
9	2.85	2.95	0.95	37	青色
10	3.05	1.40	1.15	23	藍色
11	2.70	1.90	1.15	24	藍色
12	3.15	2.00	0.95	33	淡青色
13	2.65	1.55	0.95	19	淡蓝色
14	3.20	1.40	1.20	22	淡蓝色
15	2.60	1.70	0.90	21	淡蓝色
16	3.00	1.80	1.05	28	淡蓝色
17	3.05	1.95	1.05	27	淡蓝色
18	3.60	2.65	1.00	53	淡蓝色
19	3.55	1.70	1.15	34	淡青色
20	3.15	2.55	1.15	44	青色
21	3.25	2.15	1.05	30	藍色
22	3.05	1.80	0.95	25	淡蓝色
23	3.00	2.05	0.95	31	藍色
24	2.95	1.60	1.05	26	藍色
25	3.30	2.25	0.80	24	淡青色

## ガラス玉

(単位:長さmm、重さmg)

No.	径	厚	孔 径	重 量	色 調
26	7.30	5.65	1.55	430	藍色
27	8.40	6.00	1.80	432	青色
28	6.00	6.70	1.65	512	青色
29	7.70	6.50	1.60	572	青色
30	7.45	5.05	1.60	430	淡蓝色
31	6.45	6.15	1.75	390	青色
32	8.30	5.65	1.65	523	藍色
33	7.75	5.85	1.60	516	藍色
34	6.90	6.15	2.20	432	青色
35	7.40	7.10	1.60	481	藍色
36	7.10	7.10	2.05	559	綠青色
37	7.60	7.10	1.45	620	藍色
38	8.00	7.05	1.50	745	藍色
39	7.30	5.95	1.95	449	藍色
40	7.35	5.80	1.65 0.90	454	藍色
41	8.05	5.55	1.80	546	青色
42	7.00	5.10	1.85	370	藍色
43	7.30	6.20	1.40	497	藍色
44	7.40	6.45	1.40	527	藍色
45	7.40	6.90	1.80	538	藍色
46	7.40	5.45	1.95	500	藍色
47	7.40	5.30	1.65 0.70	423	藍色
48	6.65	5.60	1.40	365	藍色
49	8.30	7.00	1.45	640	藍色
50	7.45	5.35	1.65	425	藍色
51	7.45	5.50	1.80	485	藍色
52	7.00	5.40	1.75	392	藍色
53	7.35	6.45	1.55	490	藍色
54	7.25	5.85	1.60	508	藍色

## 管玉

(単位・長さmm、重さg)

No.	全長	径	孔 径		穿孔方法	重 量	色 調	備 考
			上	下				
55	25.30	8.75	2.95 × 2.85	1.10 × 1.10 2.35 × 2.15	二方向	3692	緑色	
56	24.85	8.85	2.30 × 3.20	2.80 × 2.85	"	3795	緑色	
57	23.90	8.60	2.70 × 3.10	1.00 × 0.95	片側	3605	緑色	
58	25.35	8.60	2.55 × 2.55	0.80 × 0.85	"	3708	緑色	
59	26.45	9.05	2.50 × 2.20	2.40 × 2.35	二方向	4234	緑色	
60	26.40	8.90	1.75 × 1.90	2.15 × 2.15	"	4174	緑色	
61	27.30	8.95	2.80 × 3.15	1.10 × 1.25	片側	4350	緑色	
62	23.80	9.00	2.35 × 2.35	1.85 × 1.70	二方向	4756	緑色	
63	27.65	8.05	2.50 × 2.25	1.60 × 1.75	"	3642	緑色	
64	21.00	8.35	2.15 × 2.30	1.70 × 1.75	"	3026	緑色	
65	17.20	6.35	1.75 × 1.70	1.80 × 1.70	"	1290	緑色	一部欠損
66	15.80	6.35			不明	510	緑灰色	一部欠損

## e 小 結

A—1号墳は、

- ①尾根の稜線上に立地している
- ②1基しか存在しない
- ③古墳群の中で唯一石製、ガラス製の装飾品を持つ

などの点で、B・C尾根支群を構成する古墳とは異っている。

主体部は失われているが、多利向山古墳群がほとんど木棺直葬墳である事や横穴式石室を構築したような墓塚も検出されなかった事から、A—1号墳は木棺直葬であったと推定される。

築造時期は、明確に決定できる資料がないが、流土中から出土した須恵器の細片が本墳に伴うものと考えるならば6世紀代と推定される。

## 第2節 B 尾根支群の古墳

B尾根支群は、B—1号墳とB—3号墳の2基の古墳より構成される。当初、昭和58年度の確認調査においては、B—1号墳～B—3号墳の3基で構成されていると思われていたが、調査の結果、B—2号墳については古墳であるとするに足る積極性を見出す事はできなかった。

2基の古墳は、向山より北西にのびる尾根より北方に派生する一小尾根の稜線上に分布し、A尾根支群の東側に位置する。

本支群は、尾根稜線の傾斜がわずかに緩くなる標高120～130mの地点に分布する。2基が分布する尾根稜線の平均傾斜角は約20°で、周辺低地からの比高は約30～40mである。稜線はほぼ直線的にのびるが、B—1号墳とB—3号墳のはば中間でわずかに西方に屈曲している。

### 1. B—1号墳

#### a 墳丘

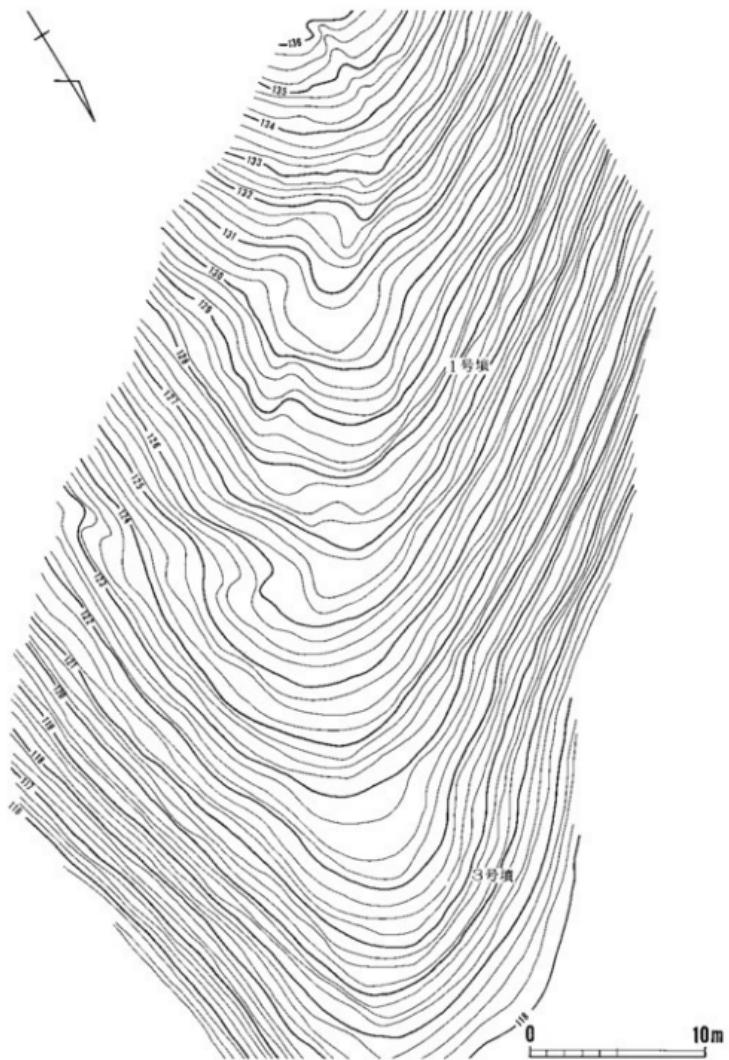
B—1号墳は、2基の古墳のなかで上方に位置し、墳丘南側裾部で標高130.25mである。

本墳は、特に墳丘北側部分の流失が著しく、調査前においては、古墳としての姿をほとんどとどめていなかった。墳丘の高まりは明確には認められず、舌状に張り出す約4×4mの平坦面と、平坦面の上方斜面に削り出しによる傾斜の変換がわずかに認められる程度であった。しかし、墳丘南側と上方の削り出し面との境が弧状に巡る溝状を呈し、遺存状況が比較的の良好であったため、墳丘の南側については裾部を明確にすることができた。

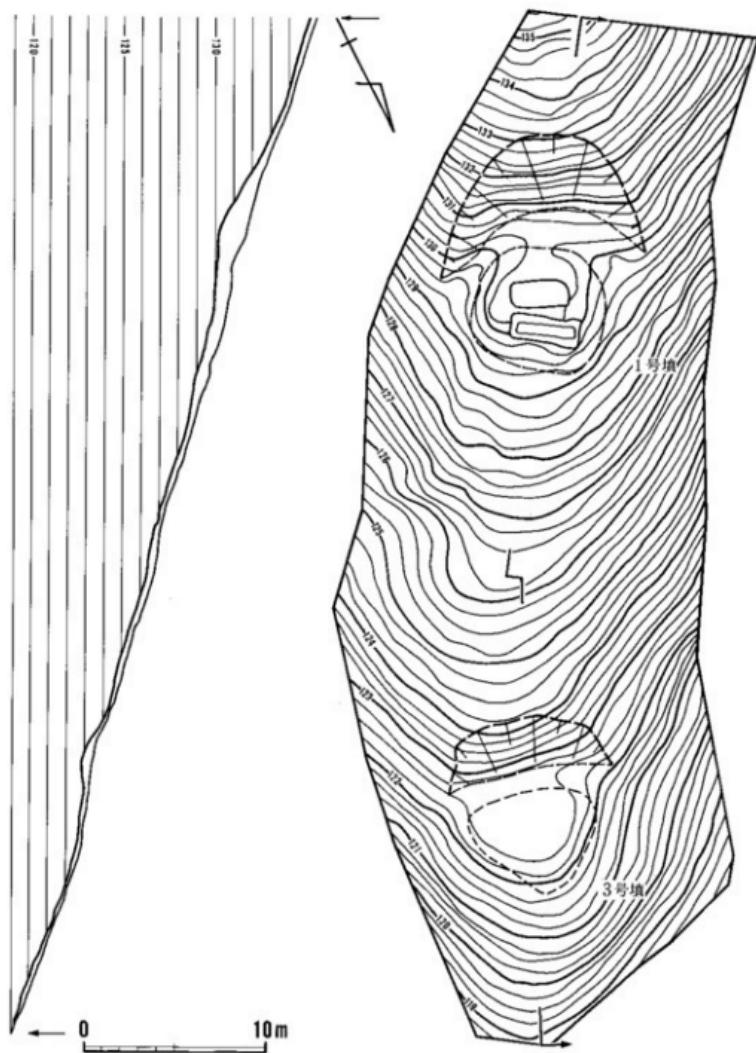
検出した墳丘は、裾部で主軸方向約6.7m、主軸直交方向約7.1mとやや不整形であるが、南側の溝が弧状を呈することから、墳丘裾部で直径約7mの円墳と推定される。しかし、第2主体部が墳丘の北側及び西側の斜面下にあることから、本来の規模はより大きなものであったと推定される。墳丘の高まりは認められるがわずかで、溝底からの比高は主軸上で0.3mを測るに過ぎない。

古墳の築造は、一部削り出しによる整形を行っているのであるが、大半は盛土によるものである。盛土作業は、基本的には、墳丘築造地点の尾根稜線を断面「L」字状に削り出し、平坦面を造り、さらに必要な土量を上方の尾根を削り出すことによってなされている。そして、仕上げとして、墳丘と削り出し面との境を弧状に整形している。

墳丘の南側を弧状に巡る溝は、墳丘の周囲約4mに亘り、最大幅約2mである。削り出し面上端との比高は主軸上で約4m、削り出し面下端部における幅は約11mに及ぶ。



第17図 B尾根支群地形測量図（調査前）



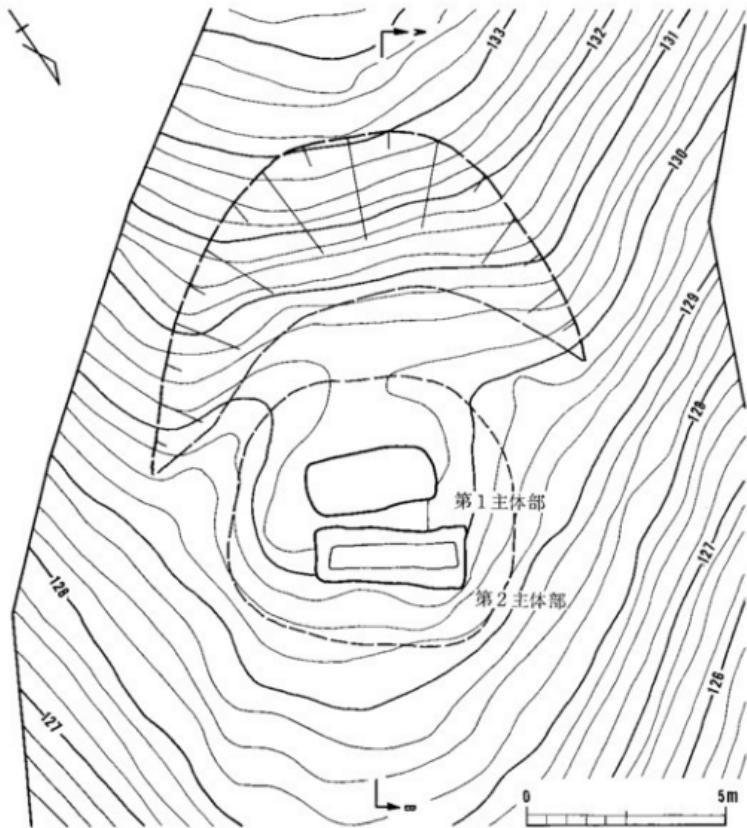
第18図 B尾根支群地形測量図（調査後）

## b 埋葬施設

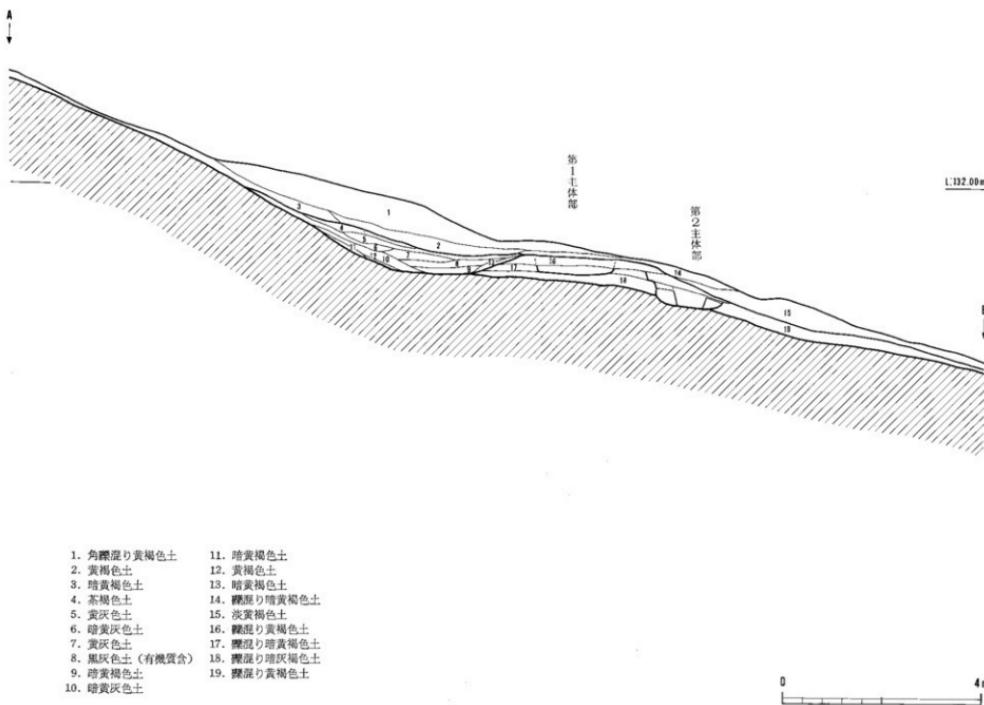
本境においては、2基の埋葬施設を確認することができた。

### 第1主体部

確認できたのは墓塚のみである。墳丘のほぼ中央に位置し、主軸は等高線とほぼ平行する。墓塚は、主軸上で長辺3.3m、短辺1.5mのやや不整形な隅丸方形を呈す。主軸長は、第2主体部に比べやや短い。墓塚の掘り方の大半は流失し、検出面からの深さは約8cmに過ぎない。



第19図 B-1号墳墳丘測量図（調査後）



第20図 B - 1号 填土層断面図

このため、棺の痕跡を確認することはできなかったのであるが、第2主体部同様、木棺を直葬したものと考えられる。

### 第2主体部

当初、主体部の存在を予想していなかったのであるが、墳丘主軸線上に確認トレンチを入れたところ、鉄刀が出土し、土層観察の結果、本主体部を確認することができた。

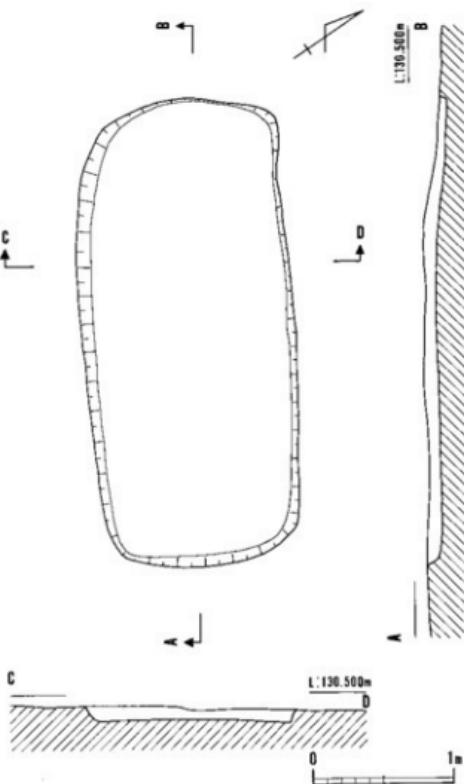
本主体部は、第一主体部の北約0.5mに位置する。第1主体部とは主軸方向を若干違え、時計回りに約10°振っている。主軸上で、長辺3.85m、短辺1.4mではば長方形を呈する。墳丘の北側斜面下に位置するため、北側ほど掘り方の流失が著しい。

埋葬方式は木棺を直葬した  
もので、墓底内ほぼ中央に、  
主軸上で長辺3.25m、西木口  
幅0.54m、東木口幅0.50m  
の棺跡を検出した。棺検出面  
からの深さは、主軸中央部で  
0.33mである。棺そのものは  
遺存していないが、棺底から  
多くの鉄製品が出土したにも  
かかわらず釘とみられるもの  
は1点も出土しておらず、木  
棺は組合せ式によるものと考  
えられる。

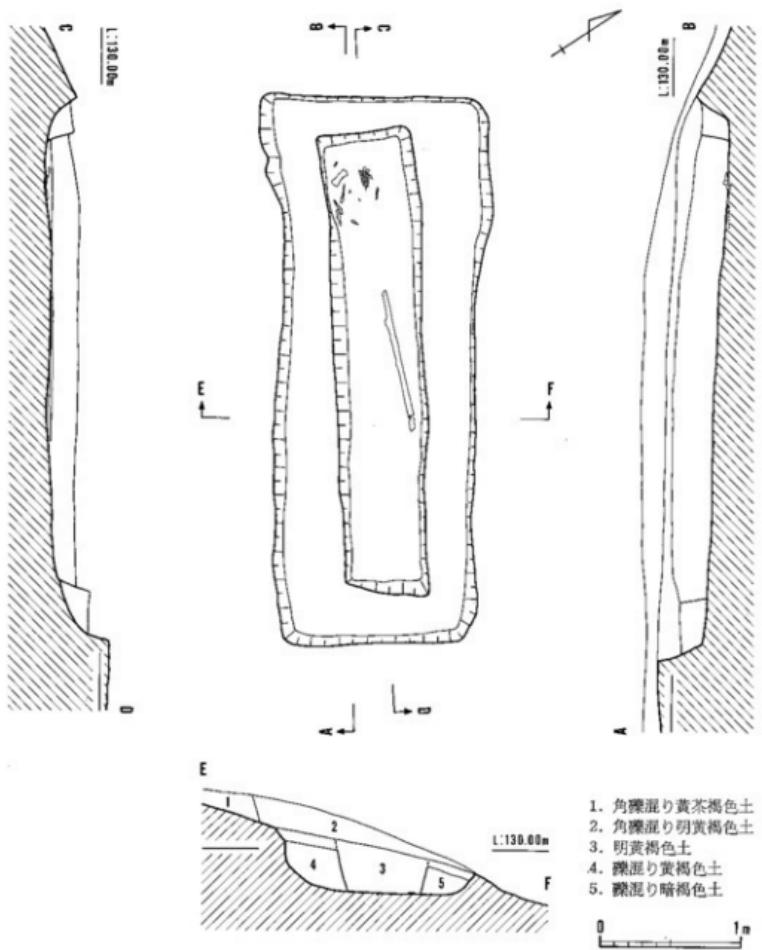
なお、第1主体部との前後  
関係については、墳丘の流失  
が著しいため、層位的に明確  
にすることはできなかった。

### c 遺物出土状況

B-1号墳に伴う遺物は、  
墳頂部及墳丘下方斜面出土土  
器・鉄製品、第2主体部墓底  
内出土土器、第2主体部棺底  
出土鉄製品の3群に分類でき  
る。



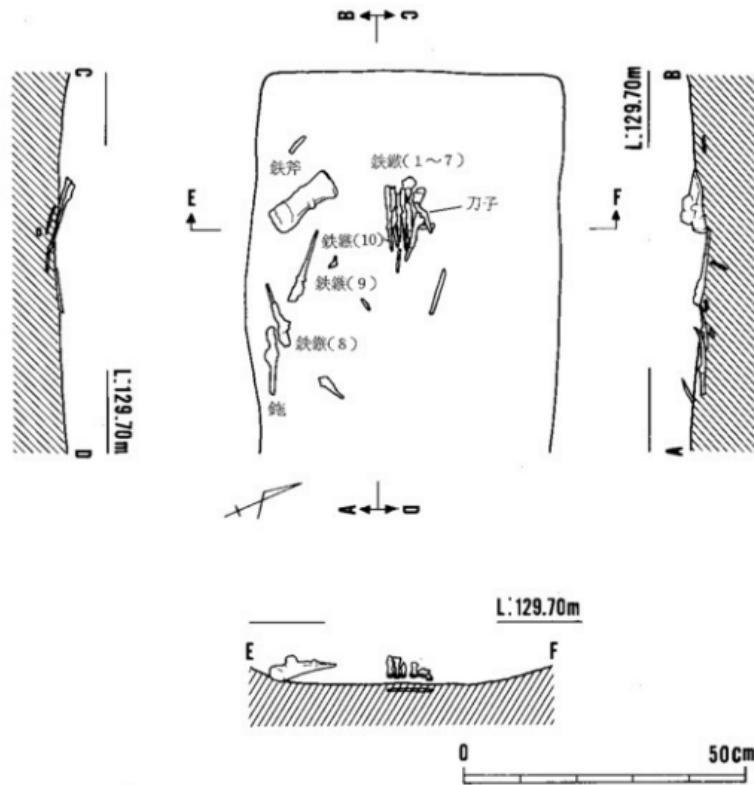
第21図 B-1号墳第1主体部平面図



第22図 B-1号墳第2主体部平面図

第1群は、墳頂部の第1主体部と第2主体部の中間付近の表土下より鉄製品・須恵器・土師器が、墳丘下方の北西斜面の標高126.5m地点より須恵器・土師器がそれぞれ出土している。いずれも量的には少なく、須恵器については、整理の結果、第2群のものと接合したことから、本来は第2群に属すべきものといえる。

第2群は、須恵器と土師器からなるが、前者が大半を占める。第1層（第22図）を掘り込む墓域中央部の南壁に沿って、検出面より上方で幅約1.7m、レベル差約0.3mの範囲に及び、蓋（第24図11）が完形となって出土した以外は小片での出土で、供献時の原位置は保たれていない。



第23図 B-1号墳第2主体部棺底鉄製品出土状況図

第3群は、鉄刀・鉄鎌・刀子・鉄斧・鉗からなり、いずれも棺底に副葬されたものと考えられ、ほぼ同じレベルで出土している。鉄刀以外は棺の南西部に集中している。

鉄刀 鋒先を東木口側に、刃を棺の内側に向け、北側板近くで茎側を側板に対して一定の角度をもって出土している。ほぼ原位置を保っているものとみられ、被葬者の頭位は西木口側であったといえる。

鉄鎌 棺のほぼ主軸上西木口付近と、その東南部一帯で出土している。前者は、鋒先を主軸とほぼ平行にし、西木口側に向け、鋒先がやや上方に傾いた状態で約6本一括で出土している。後者は、鋒先の方向は一定していない。また10は鋒先が棺底に突き刺さった状態で出土しているが、棺蓋が陥没した際の土圧によるものと考えられる。

その他、刀子は、一括出土の鉄鎌群と同位置で出土しているが、向きをやや異にし、刃先を主軸方向よりやや南側に向けている。鉄斧は、鉄鎌群の南側の側板近くで刃先を棺の北西隅に向け、また鉗は、その東側で側板に沿うように刃先を西木口側に向けて出土している。

以上が1号墳に伴う遺物出土状況であるが、棺内埋土については、全て掘いにかけて精査したが、玉類などは確認されなかった。

## d 出土遺物

### 1. 土器

#### 須恵器（第24図）

坏蓋、坏、高坏蓋、有蓋高坏が各5点、直口壺が2点出土している。

坏蓋は、口縁端部の形態において個体差がみられ、1・2・5、3、4の3つに分けることができる。また法量においても、若干の差がみられ、全体的にやや小型である。

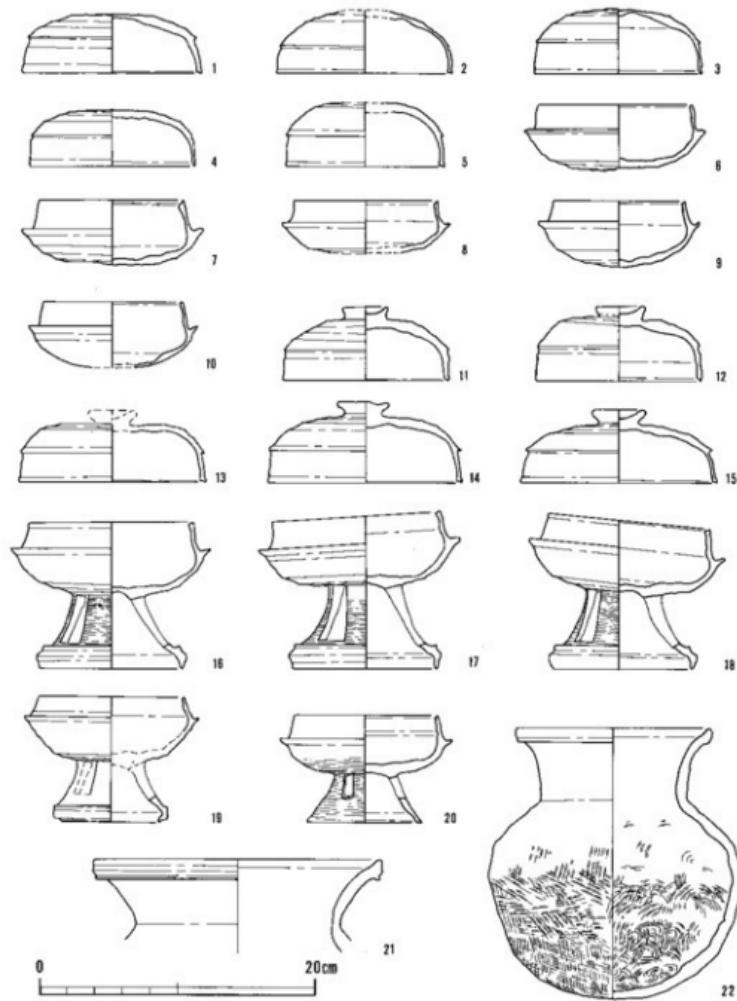
坏はほぼ共通の特徴をもつが、8は、口径に対して器高が低く、たちあがりも内彎せず短かめで他の坏とは形態を少し異なる。坏蓋との個々のセット関係については明確にし得ない。

高坏蓋は、いずれも天井部中央につまみが付くものである。13についても、天井部中央付近のヨコナデ調整及びその割れ口の状況から判断して、つまみが付いていたものと推定される。本器種についてはその形態により、11・12と13～15の2群に大別でき、後者の方がやや大型である。

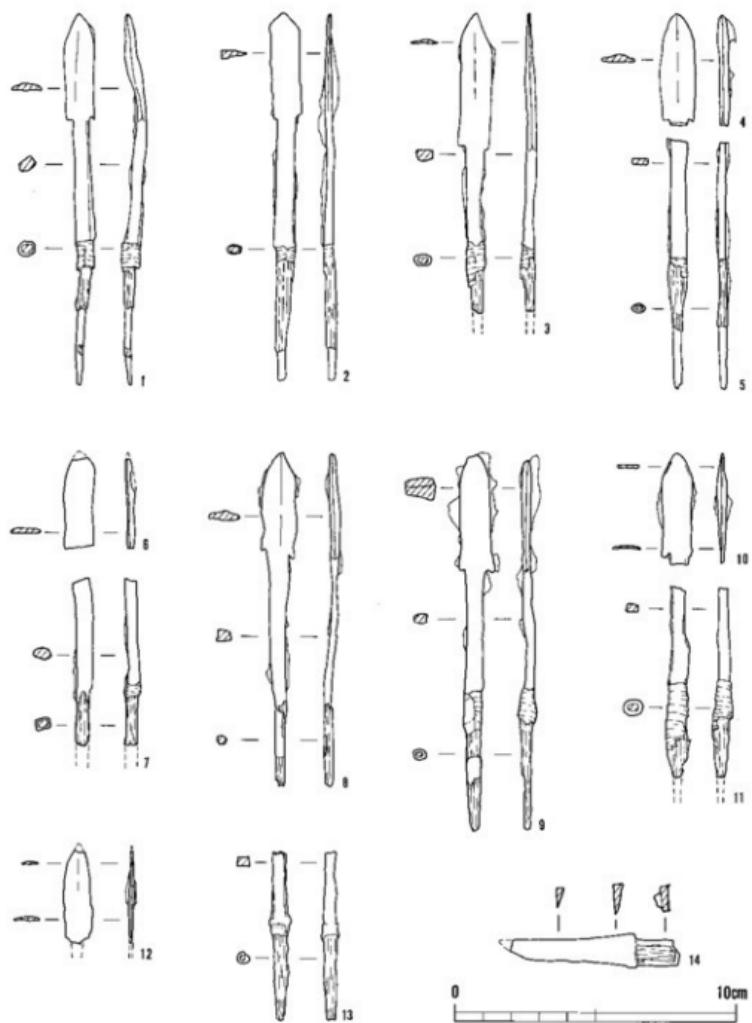
有蓋高坏についても高坏蓋同様、16～18と19・20の2群に大別が可能である。後者は前者に対して小型である点は共通するが、他の特徴については個体差が目立つ。特に20は、坏部に対して脚部が短かく、長方形透しは脚高の約4分の1と短いなど、やや異質ともいえる。

以上の2群は、高坏蓋の2群、つまり19・20が11・12と、16～18が13～15とそれぞれ対応するものと考えられるが、個々の対応関係については不明である。

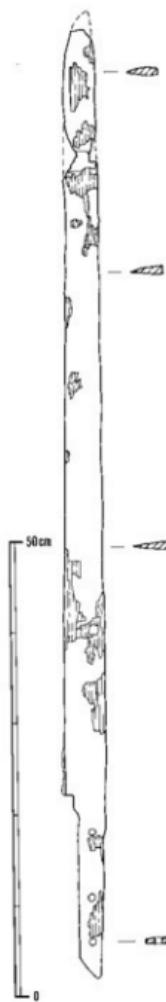
直口壺については、21・22の他に、21と同形態で焼成がやや不十分な口縁部片（図版16-5）も出



第24図 B-1号墳第2主体部出土須恵器



第25図 B-1号出土 鉄製品



第26図 B-1号墳  
出土鉄刀

土しているが、21と同一個体であるかについては判断し得ない。

#### 土師器 (図版16-6~10)

3 地点で出土しているが、いずれも小片であるため実測できなかつた。このうち、6・9・10は第2主体部墓壇内出土のものであるが、壺の頸部・体部の破片で、同一個体のものと考えられる。全体的に磨耗が激しいが、厚手で外面に粗い刷毛目が観察される。黄褐色を呈し、2~3 mm大の砂粒が多く含まれている。

## 2. 鉄 製 品

墳頂部出土の1点を除き、他は第2主体部棺底出土のものである。鉄製武器として鉄刀1、鉄鎌約10本、鉄製工具として刀子1、鉄斧1、鉗1が出土している。

#### 鉄刀 (第26図)

全長103.9cm、刃長 83.9cm、刃巾 3.5~4.5cmと大型の直刀である。刀身は平造りで、刃部断面は揃幅0.9cmの二等辺三角形をなす。X線透過試験の結果、茎部には径約0.3cmの目釘穴が3穴確認されそれぞれの間隔は、関節側から7.5cm、5.0cmと一定ではない。間隔の狭い方の目釘穴間には、「+」字の刻みが認められる。また、同じくX線透過試験により刀身は筋の走る方向の違いにより3区分することができる。刃部・茎部ともに良好な本質の付着が認められる。

#### 鉄鎌 (第25図、図版18)

出土状態においては二つに分けられたが、形式差としては現われない。いずれも長茎式に属し身の形状から大半は片丸造鍔被脇抉鑿箭式に分類されるものであるが、2・3のように片丸造鍔被鑿箭式に近いものもみられる。一括出土の鉄鎌群はこの二形式を内包している。

茎には全て木質の付着が認められる。長さは4.5cm~5.0cmを測る。鍔被は、幅0.5cm、厚さ0.3cm前後の断面方形をなし、長さは4.5cm前後のものが多い。茎部との境まで同じ幅のものもみられるが、本来は13のように膨みをもっていたものと推定される。刃部は片丸造りにより一面のみが膨みをもち、残りのよいものには縞が認められる。刃部の長さは3.5~4.8cmと個体差があり、3.8cm前後のものが多いが、幅は1cm前後と一定している。

#### 刀子 (第25図14、図版18-21・22)

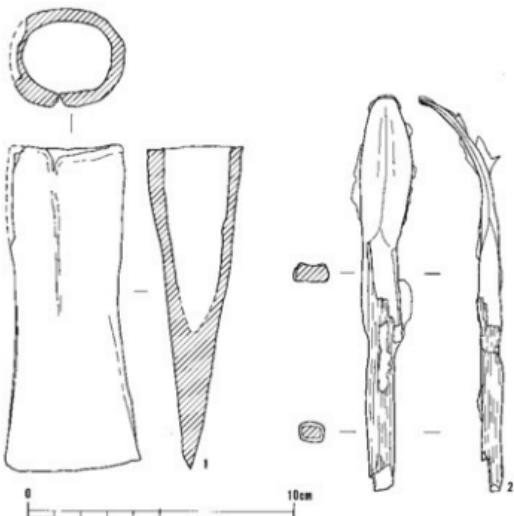
鋒先を一部欠損するが、  
残存長6.0cm、残存刃長4.4  
cm、刃幅0.7cmを測る。刃  
部は、棟幅0.2~0.3cmの  
断面二等辺三角形をなす。  
茎部は、端部を欠くが、全  
体に木質が良好に付着して  
いる。

#### 鉄斧（第27図1、図版19 —1・2）

片刃無肩式の袋状鉄斧で  
ある。全長20.2cm、刃幅  
5.2cm、袋部の長径は4.4cm  
(一部復元)、短径は3.6cm  
を測る。刃部はわずかに外  
彎し、刃部中央の縦断面角  
は約30°をなす。

#### 鎌（第27図2、図版18— 3・4）

残存長14.9cmで刃長5.6cm、刃幅1.9cmと大型の鎌である。刃部は、左右対称形をなさない  
が、中心線上に鎌が認められる。関部はわずかにくびれる。茎部は木質が良好に付着し、断面  
は0.7×1.0cmの方形をなす。端部は欠損しその形態は不明である。



第27図 B-1号墳出土鉄製品実測図

第3表 出土鉄鎌計測表

掲図No	全長	鉄身長	茎長	刃長	刃幅	図版No
1	13.2	8.1	(1.0)	3.8	1.1	1
2	13.0	9.3	4.7	3.8	1.0	2
3	(10.8)	8.2	(2.6)	4.8	1.1	3
4	(4.0)	—	—	3.8	1.2	4
5	(8.9)	(4.4)	(4.5)	—	—	5
6	(3.1)	—	—	(3.1)	1.0	6
7	(5.9)	(4.0)	(1.9)	—	—	8
8	11.9	8.3	(3.6)	3.5	1.0	12
9	13.4	8.4	5.0	4.2	1.1	11
10	(4.0)	—	—	3.7	1.1	13
11	(6.8)	—	—	—	—	19
12	(3.3)	—	—	(3.1)	(0.9)	15
13	(6.0)	—	—	—	—	20

※ ( ) の数値は残存長を示す、単位はcmである。

第4表 B-1号埴出土器観察表

器種	押印 No.	法量 (cm)	形態	技法	備考	図版No.
蓋	1	12.9 4.3 —	・天井部と口縁部を画する稜は突出が短か、やや陥さを欠く ・端部はわずかに内傾し段をもち凹面をなす	・天井部の削りの範囲は約%で、方向は反時計回り ・他是回転ナデ調整	・残存約% ・青灰色 ・1・2mmの砂粒を多く含む	15-1
蓋	2	12.6 (4.5) —	・天井部と口縁部を画する稜は突出せず陥さを欠く ・天井部は丸味をもつ ・端部はわずかに内傾し段をもちわざかに凹面をなす	・天井部の削りの範囲は約%で、方向は時計回り ・前後の後回転ナデ調整、他も同じ	・残存約% (口縁部) ・淡青灰色 ・1mm以下の砂粒を多く含む	15-3
蓋	3	12.0 4.9 —	・天井部と口縁部を画する稜は突出が短く陥さを欠く ・端部は大きく内傾し段をもちわざかに凹面をなすが、全体的に丸味をもつ	・天井部の削りの範囲は約%で、方向は反時計回り ・他是回転ナデ調整	・残存約% (口縁部) ・淡青灰色 ・1・2mmの砂粒を少し含む	15-4
蓋	4	11.8 4.1 —	・天井部は比較的平坦である。 ・天井部と口縁部を画する稜は突出するが丸味をもつ ・端部は大きく内傾するが明確な段をもたず丸味をもつ	・天井部の削りの範囲は約%で、方向は反時計回り ・他是回転ナデ調整	・残存約% ・青灰色～淡青灰色 ・1-2mmの砂粒をやや多く含む	15-5
蓋	5	11.4 (4.7) —	・天井部は丸味をもち口径に比べて器高が高い。 ・天井部と口縁部を画する稜はわざかに突出せしやや弱い ・端部は水平な凹面で鋭い	・天井部の削りの範囲は約%で、方向は反時計回り ・他是回転ナデ調整	・残存約% ・淡青灰色 ・1mm未満の砂粒やや多く含む	15-2
坏	6	11.0 4.8 —	・たちあがりは内窓気味 ・端部は内傾し段をもら、わざかに凹面をなし、全体的に丸味をもつ	・底部の削りの範囲は約%で、方向は反時計回り ・他是回転ナデ調整	・残存約% (口縁部) ・淡青灰色 ・底部外面に自然釉付着	15-6
坏	7	10.4 4.3 —	・たちあがりはやや長く直線的で端部にかけて肥厚 ・端部は内傾し段をもちわざかに凹面をなす ・受部がやや突出	・底部の削りの範囲は約%で、方向は反時計回り ・他是回転ナデ調整 ・全体的に粗雑なつくり	・ほぼ完形 ・淡青灰色 ・1~2mmの砂粒やや多く含む ・胎土はやや粗	15-8
坏	8	10.3 (3.8) —	・やや小型で口径に対し器高が低い。 ・たちあがりは外反気味 ・端部は内傾し段をもら、端面はわざかに丸味をもつ	・底部の削りの範囲は約%で、方向は時計回り ・前後の後回転ナデ調整、他も同じ	・残存約% (口縁部) ・青灰色 ・胎土は堅板	15-7
坏	9	9.4 4.8 —	・底部は全体的に丸味をもつ ・端部は内傾し段をもら、端面はわざかに凹む	・底部の削りの範囲は約%で、方向は時計回り ・他是回転ナデ調整	・残存約% ・青灰色 ・胎土や粗く2~3mmのレキを少し含む	15-10
坏	10	9.9 (4.8) —	・底部は丸味をもつ ・たちあがりは外反後内窓気味にのびや長い ・端部はわざかに肥厚し、わざかに内傾する凹面をもつ	・底部の削りの範囲は約%で、方向は反時計回り ・削りの後回転ナデ調整、他も同じ	・残存約% ・青灰色 ・胎土はやや粗く、1mmの砂粒を多く含む	15-9
蓋	11	11.9 5.4 3.4 0.8 —	・天井部に鉗状つまみをもつ ・天井部と口縁部を画する稜は突出が短く陥さを欠く。端部は内傾し段をもら、凹面をなす	・天井部の削りの範囲は約%で、方向は時計回り ・ヨミツムラ團はヨコナデ、他是回転ナデ調整	・完形 ・淡青灰色 ・胎土は1mmの砂粒を多く含み粒子が粗い	16-4

器種	坪図 No.	法量 (cm)	形 態	技 法	備 考	図版No.
蓋	12	11.8 5.4 3.4 1.0	・天井部に釦状つまみをもつ ・天井部と口縁部を画する稜は 突出せず丸味をもつ ・端部は比較的鋭く、内傾し段 をもち凹面をなす	・天井部の削りの範囲は約1/4 方向は反時計回り ・つまみ周囲はヨコナデ、他 は回転ナダ調整	・完形 ・青灰色 ・胎土緻密	16-5
蓋	13	13.3 4.3 — —	・天井部と口縁部を画する稜は 短いが鋭い ・端部は肥厚し、端面はほぼ水 平で凹面をなす、全体的に鏡 さをもつ	・天井部の削りの範囲は約1/4 方向は反時計回り ・つまみ周囲はヨコナデ、他 は回転ナダ調整	・残存約1/4 (口縁部) ・淡青灰色 ・胎土はやや堅緻	16-1
蓋	14	14.0 5.9 3.8 1.0	・天井部に擬宝珠状のつまみ ・天井部と口縁部を画する稜の 突出は短いかが鋭い ・端部は肥厚し、端面はほぼ水 平で凹面をなし、鋭い	・天井部の削りの範囲は約1/4 弱、方向は反時計回り ・他は回転ナダ調整	・完形 ・淡青灰色 ・天井部に重ね 焼き痕あり	16-3
蓋	15	14.0 5.3 3.9 1.0	・天井部に釦状つまみをもつ ・天井部と口縁部を画する稜の 突出は短いかが鋭い ・端部は肥厚しわざかに内傾し 凹面をなす。棱線は鋭い	・天井部の削りの範囲は約1/4 方向は反時計回り ・他は回転ナダ調整	・残存約1/4 ・淡青灰色 ・胎土はやや粗 い	16-2
有蓋高坏	16	11.7 10.6 5.5 10.2	・3方に長方形透しを穿つ ・坏部は全体的に丸味をもつ ・たちあがり端部は内傾し、段 をもつが形状は一定せず脱 さに欠く	・脚部はカキ目調整 ・环部の削りの範囲は約1/4、 方向は反時計回り ・他は回転ナダ調整	・残存約1/4 (环・脚部) ・青灰色 ・1mmの砂粒や や多く含む	16-7
有蓋高坏	17	12.0 11.1 5.2 10.1	・3方に長方形透しを穿つ ・たちあがりは斜上方に直ぐの びたあと内弯する ・端部は内傾し段をもち若干凹 面をなすが、鏡さを欠く	・脚部はカキ目調整 ・环部の削りの範囲は約1/4、 方向は時計回り ・他は回転ナダ調整	・完形 ・青灰色 ・1mmの砂粒多 く含む	16-8
有蓋高坏	18	11.6 10.8 5.7 9.8	・3方に長方形透しを穿つ ・たちあがりは半ばで屈折し、 内弯気味にのびる ・端部は内傾し段をもち平坦面 をなすが、鏡さを欠く	・脚部はカキ目調整 ・环部の削りの範囲は約1/4、 方向は時計回り ・他は回転ナダ調整	・完形 ・青灰色 ・1mm前後の砂 粒をやや多く 含む	16-6
有蓋高坏	19	10.5 9.1 4.5 9.0	・脚端部は内側へ大きく屈折 ・長方形透しを穿つ ・坏部は口径に対して器高が高 い。全体的に小型である ・端部はわざかに端面をもつ	・环部の削りの範囲は約1/4 方向は反時計回り ・他は回転ナダ調整 ・脚部にカキ目調整を施して いない	・残存約1/4 ・淡青灰色 ・脚の透氣不明 ・坏部内面の大 半は屈曲	17-2
有蓋高坏	20	10.3 7.8 3.5 8.3	・脚端部は屈折せず ・3方に小型の長方形透しを穿 つ ・端部は内傾し段をもつ ・坏部に対して脚部は小型	・脚部・环部はカキ目調整、 环部上半はその後回転ナダ 調整 ・他は回転ナダ調整	・完形(坏部は 約1/4) ・淡青灰色 ・5~6mmの縫 やや多く含む	17-1
直口壺	21	18.6 — —	・口縁部は外反気味に斜上方に のびる ・端部を上下に拡張。丸味をも ち鏡さに欠ける	・内外面とも回転ナダ調整	・残存約1/4 (口縁部) ・淡青灰色 ・やや焼成不良	17-4
直口壺	22	13.8 18.2 19.6	・体部はほぼ球形 ・口縁部は上方で外反し、端部 を上下に拡張。丸味をもち鏡 さに欠ける	・口縁部は内外面とも回転ナ ダ調整 ・体部外表面は叩き成形後、上 半を内外面とも回転ナダ調 整	・完形 ・青灰色 ・体部上半に自 然焼付着	17-3

\* 法量の数値は、蓋・坏については上段から口径・器高を、高坏蓋(11~14)については、上段から口径・器高・つまみ径・つまみ高を、有蓋高坏については上段から口径・器高・脚端径・脚高をそれぞれ示す。

## 2. B—3号墳

### a 墳丘

B—1号墳の稜線下方約30mに位置し、墳丘の裾部南側で標高122.5mである。B—1号墳との中间地点で稜線が屈曲しているため、B—1号墳とは主軸方向を若干異なる。

調査前の状況は、稜線の傾斜が変換し、舌状に張り出す平坦面がわずかに認められる程度であり、B—1号墳以上に不明瞭なものであった。

墳丘の盛土部分は全て流失し、墳丘南側の尾根削り出し面、墳丘部の平坦面そして両者を隔する弧状の溝を確認したにとどまる。また、これらが本墳を古墳と認める根拠でもある。

平坦面は、全体的に尾根先端方向に傾斜し、このため墳丘裾部北側は不明瞭で、墳丘の裾部を明らかにし得ない。B—1号墳と同じく墳丘南側の弧状の溝によってわずかに裾部南側を確認できたにとどまる。それによると、B—1号墳同様、裾部で径約7mの円墳と推定される。

墳丘の構築方法についてもB—1号墳と同様と考えられる。しかし、尾根削り出し面上端と溝底との比高約1.2m、下端部幅9.3mでB—1号墳に比べては小規模である。

弧状の溝は、B—1号墳ほど顕著な弧状を呈さないが、墳丘の周囲約 $\frac{1}{4}$ を巡り、主軸上の幅は1.1mである。

### b 埋葬施設

埋葬施設については、墳丘の盛土部分を全て流失しているため確認することはできなかったが、B—1号墳同様、木棺を直葬したものと考えられる。

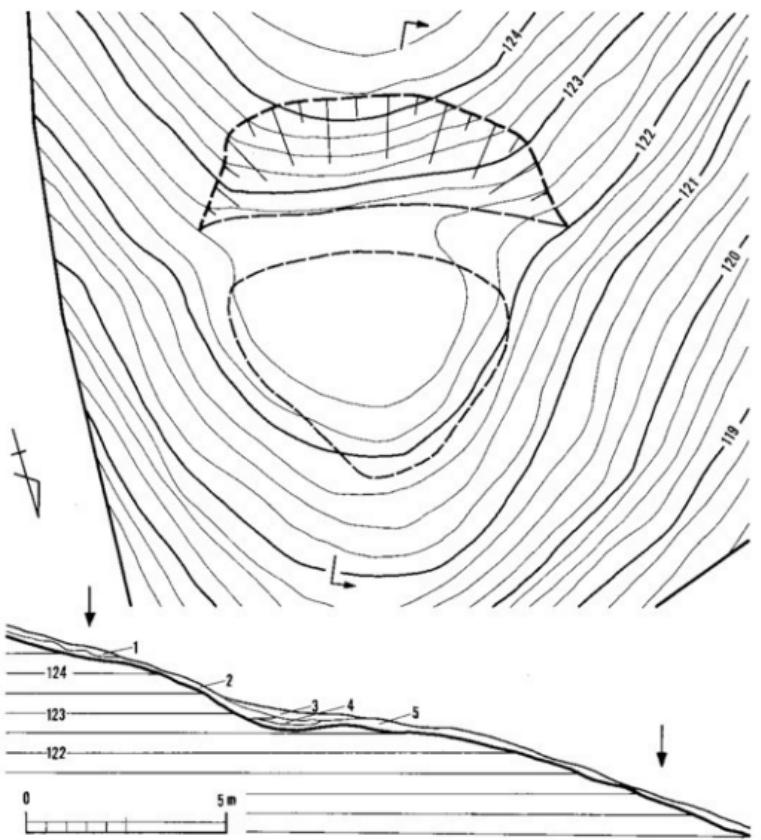
また、B—3号墳に伴なう遺物は1点も出土していない。

## 3. 小結

### ■尾根支群の調査成果

B尾根支群はB—1号墳とB—3号墳の2基の古墳から構成される。いずれも径約7mの円墳で、埋葬施設が明らかとなったのはB—1号墳のみであり、木棺を墓塚内に直葬したものである。B—3号墳についても同様な埋葬施設が存在したものと推定される。

また、B—1号墳においては2基の埋葬施設の存在が確認され、なかでも第2主体部は比較的残存状況がよく、副葬内容についても明らかにすることができた。そして、その副葬品は、鉄製品からなり、玉類などは含まれていない点に本墳の特徴を見出すことができる。



第28図 B-3号填填丘測量図・土層断面図

- 1. 黄褐色土
- 2. 黄茶褐色土
- 3. 黄褐色土
- 4. 糜混り暗灰褐色土
- 5. 暗黄褐色土

## ■尾根支群の築造時期

本群の築造時期を考える上で最も有効となる資料は、B-1号墳第2主体部墓塚内出土の須恵器である。これらの須恵器は、原位置での出土とはいえないが、一括資料として捉えることができる。各器種内において個体差さらには型式差を内包しているが、田辺編年のTK47~MT15型式に収まるものといえる。

また、B-1号墳第2主体部出土鉄製品についても、鉈は古瀬清秀氏のII b類に、鉄鎌は後藤守一氏の片丸造棘鉢を鑄抜模型式に分類され、それぞれ5世紀後半以降にみられる型式とされている。さらに、これらの鉄製品の組合せについても、寺沢知子氏による大和の新沢千塚古墳群を中心に分析された副葬類型のB型にあたり、5世紀後半以降にみられるとされている。<sup>(2)</sup>

以上のことから、須恵器の示す時期と鉄器の示す時期とは矛盾するものではないといえる。したがって、B-1号墳第2主体部については、TK47~MT15型式、つまり5世紀末~6世紀前半に時期を比定することができる。

次にB-1号墳第1主体部及びB-3号墳についてであるが、これらの時期を直接検討する資料は出土していない。しかし、第1主体部については、第2主体部と同一の墳丘内にあることから、その時期と大差ないのではないかと考えられる。またB-3号墳については、一般に尾根稜線上に築造された群集墳は、上方から下方へ築造されていく例が多くみられるところから、この例に該当するならば、B-1号墳よりは新しいとみることもできる。

B尾根支群の中で、その内容が最も明らかとなったB-1号墳第2主体部については、大型の鉄刀をはじめ、鉄斧や鉗など多くの鉄製品の副葬を特徴としている。これは、A・C尾根支群、さらにはほぼ同時期に平行する松ノ本古墳群においても認められない特徴である。<sup>(5)</sup>

これらの鉄製品の組み合わせについては、前掲の寺沢氏の論考によると、同じ類型が大和の同時期の古墳にもみられるということであり、鉄刀の棺内配置についても、被葬者の左肩周辺に副葬されるものは当該期以降の一般的なものであるとされている。<sup>(6)</sup>また、墓塚内への土器の供獻についても、当該期に一般化するという傾向とも一致する。<sup>(7)</sup>

このように、B-1号墳第2主体部出土遺物の内容及びそのあり方は、当該期における大和及びその周辺地域の初期群集墳にみられるそれとの共通性を指摘することができる。したがって本群についても、6世紀以降中央政権との関係を通して展開する群集墳の先駆としての初期群集墳の一つとみることができるのでないだろうか。

### (註)

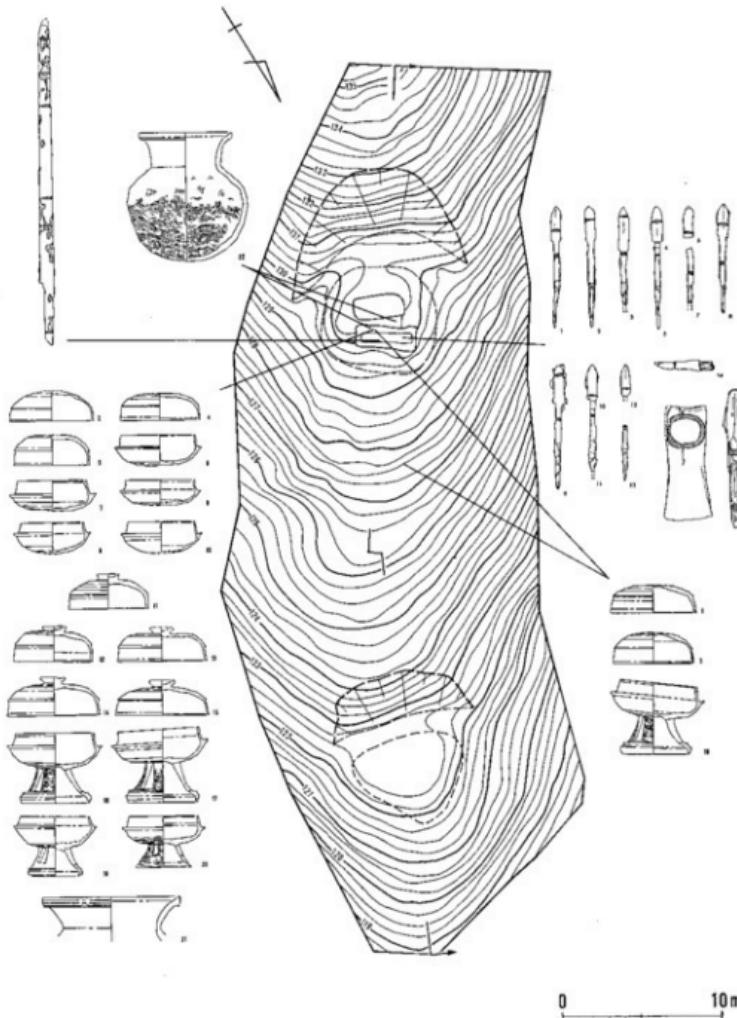
(1) 田辺昭三『陶邑古窯跡群I』平安学園考古学クラブ 昭和41年

(2) 古瀬清秀「古墳出土の鉈の形態的変遷とその役割」『考古論集一慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集一』 松崎寿和先生退官記念事業会編 昭和52年

- (3) 後藤守一「上古代鉄器の年代研究」『日本古代文化研究』河出書房 昭和17年
- (4) 寺沢知子「初期群集墳の一様相」『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズⅠ 昭和57年
- (5) 井守徳男・村上泰樹・山下史朗・西尾知恵子『松ノ本古墳群—近畿自動車道舞鶴線に伴う埋蔵文化財調査報告書(II)一』兵庫県教育委員会 昭和60年
- (6) 泉森 皎「刀剣の出土状態の検討—刀剣の呪術的性格の理解のために—」『末永先生米寿記念 献呈論文集 乾』末永先生米寿記念会編 昭和60年
- (7) 藤原 学「須恵器からみた古墳時代葬制の変遷とその意義」『末永先生米寿記念 献呈論文集 乾』末永先生米寿記念会編 昭和60年



第29図 B尾根支群発掘調査風景



第30圖 B-1號填遺物出土分布圖

### 第3節 C 尾根支群の古墳

C尾根支群は、向山北麓の東端にある尾根の突端およびその北側の急斜面上、標高104~121mにかけて4基の古墳で構成されている。A尾根支群、B尾根支群の古墳がそれぞれ標高140m付近、120~130m付近に位置しているのに比べて、C尾根支群は低い標高に位置し、平野部よりその外形を一望することができる。分布調査でも、多利向山古墳群中早くから確認されており、昭和57年度に調査を実施したものである。

尾根突端にC—1号墳、そこから北東にのびる稜線上にC—2号墳、その西側の斜面にC—4号墳、C—3号墳が築かれている。4基とも円墳で、C—1号墳とC—3号墳は木棺、C—2号墳は横穴式石室を埋葬施設としている。いずれの古墳も地山整形後盛土を行っており、地山削平の際の周溝は顕著であるが、葺石や埴輪などの外部施設は持たない。

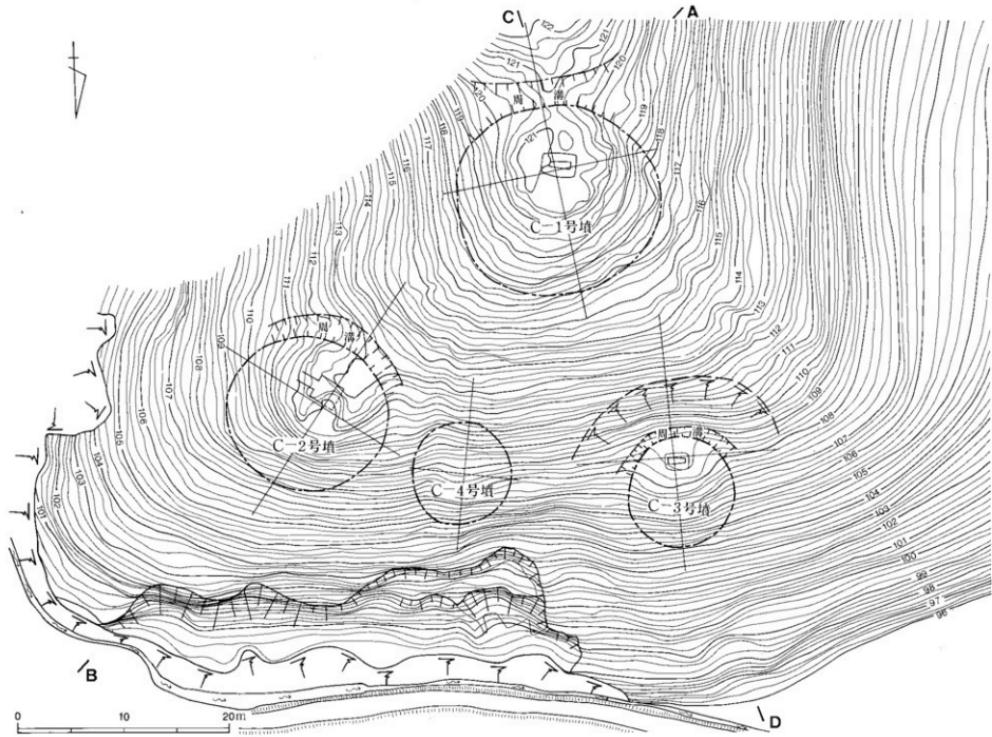
#### 1. C—1号墳

##### a 墳丘

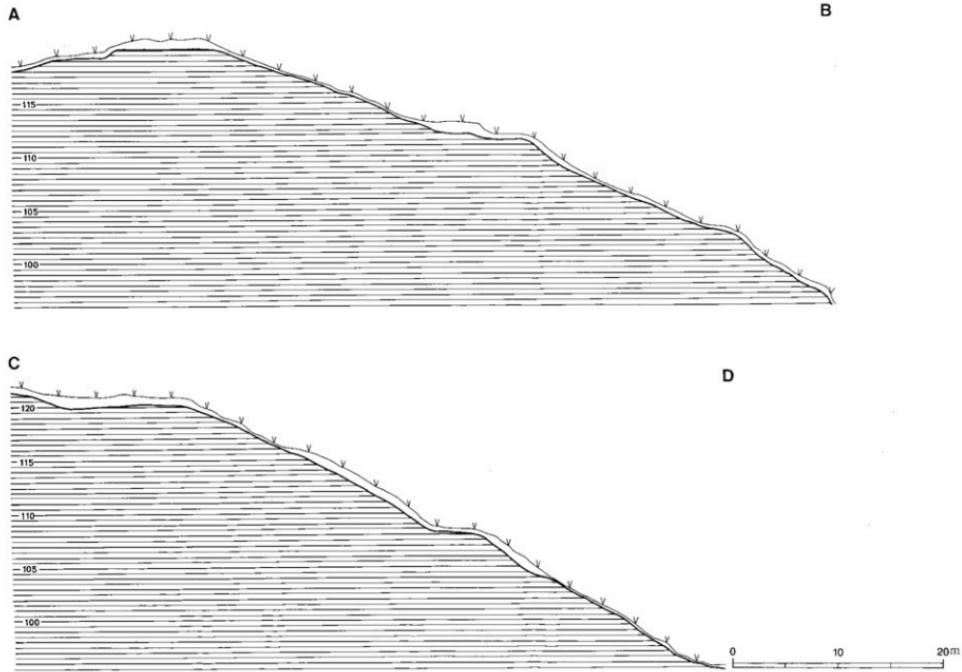
C—1号墳はC尾根支群の最高所に位置し、標高117~121mに立地し、平野からの比高差は約26mである。南側に延びる尾根を幅約3mにわたりて切断して墳丘を造り出している。C—1号墳の現存する墳頂部の標高は121.10mで、墳丘南尾根からの比高差0.5m、確認した墳丘北裾部からの比高差は4.0mで、墳丘約18mの円墳である。斜面にはいたる所岩盤が露呈していて盛土はかなり流出しており墳丘裾部はあまり明確でない。外観的には、標高116~117mのあたりの傾斜が緩やかでテラス状になっており、土層観察からも墳丘裾部を意識して岩盤を整形していることを確認している。調査当初から墳頂部は径7m程度の平坦面となっており、ボーリングステッキによる探査では表土下50~80cmで岩盤面になることが確認されていて主体部がどれだけ遺存しているか疑問もあったが、墳丘を4区画する畦畔を設定して遺構の検出に努めた。

築造当時の墳丘の規模・形態は、盛土の自然流出や後世の削平によってかなり変化していると思われるが、C尾根支群の他の古墳よりも規模は大きい。

墳丘の盛土は、尾根を削平したときの土と、棺を埋置するための墓塙掘削時の土を用いている。築造当初、表土下が地山の岩盤であったと思われ、盛土の大半は岩盤を碎いた赤褐色の角礫混りの土である。このため、当初墓塙の輪郭は不明瞭で、かなり掘り下げて明確な輪郭を検出した。

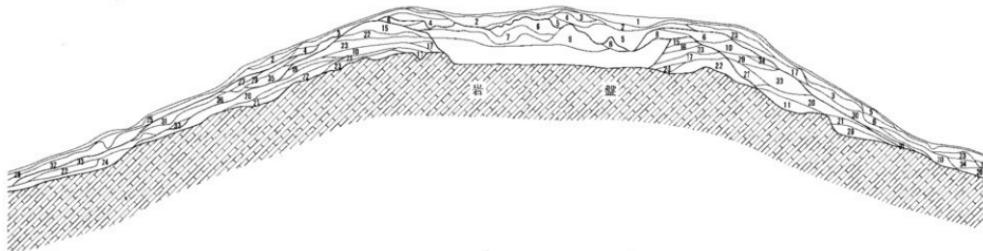


第31図 C高根支群地形測量図(調査前)

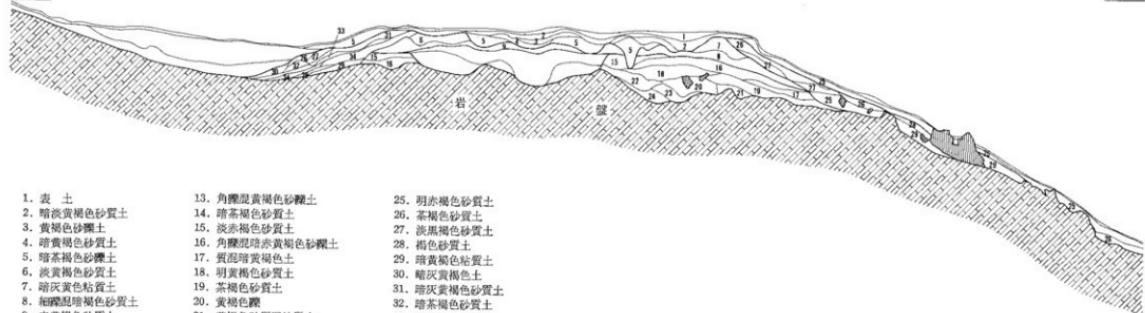


第32図 C 尾根支群土層断面図

L 171.59m



L 171.55m

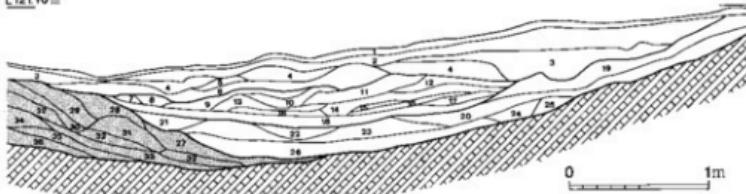


- 1. 表土
- 2. 暗淡黃褐色砂質土
- 3. 黄褐色砂砾土
- 4. 喀斯特褐色砂質土
- 5. 增茶褐色砂砾土
- 6. 淡黃褐色砂質土
- 7. 增灰黃色粘質土
- 8. 細緻堅硬褐色砂質土
- 9. 赤黃褐色砂質土
- 10. 增褐色砂砾土
- 11. 赤褐色砂砾土
- 12. 增褐色砂質土

- 13. 角礫混黃褐色砂質土
- 14. 增茶褐色砂砾土
- 15. 浅赤褐色砂質土
- 16. 角礫混暗赤黃褐色砂質土
- 17. 費潤暗黃褐色土
- 18. 明黃褐色砂質土
- 19. 茶褐色砂質土
- 20. 黃褐色土
- 21. 黃褐色砂質混粘質土
- 22. 黃褐色砂質土
- 23. 淡茶褐色砂質土
- 24. 灰黃褐色砂質土
- 25. 明赤褐色砂質土
- 26. 茶褐色砂質土
- 27. 淡茶褐色砂質土
- 28. 棕褐色質土
- 29. 增茶褐色粘質土
- 30. 增灰黃褐色土
- 31. 增灰黃褐色砂質土
- 32. 增茶褐色砂質土
- 33. 明黃褐色粘質土
- 34. 赤黃褐色土
- 35. 細緻堅硬褐色土
- 36. 細緻弱黃褐色粘質土

0 5m

第33圖 C-1号填土層断面図



- |              |               |                |               |
|--------------|---------------|----------------|---------------|
| 1. 表土        | 10. 暗黄褐色砂土    | 19. 灰黄色砂質土     | 28. 小礫混茶褐色砂質土 |
| 2. 暗黄褐色砂     | 11. 暗黄褐色砂質土   | 20. 朗灰黄色砂質土    | 29. 淡灰褐色砂質土   |
| 3. 暗灰黄色砂砾土   | 12. 灰黄色砂質土    | 21. 淡茶褐色砂質土    | 30. 暗灰黄褐色砂質土  |
| 4. 暗黄褐色砂質土   | 13. 淡暗黃褐色砂質土  | 22. 蘭黃褐色粘質土    | 31. 暗茶褐色砂質土   |
| 5. 暗灰黄色砂質土   | 14. 小礫混暗褐色砂質土 | 23. 赤黄色粘質土     | 32. 明黃褐色粘質土   |
| 6. 暗黄褐色砂砾土   | 15. 黄褐色砂質土    | 24. 明黃褐色砂質土    | 33. 灰黄色土      |
| 7. 暗黄褐色砂     | 16. 淡暗黃褐色砂質土  | 25. 黑色土混黃褐色砂質土 | 34. 赤黄褐色土     |
| 8. 淡暗黃褐色砂質土  | 17. 黄褐色砂質土    | 26. 黑色砂質土      | 35. 灰黄褐色土     |
| 9. 小礫混暗褐色砂質土 | 18. 暗灰黄色粘質土   | 27. 暗灰黄褐色土     | 36. 混泥暗褐色土    |

第34図 C-1号墳周溝断面図

墳丘の構築は、地山の掘削土を用いて、径10m程度に墳丘の形を整えて盛り上げた後、暗褐色砂質土と暗黄褐色砂質土を化粧土的に用いて、墳形を大きくしている。これら上層の盛土が砂質土であるため、自然流出が激しかったと思われ、墳頂部はもちろん、墳丘裾部においてもどれだけの盛土がなされていたかは不明である。

墳丘裾部については、北側斜面の標高104m付近から傾斜がなだらかになり、ややテラス状を呈していることから、墳丘裾を形成するための地山整形がなされたと思われ、標高104m付近を北側の墳丘裾と判断した。

#### 周溝

C-1号墳の南尾根側には、墳丘を整形する際に尾根を切断してつくられた周溝がみられる。長さは14m以上にわたっており、溝幅は約5.3m、深さは0.8mを測る。この周溝は東と西側の両端は、斜面の傾斜に沿って自然消滅している。周溝の北墳丘側は盛土を南尾根側は地山の岩盤を溝肩としている。溝底には、黒色砂質土が堆積している。土層観察から、周溝内の堆積は一時期に埋ったものではなく、ある期間をおいて2回程度に堆積して埋没したと思われる。

#### b 埋葬施設

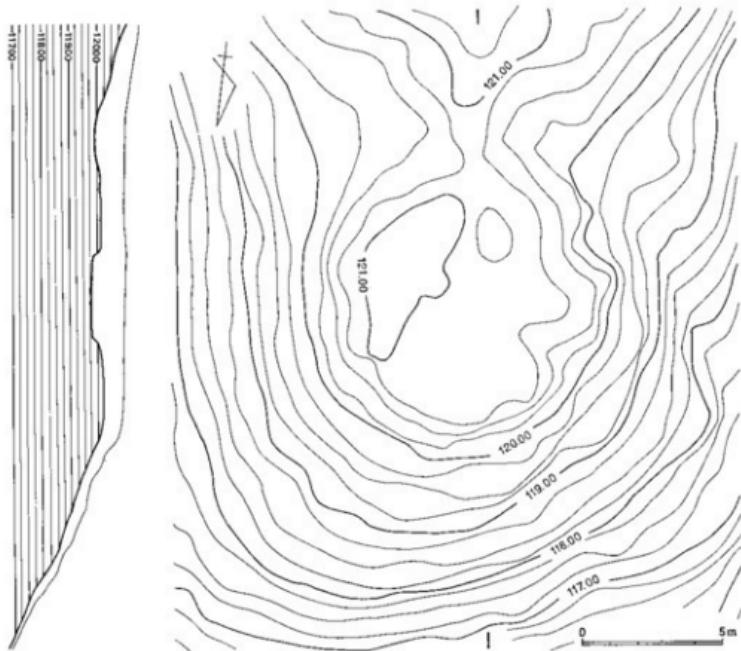
C-1号墳の埋葬施設としては、墳頂部中央で主軸を東西方向におく木棺直葬墓1基が検出されている。

墓塚の規模は、主軸東西方向で5.3m、主軸に直交した南北方向で3.4mを測る。

木棺は、当初箱形木棺を想定して調査していたが、墳丘の構築状況を確認するために木棺の一部を断ち割りして地山面まで掘り下げたところ、棺底部分より下方へ8cm程度さらにU字状に掘りくぼめているのを確認した。このため、棺周囲を少しづつ掘り下げて精査したところ、墓塚の底面を棺の周囲を長さ4.4m、幅1.25m、深さ8cmの規模で、地山の岩盤をU字状に浅く掘りくぼめている状況を検出した。この墓塚底面の状況と棺埋土の堆積状況、棺内で検出した赤色顔料の遺存状態から判断して、埋葬された木棺は割竹形木棺であったと思われる。

棺底は、墓塚底より約5~8cm程度高くなっている。木棺の長さは3.8m、検出した棺の幅は75cmを測ることができたが、その最大径は、90~100cm程度はあったものと想定される。検出した棺の深さは中央部において約55cmを測るが、棺底の東側は西側より約7cmほど高くなるように置かれていることから、東枕であったと思われる。

棺内西側に置かれた鉄鎌の一握には、棺材と思われる木質部が接着していたが、それ以外の場所には、棺材の遺存は認められなかった。また、礫床や排水設備等の諸施設は認められなか



第35図 C-1号墳墳丘測量図（調査前）

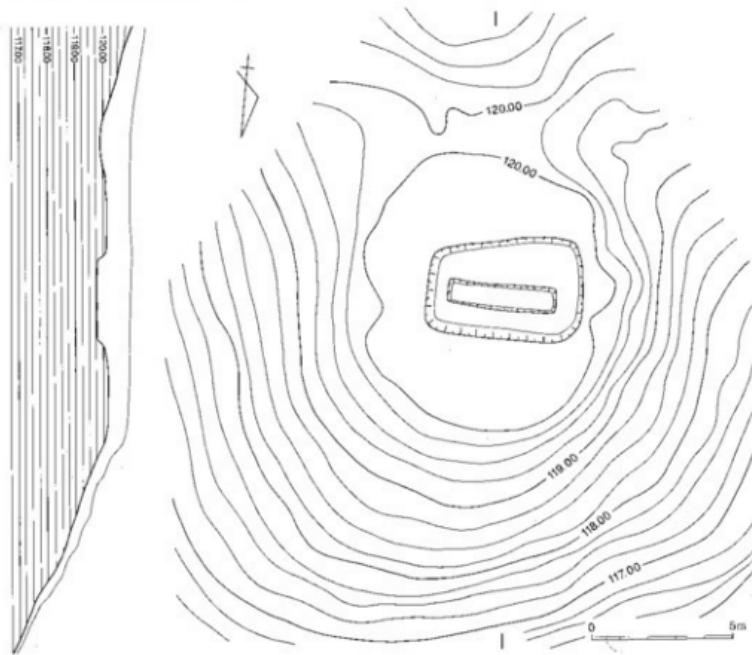
った。

棺底の二段墓塚を確認するために、棺検出面より周囲を10cm程度掘り下げた際に墓塚内副葬品として、木棺東木口北側にて須恵器の一群が置かれていた。これら的一群は、棺検出時においては姿を現わしていなかったものである。

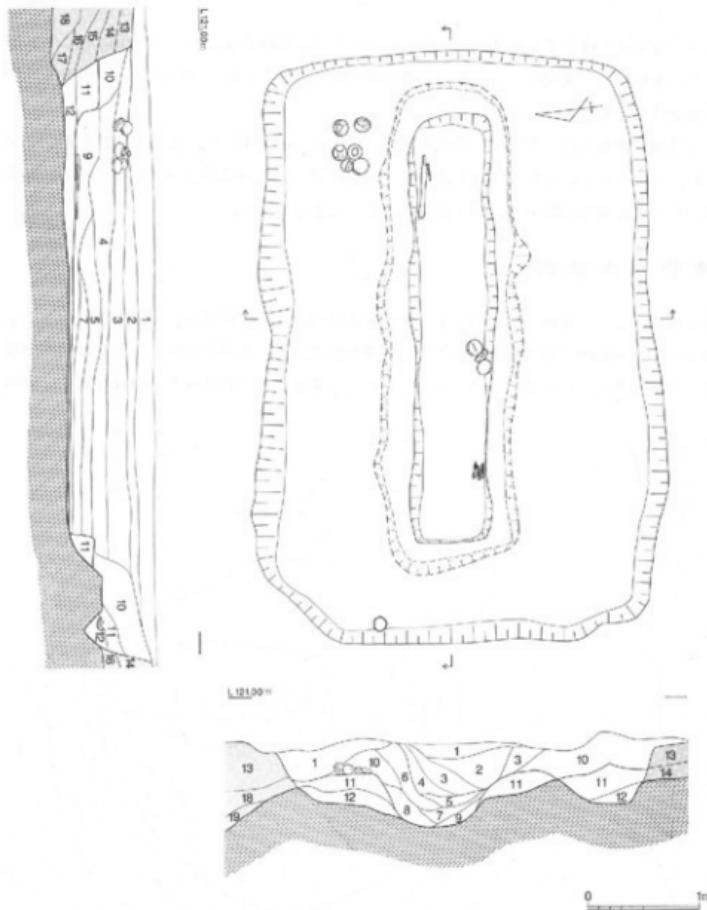
C-1号墳の埋葬方法としては、墓塚掘削後、墓塚底面の中央部に割竹形木棺を安置しやすいうように、さらに地山の岩盤をほりくぼめて木棺を安置し、棺の周囲を30cm程度埋めて、副葬品を置いたのちに墓塚を埋めて、棺上副葬品を置いたと思われる。

### c 遺物出土状況

棺内副葬品として、鉄劍1、鉄刀子1、鉄鎌6が検出された。鉄劍は、北側板に平行して東木口板より30cm~80cmの間で刃先を西に向けて置かれていた。鉄刀子と鉄鎌の一群は、南側板に平行して鋒先を西に向けて置かれていた。棺底は、東側が西側に比べて7cm程度高く、遺物



第36図 C-1号墳墳丘測量図(調査後)



- |             |               |             |
|-------------|---------------|-------------|
| 1. 赤黃褐色砂質土  | 8. 暗褐色砂質土     | 15. 淡茶褐色砂礫土 |
| 2. 暗茶褐色砂質土  | 9. 砂礫混暗赤黃色土   | 16. 磨混暗黃褐色土 |
| 3. 茶褐色砂礫土   | 10. 大體混黃褐色砂礫土 | 17. 黃褐色土    |
| 4. 淡黃黃褐色砂礫土 | 11. 暗褐色砂礫土    | 18. 黃褐色砂質土  |
| 5. 赤褐色砂質土   | 12. 赤褐色砂礫土    | 19. 灰黃色砂質土  |
| 6. 喀褐色砂質土   | 13. 淡赤褐色砂質土   |             |
| 7. 砂礫混赤黃色土  | 14. 暗赤黃褐色砂礫土  |             |

第37圖 C—1號墳主體部

の出土状況からも、被葬者は東枕であったことが想定される。

棺底付近全面に赤色顔料を検出した。棺内で検出した鉄鎌類には、棺材と思われる木質部が锈着して遺存していたが、それ以外では、明確に棺材と認められるものは検出されていない。

棺外遺物としては、墓塚内において東木口北側と北西墓塚隅の2カ所において、木棺がなれば埋められた段階で置かれた須恵器の一群を検出している。東木口北側に置かれた須恵器の一群は坏の蓋身がセットで4組、蓋付短頸壺1、短頸壺1であるが、坏類の半分近くは土圧で破砕されていた。墓塚北西端隅では須恵器の坏の蓋身がセットで1組置かれていた。

また、棺上遺物として須恵器の坏蓋2と坏身1を検出している。これらは墓塚を埋めた段階で置かれた副葬品が棺の腐朽とともに棺上にずり落ちたものと思われる。

#### d 出 土 遺 物

C—1号墳からは、須恵器・鉄製品が出土している。棺内出土遺物は鉄製品のみで、鉄剣1、鉄鎌6、刀子1である。墓塚内副葬遺物としては、棺蓋上付近より須恵器坏蓋2、坏身1、棺東側木口の南付近より一括で須恵器蓋身4セット、蓋付短頸壺1、短頸壺1、墓塚北西隅より蓋身1セットが出土している。墳丘斜面からも須恵器坏片、縫片、壺口縫片、甕口縫片、刀子片などが出土しているが、坏の完形品もあり、墳丘上に副葬されていたものが後世の擾乱で散乱して転落したものと思われる。

#### 1. 土 器 (第38図)

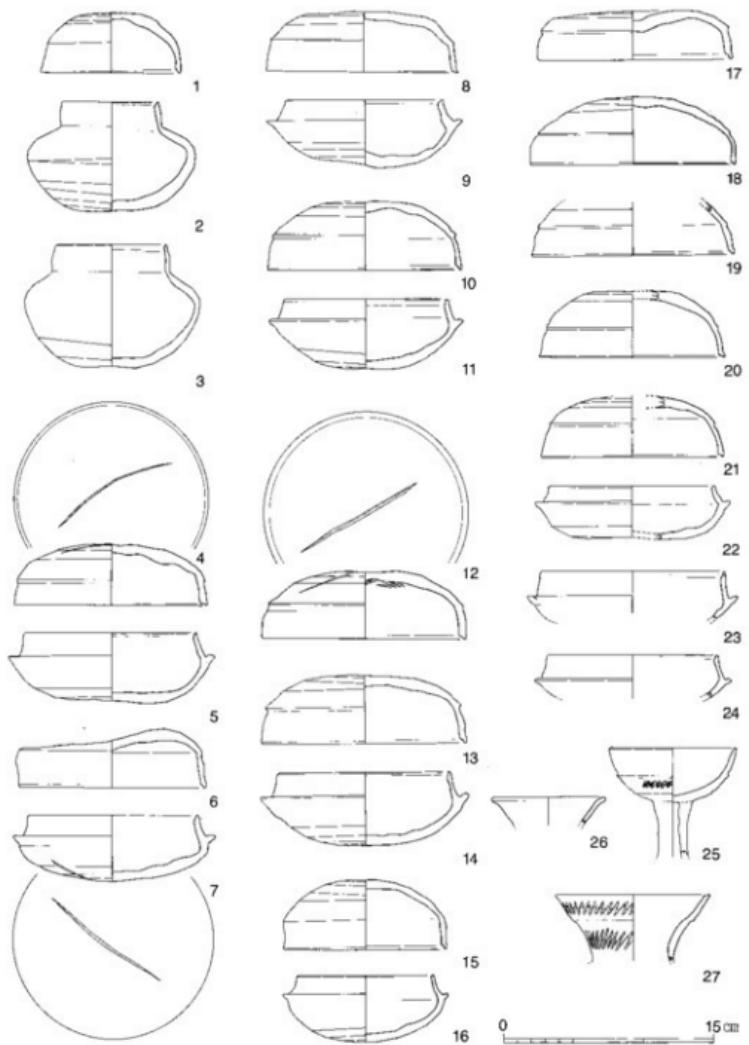
出土した土器はすべて須恵器である。器種としては、蓋坏・短頸壺・高坏・縫片・甕などがある。坏はセット関係で出土したものが6ある。坏蓋の口径は14.4cm (12・13・18) ~11.4cm (15)、坏身の口径は13.0cm (23) ~9.6cm (16) のものがあり、15・16以外は法量的にはあまり差がみられない。全体的に歪みがあり端正なつくりではないが、墓塚内副葬のものは形態的に類似しており、田辺編年のMT15型式の特徴を示している。

#### 2. 鉄 製 品

##### 鉄剣 (第40図)

全長54.5cm、身部長41.7cm、身幅中央部で3.5cm、身の断面は菱形を呈し厚さは0.7cm、柄部長12.8cm、関部幅3.9cm、柄尻で幅1.7cm、断面は矩形を呈し厚さ約0.5cmである。関の部分には鈎の跡が明瞭にみられる。目釘穴は柄尻から1.1cmと4.6cmの所に径0.4cmのものが2カ所X線透過撮影で認められる。木質の遺存状態は良く、身部1/3と柄部のほとんどは木質で覆われている。柄部での木質部を含めた厚さは1.9cmである。

##### 刀子 (第39図7・8)



第38図 C—1号出土土器

第5表 C-1号墳出土土器観察表

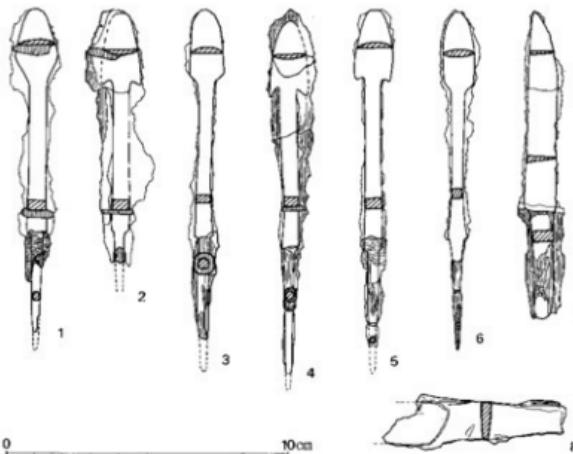
番号	器種	法量(cm)	出土地	形態	技法	備考
1	蓋 (短頸壺)	口径 9.8 器高 4.3	棺外 墓塚内 西一群	口縁部はやや外反しているが、直立に近い。天井部と口縁部を画する接はほとんどない。	天井部%へラ削り。ロクロは左回転	短頸壺蓋 2とセット
2	短頸壺	口径 6.8 器高 7.9	棺外 墓塚内 西一群	短く立つ口縁部で、口縁端面に段をもつ。	外面肩部中央部より底部にかけてへラ削り。ロクロは右回転。	蓋付で出土 1とセット
3	短頸壺	口径 7.7 器高 8.8	棺外 墓塚内 西一群	短く立つ口縁部で、口縁端部に浅い段をもつ。器壁は薄い。	外面肩部%へラ削り。ロクロは右回転	
4	环 蓋	口径 13.7 器高 4.4	棺外 墓塚内 西一群	口縁部はふくらみをもつて内彎したのち、やや外反する。天井部との境で浅く鋭い接をなす。	天井部%へラ削り。ロクロは左回転。天井部に1条のへラ記号。	
5	环 身	口径 12.1 器高 5.1	棺外 墓塚内 西一群	口縁部は内傾して立ち上り、端部は凹面をなす。受部は上方にのび、端部は丸い。	外面底部%へラ削り。ロクロは右回転	
6	环 蓋	口径 13.1 器高 4.3	棺外 墓塚内 西一群	口縁部は垂直に内彎して下り、端部は凹面をなす。	外面底部%へラ削り。ロクロは右回転。	7とセット 金体に重み がひどい
7	环 身	口径 12.0 器高 4.8	棺外 墓塚内 西一群	口縁部は内傾して立ち上り、端部は丸い。受部は水平方向にのび、端部は丸い。	外面底部%へラ削り。ロクロは右回転。底部に1条のへラ記号	6とセット
8	环 蓋	口径 13.6 器高 4.3	棺外 墓塚内 西一群	天井部と口縁部を画する接は短く鋭い。端面はほとんど段をもたない。	天井部%へラ削り。ロクロは右回転。	9とセット
9	环 身	口径 11.0 器高 4.9	棺外 墓塚内 西一群	口縁部は内傾して立ち上り、端面は浅い凹面をなす。	底部%へラ削り。ロクロは右回転。	8とセット
10	环 蓋	口径 13.6 器高 4.9	棺外 墓塚内 西一群	天井部と口縁部を画する接は鋭い。口縁部端面は浅い凹面をなす。	天井部%へラ削り。ロクロは左回転。天井部内面中央に不整方向ナデ調整。	11とセット
11	环 身	口径 11.5 器高 5.0	棺外 墓塚内 西一群	口縁部は内傾して立ち上り、端面は浅い凹面をなす。	底部%へラ削り。ロクロは右回転。	10とセット
12	环 蓋	口径 14.4 器高 4.9	棺上	天井部と口縁部を画する接は鋭い。口縁部は直立ぎみで、端面は浅い凹面をなす。	天井部%へラ削り。ロクロは左回転。天井部内面中央に青海波の叩き痕。天井部に1条のへラ記号	13、14と一括出土
13	环 蓋	口径 14.4 器高 4.8	棺上	天井部と口縁部を画する接は短くてやや锐い。口縁部は内彎したのちゆるく外反し、端面に段を有する。端部に部分的にワラ状の圧痕がある。	天井部%へラ削り。ロクロは右回転。	12、14と一括出土
14	环 身	口径 12.1 器高 5.3	棺上	口縁部は内傾して立ち上り、端面は凹面をなし、器壁は比較的薄い。受部は上方にのび、端部は丸く厚い。	底部%へラ削り。ロクロは右回転。底部内面中央に不整方向のナデ調整。	12、13と一括出土
15	环 蓋	口径 11.4 器高 5.0	棺外 墓塚内 東端	天井部と口縁部を画する接はほとんどない。口縁部は内彎ぎみに直立しており、端部に段をもつ。	天井部%へラ削り。ロクロは左回転。	16とセット

番号	器種	法量(cm)	出土地	形態	技法	備考
16	坏身	口径 9.6 器高 4.8	塙外 墓地内 東端	口縁部は内傾して立ち上り、 端部は丸い。器壁は比較的薄い。	底部%へラ削り。ロクロ は右回転	15とセット
17	坏蓋	口径 13.8 器高 3.6	埴丘掘 面	天井部と口縁部を画する後は やや続い。口縁部の器壁はや や厚く端部は凹面をなす。	天井部%へラ削り。ロク ロは左回転。	天井部の 重みがひど い。
18	坏蓋	口径 14.4 器高 4.9	埴丘掘 南西斜 面	天井部と口縁部を画する後は 鋸い。口縁部はふくらみをも って内窓し、端部に浅い段を もつ。	天井部%へラ削り。ロク ロは左回転。	口縁部%欠 損
19	坏蓋	口径≈14.1 器高(3.7)	埴丘掘 南西斜 面	天井部と口縁部を画する後は 丸くて鋸い。口縁部はふくら みながら外反し、端部は浅い 凹面をなす。	天井部%へラ削り。ロク ロは左回転。	破片%残存
20	坏蓋	口径≈13.0 器高≈4.8	埴丘南 西及 南東斜 面	天井部と口縁部を画する後は 短く鋸い。口縁部はふくら みながら外反し、端部は浅い凹 面をなす。	天井部%へラ削り。ロク ロは左回転。	破片%残存
21	坏蓋	口径≈12.8 器高≈4.3	周溝内 黒色土	天井部と口縁部を画する後は 短く鋸い。口縁部はやや厚 く端部は浅い凹面をなす。	天井部%へラ削り。ロク ロは左回転。	破片%残存
22	坏身	口径≈11.6 器高≈3.9	周溝内 埴丘南 西斜面	口縁部は内傾して立ち上り、 端部は丸い。受部は外上方に のび端部は丸い。	底部%へラ削り。ロクロ は右回転。	破片%残存
23	坏身	口径≈13.0 器高(3.5)	埴丘掘 南西斜 面	口縁部は直立ぎみにやや内傾 して立ち上り、端部は段をも つ。器壁は比較的薄い。	底部%へラ削り。ロクロ は右回転。	破片%残存
24	坏身	口径≈12.0 器高(3.1)	埴丘掘 南西斜 面	口縁部は内傾して立ち上り、 端部は浅い凹面をなす。	回転ナデ調整。	破片%残存
25	高坏	口径≈8.9 残存高 7.8	表土下 北西斜 面	坏口縁部は外上方にのび、端 部は丸い。2条の凸縫は丸く て鋸いが、その間に7条の波 状文を施す。脚部3方にスカ ンを有する。	回転ナデ調整。	破片%残存
26	壺	口径≈7.8 残存高 2.0	埴丘掘 北斜面	口縁部は外反し、端部は丸い。	回転ナデ調整。	破片
27	瓶	口径≈10.8 残存高 4.8	埴丘掘 北斜面	口頭部上位に1条の鋸い凸縫 がめぐり、4条の波状文が2 段施されている。	回転ナデ調整。	口縁片
28	瓶	口径≈7.8 残存高 2.0	埴丘掘 北斜面	口頭部は外上方にのび、端部 は丸い。	回転ナデ調整。	口縁片
29	瓶	口径≈15.0 残存高 5.5	埴丘南 西斜面	口頭部はやや直立ぎみに外上 方にのび、口縁部で水平に屈 曲し、端部は丸い。	回転ナデ調整。	口縁片
30	瓶	口径 16.8 残存高 7.9	埴丘南 西斜面	口頭部は外上方にのび、口縁 部で外方に屈曲する。	体部内面同心円タタキ、 外側平行タタキ痕あり。 他は回転ナデ調整。	体部上部の み残存
31	壺	残存高14.9 底径12.4	埴丘南 西斜面	肩部はほぼ直角にひらき体部 で最大径をなし、内方に屈 曲して下る。高台をもつ。	回転ナデ調整。	口縁部欠損

7は棺内出土のもので完形である。全長10.9cm、刃部6.9cm、刃部断面は三角形を呈し厚さは背部で0.2cm、柄部長4.0cm、柄部幅0.7cm、柄部断面は長方形で厚さは0.4cmである。柄部には木質が遺存している。8は墳丘埋土中より検出したもので、刃部が欠損している。残存長6.5cm、柄部長4.3cm、柄部幅1.2cm、柄部の厚さは中央部で0.3cmある。

#### 鉄劍（第39図1～6）

棺内より一括出土した一群で、有抜柳葉式の鐵が3本（2・4・5）、尖根式の鐵が3本（1・3・6）ある。いずれにも木棺の棺材の木質部が片面に銹着している。すべて完形であったが、基端部が欠損しているものは取り上げ時によるものである。6のみが両丸造で、全長12.0cm、鐵身長8.0cm、茎長4.0cm、双部長2.8cm、刃部の厚さ0.2cmである。他のものはすべて片丸造であるが、逆刺の有無や、鐵身の長さなど少しづつ異なり一定していない。



第39図 C-1号墳出土鐵製品



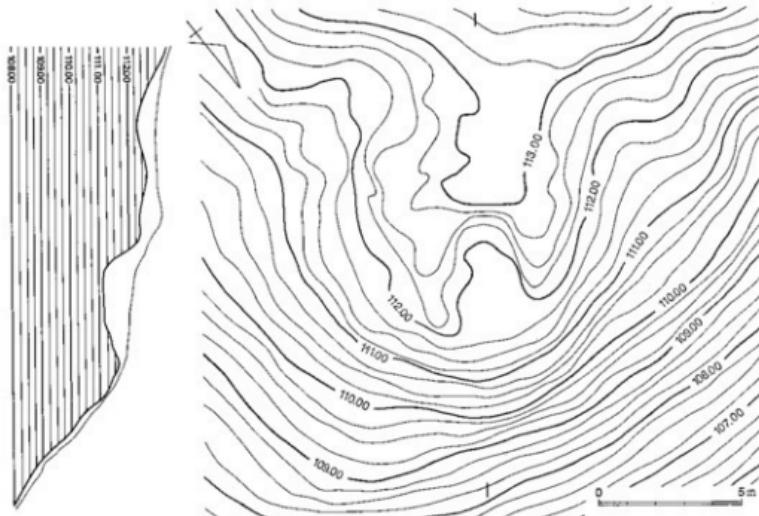
第40図 C-1号墳出土鐵劍

## 2. C—2号墳

### a 墳丘

C—2号墳はC—1号墳の北東方向の尾根を下った位置にあり、C—1号墳との墳頂距離は約30mである。標高は108~113mであり、C—1号墳との比高差は調査前では約8mを測る。調査前には径14.5m、高さ2.5m程度の隆起が認められたが、墳頂部は既に盗掘を受けており、4.4m×3.6m、深さ1mの擾乱塗が存在していた。内部構造は、ボーリングステッキによる探査によって、横穴式石室であることが考えられた。しかし、天井石はすでに除去されており、石室の高さについても遺存状況は良好ではないと思われた。

現存する墳頂部の標高は112.25mで、墳丘北東裾からの比高差2.75m、墳丘南西尾根側からの比高差は約0.2m、墳径約11.5mの円墳である。しかし墳頂部および墳形、規模とともに、盛土の自然流出や後世の盗掘等の擾乱により、築造当時の規模、形態はかなり変化しているものと思われる。それは、墳丘東側と北側の等高線の密度の違いを見ても明らかであろう。また、外部施設は、南西尾根側には幅約3.5mの周溝状の遺構が存在し、古墳の北側および東側にものびており、古墳裾を三日月状に巡っている。



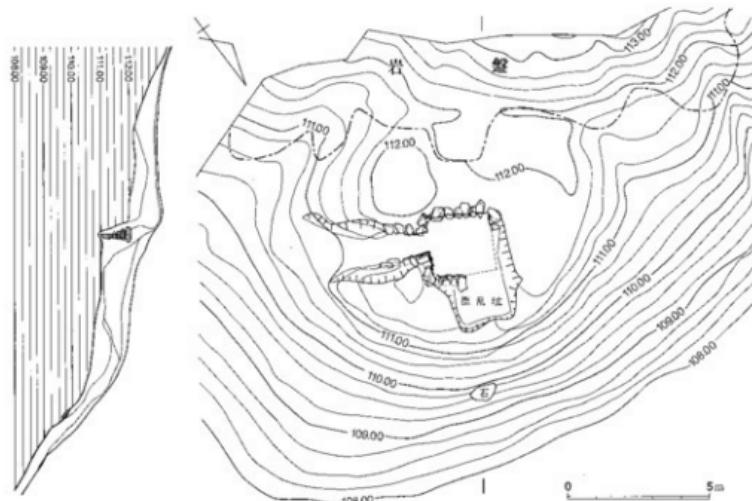
第41図 C—2号墳墳丘測量図(調査前)

盛土は、築造過程の整形時および墓塗掘削時の土と、尾根を若干削った土を用いたと思われる。土塗の方法としては、尾根側では石室の構築と同時に石室の裏側に土を埋め、石室掘り方の上面まで達した所で、整形面の上に暗黄褐色土と茶褐色土を交互に平坦に盛り、のち赤褐色土で墳丘端に近い部分を盛っている。次に石室周囲から順に外側へ黄褐色系、茶褐色系、赤褐色系の土を盛る。この際、墳丘規模を先ほどの段階より大きくしている。尾根の下側では、石室構築のための岩盤整形のちその掘削土を積み、その上に灰黄色土と明黄褐色土、赤黄褐色砂質土を盛り、さらにその上に黄褐色系の土を盛りあげている。上部については盛土と流土の区別がつけ難いが、周溝内埋土と同じ黒色土が認められることから、この土層は古墳築造後の堆積土であろう。また、その下層の淡暗褐色土については、墳塗近くの層下より30×40cmの石が認められ、これは墳形を規定するために置かれた石と考えられる。

なお、この土層から最上層にかけては多くの遺物を含んでおり、特に墳丘北東裾および渓道南東部で集中して認められた。したがってこの土層については後の流土あるいは追葬時の再盛り土であると思われる。

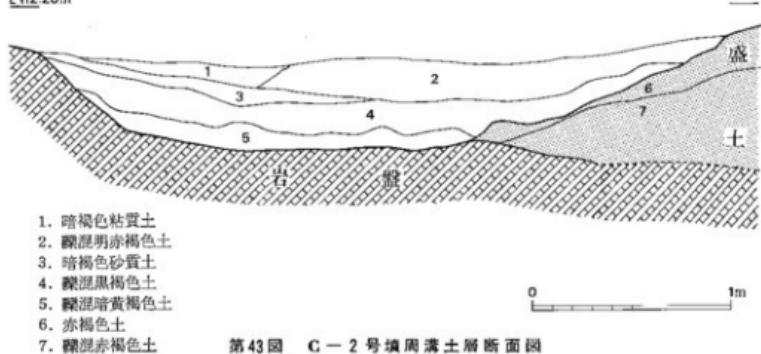
#### 周溝

C-2号墳の尾根側には墳丘を馬蹄形に巡る周溝が存在する。長さは14m以上にわたって検出され、最も広い所の幅は3.5m、深さは0.6mを測る。中央附近の状況をみると、周溝の両



第42図 C-2号墳墳丘測量図（調査後）

L 112.20m



1. 暗褐色粘質土
2. 麻混明赤褐色土
3. 暗褐色砂質土
4. 麻混黒褐色土
5. 麻混暗黃褐色土
6. 赤褐色土
7. 麻混赤褐色土

第43図 C-2号墳周溝土層断面図

端は斜面の傾斜に沿って消滅している。尾根から約2%の所までは岩盤、残りは墳丘盛土を溝底としている。埋土は上から腐植土、やや粘質の暗褐色土、明赤褐色土、やや砂質の暗褐色土、黒褐色土、暗黄褐色土である。このうちの黒褐色土はC-1・C-3号墳の周溝にも認められ、C-2号墳の墳丘斜面に堆積しているものと同一である。

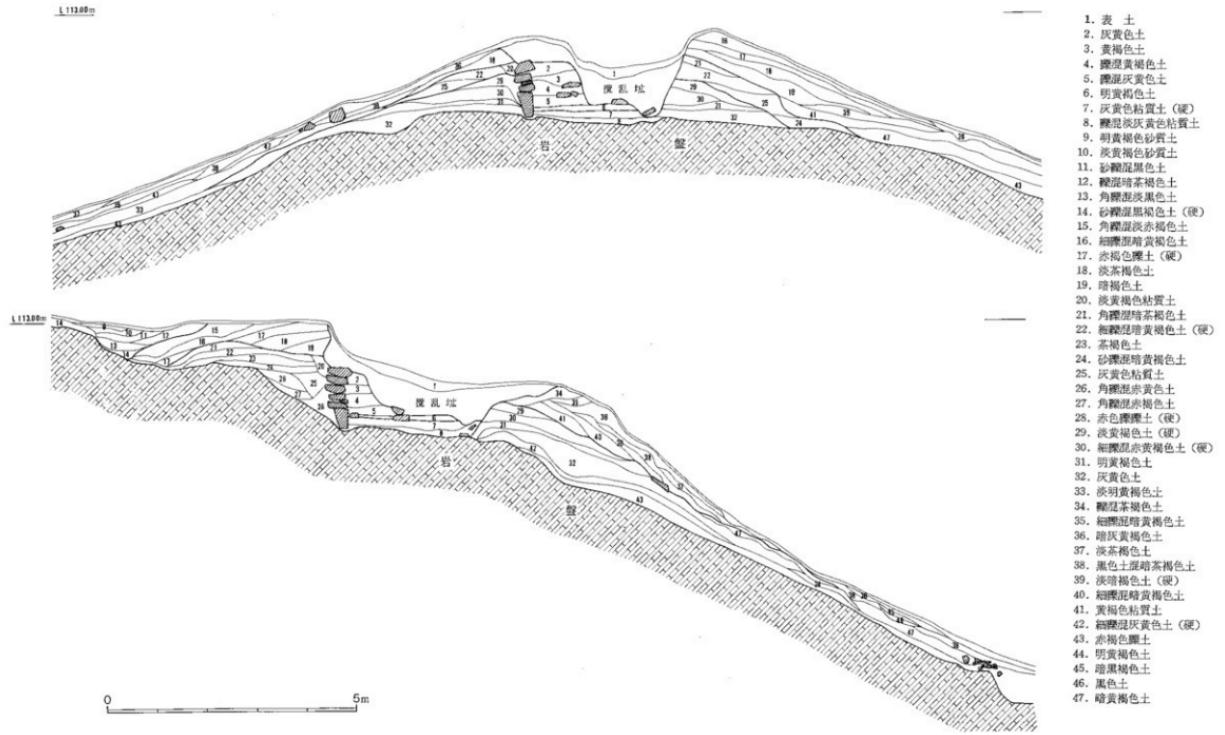
墳丘北東裾には前述の石が数個認められた。この石については、葺石の存在を当初想定したが、数個存在するのみであり、下に転落した状況も認められなかった。また、この石が存在していたのは墳丘北裾で、他には検出していないため、列石の可能性も低いと思われる。したがって墳形、規模を規定するために置かれた石であると想定した。

### b 埋葬施設

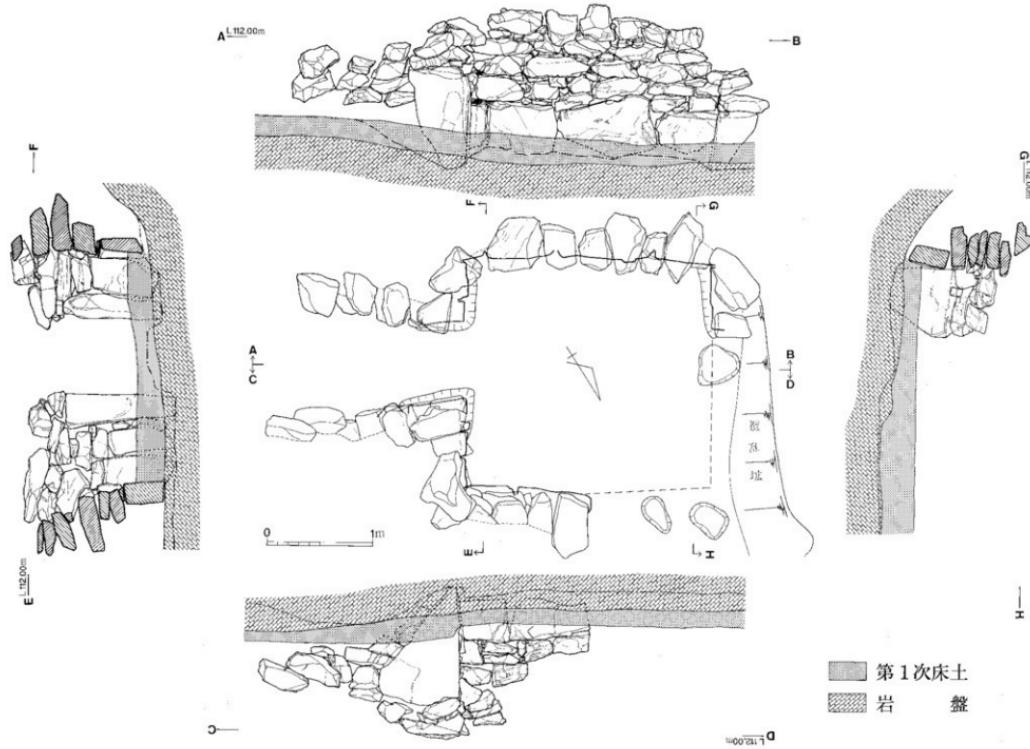
埋葬施設は横穴式石室で、主軸をN59°Wにとり、南東に開口している。調査当初、すでに盗掘等による擾乱で、羨道部、玄室部の天井部、奥壁、北側壁部が大きく破壊されていたが、かろうじて、基底部の石の残存と、石の抜き取り穴の痕跡より、石室の平面規模を知ることができた。石材は基底部以外は総じて小さい。

石室は、方形に近い玄室と、短くハの字形に開く羨道部からなっており、両袖式の横穴式石室である。築造時の床面のレベルは羨道部が玄室よりも約20cm高い。

奥壁から羨門までの石室全長は4.20m、玄室長は主軸上では2.25m、左側壁では2.4m、右側壁推定2.23m、玄室の幅は、奥壁部で推定2.26m、中央部で2.25m、玄門部で2.13mであり、奥壁部の方が幅広くなっている。天井石が残存していないため玄室の高さは不明であるが、左側壁で5段の石組が残存しており、第1次床面までの現存高は1.27mを測る。左側壁上



第44図 C-2号填土層断面図



第45圖 C-2號填橫穴式石室平面圖

部は下から4段目より、わずかに玄室内側に傾斜して持ち送りの様相を示している。右側壁は殆んど破壊されていたが、最も良好に残存していた部分の高さは0.67mである。

玄門部は長方形の石を立てて玄門とし、他の袖石は基底石のみ石を立てている。玄門幅0.72m、袖部幅は左側で0.52m、右側で0.83mと右袖の方が0.31mが広い。玄門の高さは不明であるが、残存高は第1次床面から0.75mである。玄門部および奥壁の持ち送りについては、残存状況が良好でないため、不明といわざるを得ない。

羨道部は玄室とは違って乱雑な組み方となっており、1～3段遺存していた。石材についても玄室とは異なり、基底石も上段の石も大きさは変わらない。また、基底石は羨道床面よりも上の位置に据えられている。玄門から羨門に向かってハの字形に開く形状を示し、羨門幅は97cmを測り、玄門よりも25cm広くなっている。羨道部全長は1.83m遺存し、高さは左側壁で84cm、右側壁で92cmを測る。羨道内には石室破壊の際の石が乱雑に落ち込んでいた。玄室同様天井石は残存していなかった。また、石材の積み方は羨門部に近づくにつれ粗雑になっている。なお、玄門部床面には石が9個山形に積まれた状態を検出し、閉塞石と考えられる。

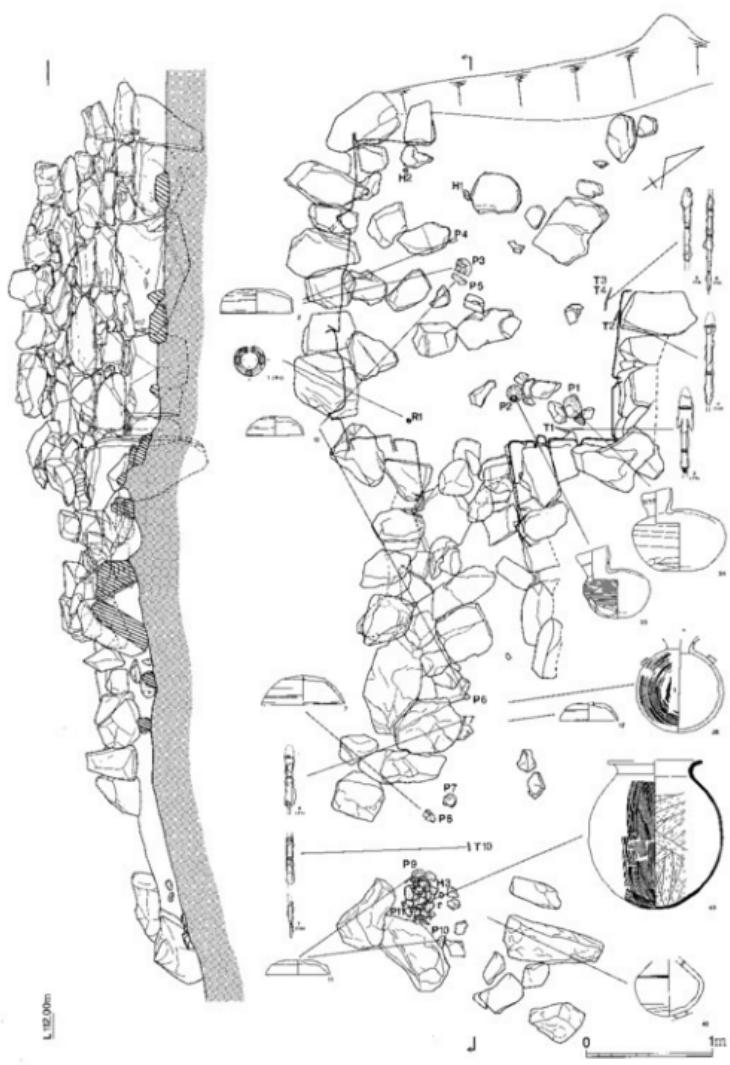
羨門部から墳裾にかけて、墓道および前部とを考えられる掘り割りが存在し、全長2.3m、幅2.3～2.6mで、墳裾でのハ字形に開いたのち傾斜に沿って消失している。深さは57cmである。この部分にも石材の散乱が認められ、須恵器、土師器、鉄器、耳環が出土した。

#### 石室構築状況

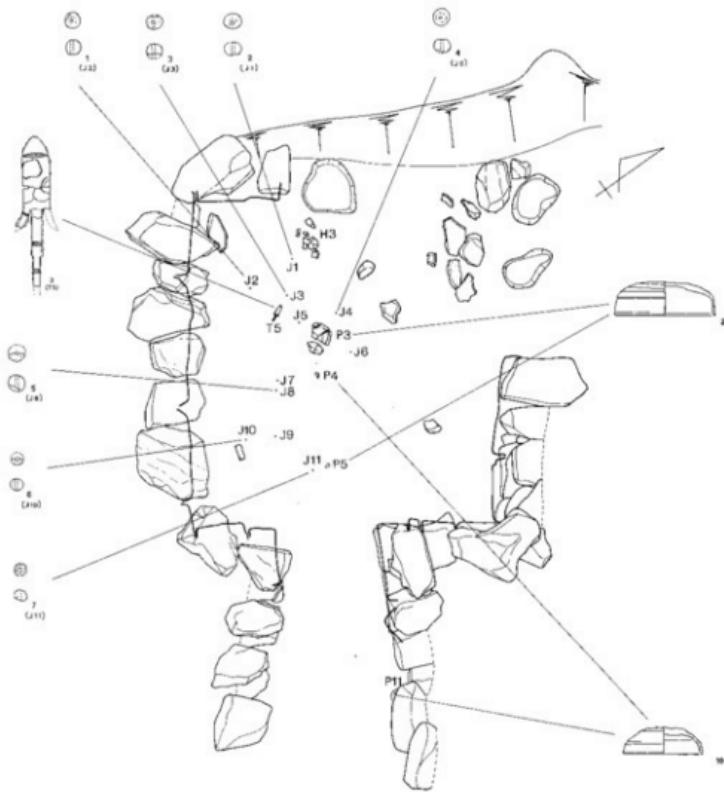
石室は、地山（岩盤）を削平したテラス状の面を、さらに墓塗として尾根側部分を90cm掘り下げている。次に、石室基底石を設置するために、掘削した岩盤部分をさらに10cm程度掘り凹めて石を安定させている。基底石と墓塗との間には、10～15cm程度の余裕がある。基底石を据えたのち、側壁を積みあげながら裏側を埋めているようであるが、裏込め石は全く認められず、岩盤掘削残土を使用している。斜面下側の側壁は、尾根側基底石設置後赤黄褐色土および黄灰色土を盛り、水平な床面を形成したのち、基底石を据えている。石を安定させるための掘削は認められない。羨道部および墓道、前部は墓塗掘削と同時に掘り回めたと思われ、羨道部では床面より若干高い位置より石材を積んでいる。玄室奥壁については側壁と同様の構築状況を示す。

#### c 遺物出土状況

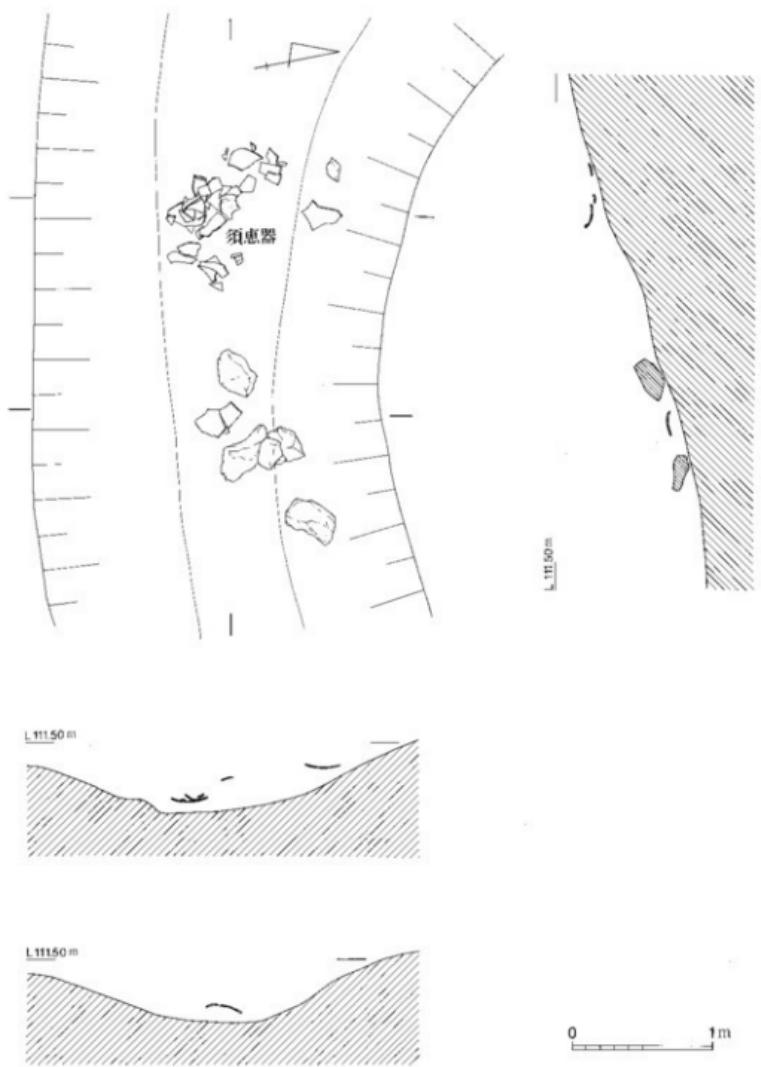
玄室内には2次期の埋葬が認められた。1次埋葬の床面は2次埋葬面より約7cm下に存在していた。土器は、玄室のほぼ中央に須恵器の壺蓋と奥壁ぎわに土師器が各1個体分と須恵器壺蓋の破片が出土している。また、須恵器の構から鉄錆が1本出土している。土玉は合計11個出土し、玄室中央から左側壁側に散在していた。なお、P3、P5は墳丘東側掘出土壺蓋と、P4は羨道部出土壺蓋とそれぞれ接合できた。したがって、もとは他にも遺物があったと思われる。



第46圖 C-2號填埋物出土狀況 (第2次床面)



第47図 C-2号墳遺物出土状況(第1次床面)



第48図 C-2号墳周溝内須恵器出土状況

るが、盗掘等により擾乱、持ち去られた可能性が高い。

2次床面には上面が水平な石が大小合計20数個検出された。これらは棺を安置するための施設で棺台と考えられる。棺の遺存が認められないため、おそらく木棺であろうと思われるが、釘は1本も出土していない。棺台石の配置状況および高さと遺物の出土位置との関係から、石室と同一方向の主軸をもつ左側壁ぎわの一群と、ほぼ同一方向の右側壁ぎわの一群に分かれそうである。左側壁の一群は奥壁に接し、その範囲は1.9m×0.9mである。右側壁のものは右袖部に近接し、1.95m×1.1mの範囲に存在する。また、左袖石ぎわで金環1個、右袖石ぎわで須恵器平瓶2個と鉄歛1本、右側石ぎわで鉄歛2本がそれぞれ出土している。これらの遺物出土地点については、盗掘等の擾乱を受けていないと考えられ、ほぼ原位置に近いものと思われる。以上のことから、玄室内2次埋葬面には、石室の主軸とほぼ平行して、それぞれ左、右側壁ぎわに棺が安置されていたと推定でき、左側壁側の頭位は羨道方向であったと考えられる。羨道部および墓道、前部からは須恵器、土師器の他、金環1個、鉄歛3本が底面より遊離したかたちで出土している。これらは石室内から掻き出したものであろう。

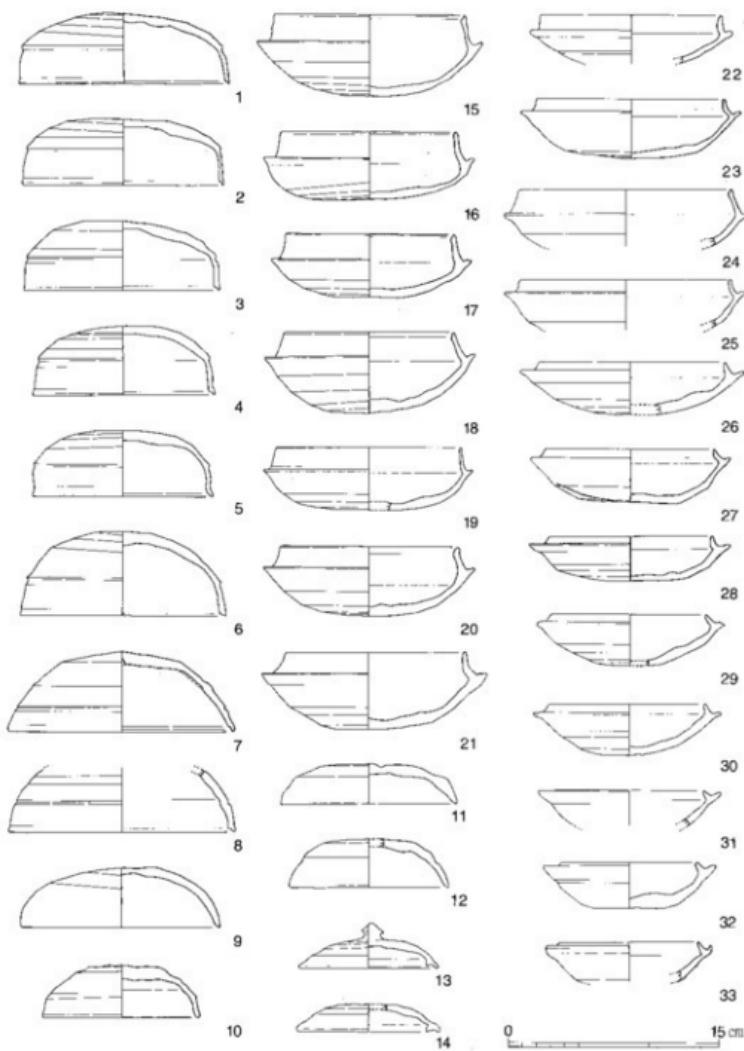
周溝東半分底付近から大型壺1個体分の破片を検出した。それらは周溝底の高所から東の低所へ破片が流れた状況であった。周溝内には掘り形は検出できず、したがって棺として埋置されたものではなく、周溝内もしくは墳丘南西部に立てていたものであろう。あるいは、壺を意識的に打ち割って破片を周溝内に置いたものかもしれない。

また、先述のように、墳丘北西および東半部の墳丘裾付近より多数の須恵器が出土している。他に南東部墳丘裾近くから金環1個、鉄刀・鉄刀子・鉄歛が各1本出土した。鉄刀は切先および茎端を欠失している。墳丘斜面、墳丘裾出土遺物については、追葬時の振き出し、墳丘の再盛土かあるいは盗掘等により放り出されたものか判然としない。いずれにせよ、古墳築造当初第1次埋葬時に墳丘に副葬されていたものではない。

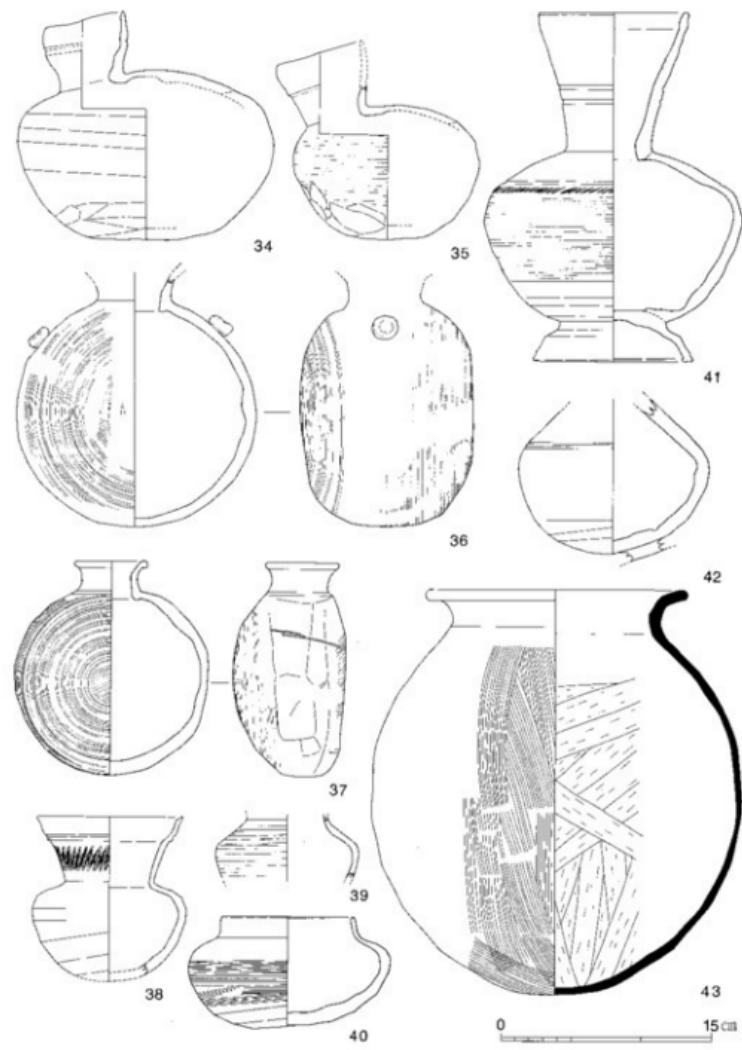
#### d 出土 遺 物

##### 1 土 器 (第49~51図)

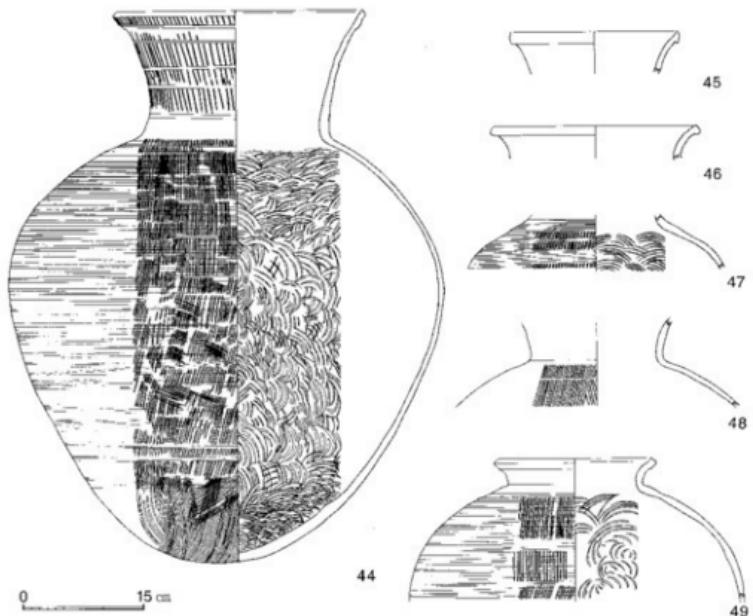
出土した土器は玄室奥壁際と石室前部より出土した土師器を除きすべて須恵器である。器種としては、壺蓋・短頸壺・長頸壺・提瓶・平瓶・竈・甕・大型壺がある。高壺はみられない。追葬時や盗掘時に石室が荒らされているため、土器の完形品は少なく、1部の土器を除くほとんどが墳丘斜面より出土しており、セット関係は不明である。時期も田辺編年のMT15型式~TK217型式のものまでみられる。壺蓋の口径の大きさは16cmのもの(7~8)、14~15cmのもの(1~6・9)、10~12cmのもの(10~14)があり、形的には、天井部と口縁部を画する稜をもつもの(1~6)、凹線状のもので区画するもの(7~8)、稜をほとんどもたないもの(10~12)、稜がなく丸味をもつもの(9)、宝珠つまみをもつもの(13~14)がある。



第49圖 C—2號填出土土器(1)



第50図 C-2号墳出土土器(2)



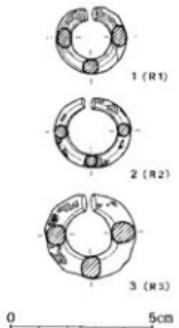
第51図 C—2号填出土器 (3)

环身も端部に段を明確にもつもの (15~17) や端部の丸いもの、短く内傾して立ち上るものなど、形態的に 4 ~ 5種類のものがみられる。提瓶の肩部には耳はなく、擬似的につけられているだけのものがある。大型壺の口頭部にはヘラ描の斜線が施されており、TK43型式以降の特徴を有する。

## 2 装 飾 品

### 耳環 (第52図)

1・2は比較的遺存度は良く、銅芯に銀箔をかぶせたのち鍍金を施している。3は腐蝕が甚しくわずかに銀と思われるものが表面に残存しているのみである。1は石室内出土で、長径2.5cm、短径2.3cm、断面は中央部で径0.5cm、開口部幅0.2cmを計る。2は羨道埋土中より出土で、長径2.7cm、短径2.5cm、断面径0.4cm、開口部幅0.2cm



第52図 C—2号填出土環

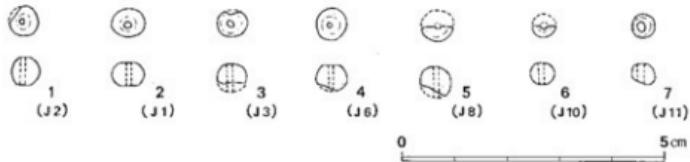
第6表 C-2号墳出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	出土地	形 態	技 法	備 考
1	坏 蓋	口径 $\pm 14.9$ 器高 5.1	埴丘北 東斜面	天井部と口縁部を画する接は 鈍い。口縁部はふくらみをも つて内寄したのちやや外反す る。端面は段をなす。	天井部 $\pm$ ヘラ削り。ロク ロは左回転。	破片 $\pm$ 残存
2	坏 蓋	口径 $\pm 14.2$ 器高 4.8	埴丘北 西斜面 玄室内 (第1次 剥)	天井部と口縁部を画する接は 短くやや鋭い。口縁部は直 立ぎみに内寄したのちやや外 反する。端面は設をもち浅い 凹面をなす。	天井部 $\pm$ ヘラ削り。ロク ロは左回転。	破片 $\pm$ 残存 P3 P5
3	坏 蓋	口径 $\pm 13.9$ 器高 5.0	埴丘東 斜面	天井部と口縁部を画する接は 短くやや鋭い。口縁部は直 立ぎみで端面はほとんど平坦 である。	天井部 $\pm$ ヘラ削り。ロク ロは左回転。	破片
4	坏 蓋	口径 $\pm 12.9$ 器高 5.0	埴丘東 斜面	天井部と口縁部を画する接は やや鋭い。口縁部はふくらみ をもつて内寄したのち外反す る。端面は段をなす。	天井部 $\pm$ ヘラ削り。ロク ロは左回転。	破片 $\pm$ 残存
5	坏 蓋	口径 $\pm 12.7$ 器高 4.7	埴丘東 斜面	天井部と口縁部を画する接は やや鋭い。口縁部はふくらみ をもつて内寄したのち屈曲し て外反する。端面は浅い凹面 をなす。器壁は比較的薄い。	天井部 $\pm$ ヘラ削り。ロク ロは左回転。	破片 $\pm$ 残存
6	坏 蓋	口径 $\pm 14.7$ 器高 6.1	埴丘東 斜面	天井部と口縁部を画する接は 短くやや鋭い。天井部は丸味を もつてふくらむ。口縁端面は 平坦で厚い。	天井部 $\pm$ ヘラ削り。ロク ロは左回転。	破片 $\pm$ 残存
7	坏 蓋	口径 $\pm 15.9$ 器高 5.7	埴丘東 斜面。 義道埋 土	天井部と口縁部は浅い四級で 削されているが、口縁部はそ のまま上方にのびるためほ とんど区別がない。	天井部 $\pm$ ヘラ削り。ロク ロは右回転。	破片 $\pm$ 残存
8	坏 蓋	口径 $\pm 16.2$ 器高 4.4	埴丘東 斜面 剥落探	口縁部は下外方に下り、端部 はやや内傾し、側面は設をな す。天井部と口縁部は回転で 画する。	天井部 $\pm$ ヘラ削り。ロク ロは右回転。	破片 $\pm$ 残存
9	坏 蓋	口径 $\pm 14.2$ 器高 4.3	埴丘東 斜面	口縁部は下外方に下り、端部 は丸い。天井部は高くて丸い。	天井部 $\pm$ ヘラ削り。ロク ロは左回転。	破片 $\pm$ 残存
10	坏 蓋	口径 10.8 器高 3.8	義道埋 土 玄室内	天井部と口縁部を画する接は ほとんどない。口縁部は丸 く、天井部はやや平坦。	天井部 $\pm$ ヘラ削り。ロク ロは左回転。	P4
11	坏 蓋	口径 $\pm 12.5$ 器高 2.9	義道前 底部 埴丘端	口縁部は下外方に下り、端部 は丸い。器壁は厚い。接はほ とんどみられない。	天井部 $\pm$ ヘラ削り。ロク ロは左回転。回転ナダ調整。	破片 $\pm$ 残存
12	坏 蓋	口径 $\pm 11.4$ 器高 3.5	義道	口縁部は下外方に下り、端部 は丸い。接はほとんどみられ ない。	天井部 $\pm$ ヘラ削り。ロク ロは右回転。回転ナダ調整。	破片 $\pm$ 残存
13	坏 蓋	口径 9.7 器高 3.3 つまみ径 1.5 つまみ高 0.8	埴丘北 斜面	口縁部は短く垂直に下り、端 部は丸い。天井部は低く、ほ とんどで鏡宝珠様のつまみを 付す。	天井部 $\pm$ ヘラ削り。ロク ロは左回転。回転ナダ調整。	
14	坏 蓋	口径 $\pm 10.0$ 器高 2.0	埴丘北 斜面	口縁部は短く垂直に下り、端 部はやや鋭い。天井部は低く 平ら。	天井部 $\pm$ ヘラ削り。ロク ロは左回転。	破片 $\pm$ 残存

番号	器種	法量(cm)	出土地	形態	技法	備考
15	环身	口径±13.4 器高 5.9	埴丘北 斜面	口縁部はやや内傾して立ち上り、端部に段をなす。受部は上外方にのび端部はやや続い。器壁は薄く、底部は深く丸い。	底部 $\frac{3}{4}$ ヘラ削り。ロクロは右回転。	破片 $\frac{1}{4}$ 残存
16	环身	口径±12.4 器高 5.0	埴丘北 西斜面	口縁部は内傾して立ち上り、端部は丸い。受部は水平方向にのび続い。器壁は薄い。	底部 $\frac{3}{4}$ ヘラ削り。ロクロは右回転。	破片 $\frac{1}{4}$ 残存 底部に歪みがある。
17	环身	口径±11.9 器高 4.6	埴丘北 斜面	口縁部は内傾して立ち上り、端部は浅い凹面をなす。受部は水平方向にのび端部は丸い。	底部 $\frac{3}{4}$ ヘラ削り。ロクロは右回転。	破片 $\frac{1}{4}$ 残存
18	环身	口径±12.0 器高 5.8	埴丘東 斜面	口縁部は内傾して立ち上り、端部はほとんど平坦。受部は上外方にのび端部は丸い。底部は深く丸い。	底部 $\frac{3}{4}$ ヘラ削り。ロクロは右回転。	破片 $\frac{1}{4}$ 残存
19	环身	口径±13.2 器高 4.5	埴丘東 斜面	口縁部器壁は薄く垂直に近く内傾して立ち上る。受部は短く上外方にのび端部は丸い。	底部 $\frac{3}{4}$ ヘラ削り。ロクロは左回転。	破片 $\frac{1}{4}$ 残存
20	环身	口径±12.4 器高 4.9	埴丘北 斜面	口縁部は内傾して端部で垂直ぎみに立ち上る。受部は水平方向にのび端部は丸い。底部は深く丸い。	底部 $\frac{3}{4}$ ヘラ削り。ロクロは右回転。	破片 $\frac{1}{4}$ 残存
21	环身	口径±12.7 器高 5.5	埴丘東 斜面	口縁部は内傾して端部で垂直に立ち上る。受部は水平方向にのび端部は厚くて丸い。	底部 $\frac{3}{4}$ ヘラ削り。ロクロは右回転。	破片 $\frac{1}{4}$ 残存
22	环身	口径±12.7 残存高 3.4	埴丘東 斜面	口縁部は短くほぼ垂直に立ち上る。端部は丸く厚い。受部は水平方向にのび端部は丸い。	底部 $\frac{3}{4}$ ヘラ削り。ロクロは右回転。	破片 $\frac{1}{4}$ 残存
23	环身	口径±13.2 器高 4.4	埴丘東 斜面、 南斜面	口縁部は短く内傾し、端部で垂直に立ち上る。受部は上外方にのび端部は丸い。器壁は薄い。	底部 $\frac{3}{4}$ ヘラ削り。ロクロは右回転。	破片 $\frac{1}{4}$ 残存
24	环身	口径±15.0 残存高 4.1	埴丘東 斜面	口縁部は内傾して立ち上り端部は浅い凹面をなす。受部は短く水平方向にのび端部は丸い。	底部 $\frac{3}{4}$ ヘラ削り。	破片 $\frac{1}{4}$ 残存
25	环身	口径±15.0 器高 3.5	埴丘東 斜面	口縁部は内傾して立ち上り、端部は丸い。受部は水平方向にのび端部はやや続い。	底部 $\frac{3}{4}$ ヘラ削り。	破片 $\frac{1}{4}$ 残存
26	环身	口径±13.2 器高 3.8	埴丘東 斜面	口縁部は内傾して立ち上り、断面は三角形を呈す。受部は上外方にのび端部はやや続い。底部は丸く浅い。	底部 $\frac{3}{4}$ ヘラ削り。ロクロは右回転。	破片 $\frac{1}{4}$ 残存
27	环身	口径±11.9 器高 4.0	埴丘南 東斜面	口縁部は短く内傾して立ち上り、端部は丸い。受部は上外方にのび端部は丸い。底部に1条のヘラ記号を施す。	底部 $\frac{3}{4}$ ヘラ削り。ロクロは右回転。	破片 $\frac{1}{4}$ 残存
28	环身	口径±11.7 器高 3.2	埴丘南 東斜面	口縁部は短く内傾したのち端部で垂直に立ち上る。受部は水平方向に長くのびる。底部は平らで浅い。	底部 $\frac{3}{4}$ ヘラ削り。ロクロは左回転。	破片 $\frac{1}{4}$ 残存
29	环身	口径±11.0 器高 3.7	埴丘東 斜面	口縁部は短く内傾して立ち上る。受部は水平方向にのび端部は丸く厚い。	底部 $\frac{3}{4}$ ヘラ削り。ロクロは右回転。	破片 $\frac{1}{4}$ 残存

番号	器種	法量(cm)	出土地	形態	技法	備考
30	壺 身	口径=11.1 器高 3.7	埴丘北 西斜面	口縁部は短く内傾して立ち上り端部は丸い。受部は水平方向にのび端部は丸い。底部は丸い。	底部 $\frac{3}{4}$ ヘラ削り。ロクロ は左回転。	破片 $\frac{3}{4}$ 残存
31	壺 身	口径=10.6 残存高 2.5	埴丘東 斜面	口縁部は短く大きく内傾する。受部は長く上外方にのび端部は丸い。		破片 $\frac{3}{4}$ 残存
32	壺 身	口径= 9.6 器高 3.3	埴丘南 東斜面	口縁部は短く内傾し端部は丸く厚い。受部は上外方にのび端部は丸い。器壁は厚く、底部は平ら。	底部 $\frac{3}{4}$ ヘラ削り。ロクロ は右回転。	破片 $\frac{3}{4}$ 残存
33	壺 身	口径 9.8 残存高 2.9	埴丘北 東斜面	口縁部は大きく内傾して立ち上り、受部は上外方魚直ぎみにのびる。		破片 $\frac{3}{4}$ 残存
34	平 瓶	口径 5.5 器高 16.3 体部径18.1	玄室内	口頭部は外上方にのび端部は丸い。中位に1条の凹線がめぐる。体部は丸味をおびて下外方へ内擱ぎみに下る。底部は丸い。	底部外面はヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	完形 P 2
35	平 瓶	口径= 6.3 器高 12.5 体部径13.2	玄室内	口縁部は外上方にのび端部は丸い。中位に浅い凹線がめぐる。体部は丸味をおびて下外方へ内擱ぎみに下る。底部は丸い。	底部外面はヘラ削り調整。 肩部はカキメ調整。 他は回転ナデ調整。	P 1 口縁若干欠損
36	提 瓶	残存高11.4 体部径17.2	義道理 土	肩部から丸味をおびて内擱して下外方にのび、体部 $\frac{1}{2}$ に最大径をなす。肩部に径1.5cmのつまみを付す。	体部はロクロを利用した カキメ調整。 体部中央に接合痕が認められる。	口縁部欠損
37	提 瓶	口径 5.2 器高 15.4 体部径13.8	義道理 土 塩丘北 西	口縁部は外上方にのび端部は丸い。肩部から丸味をおびて内擱して下外方にのび、体部 $\frac{1}{2}$ に最大径をなす。体部の片面は平坦。体部に×条のヘラ記号。	体部はロクロを利用した カキメ調整。体部側面は ヘラ削り調整。	完形
38	瓢	口径 10.2 残存高11.4 体部径11.0	埴丘東 斜面	口頭部より外上方に立ち上り斜面三角形の凸縁を有し、外側して上外方へのび、端部は水平に近い凹面をなす。体部 $\frac{1}{2}$ に最大径を有し、丸味をもち下外方に下る。 凸縁下方に10条の波状文。	底部から体部中位までヘラ削り。	破片 $\frac{3}{4}$ 残存
39	短頸壺	残存高 4.7 体部径10.2	埴丘東 斜面	体部の肩の張りはややゆるやか。口縁部と底部欠損で不明。	体部はカキ目調整とナデ で調整。	破片 $\frac{3}{4}$ 残存
40	短頸壺	口径 9.2 残存高 8.1 体部径14.4	埴丘西 斜面	口縁部は短くわずかに内傾する。肩部の張りはややきつい。	体部中央部はカキ目調整。 底部は回転ヘラ削り。口 縫部と肩上部はナデ調整。	口縫部と底 部 $\frac{1}{2}$ 程度欠 損
41	台付長 頸壺	口径 10.4 器高 25.0 体部径18.4 底径 11.3	埴丘東 斜面	口頭部は上外方に立ち上り口縫部でゆや内傾し、端部は丸い。口頭部の下位に2条の浅い凹線を有す。体部 $\frac{1}{2}$ 上方に最大径を成す。肩部に凹縫が2条めぐりその間に突文を施す。底部はハの字形の高台を付し内側で接地する。	体部中央部はカキ目調整。 体部下部は回転ヘラ削り 調整。	$\frac{3}{4}$ 残存

番号	器種	法量(cm)	出土地	形 無	技 法	備 考
42	壺	残存高11.1 体部径13.5	墳丘南 東斜面 差道前 庭部	口縁部欠損のため不明。頸部 から体部にかけて自然釉が認められる。底部に他の土器片 が接着。肩部に2条の沈線。	底部へラ削り。 他は回転ナガ調整。	口縁部欠損
43	壺 (土師器)	口径 18.0 体部径26.0 器高 29.0	差道前 庭部	口縁部は厚く頸部より外上方に 短く屈曲し底部は丸い。体 部に最大径があり、底部は 丸底。	体部内面へラ削り、外面 はタテ方向の刷毛調整。 他はヨコナダ調整。	ほぼ完形 H 3
44	壺	口径 35.0 体部径56.8 器高 68.8	周溝内 墳丘東 斜面	口縁部は外反して立ち上り、 4条の沈線をめぐらす。口縁 部と頸部にヘラ描のタテ方向 の平行文を施す。体部5分に最 大径。底部はやや歪んだ丸底 を呈す。	口縁部ハリツケ。 体部内面に同心円のタタキ、 外面は平行タタキの 上にカキ目調整。底部に 刷毛目痕がみられる。	ほぼ完形
45	壺	口径≈21.0 残存高 5.0	墳丘南 東斜面	口縁部は外上方にのび、口縁 部下方に三角形の凸唇がつへ。	ヨコナダ調整。	口縁部のみ 残存
46	壺	口径≈25.1 残存高 4.2	墳丘南 東斜面	古窓部は外上方にのび、口縁 部下方に貼り付け凸唇。	ヨコナダ調整。	口縁部のみ 残存
47	壺	残存高 5.0	墳丘南 東斜面	体部上方のみ残存で形状不明。	体部内面に同心円タタキ 目、外面に平行タタキ目。	口縫部、 体部欠損
48	壺	残存高10.0	墳丘東 斜面	口縁部は外方方にのびるが口 縁部、体部欠損で形状不明。	体部内面ヨコナダ調整、 外面平行タタキ目あり。	口縫部、 体部欠損
49	壺	口径 19.0 体部径42.0 残存高18.0	墳丘北 東斜面	外反する口縁部は上端で、外 方へ屈曲し、さらに内側に屈 曲する。	体部内面同心円タタキ、 外面平行タタキの上にカ キ目調整。	体部上部の み残存



第53図 C-2号墳出土土玉

第7表 C-2号墳出土土玉計測表

(単位:長さmm、重さg)

No.	径	厚	孔 径	重 量	備 考
1	5.50	5.10	0.80	141	完形 J 2
2	5.95	5.65	1.10	71	半截 J 1
3	6.30	4.00	0.85	128	完形 J 3
4	5.85	3.55	0.90	92	半截 J 6
5	6.35	4.40	0.60	116	半截 J 8
6	4.50	3.75	0.65	25	半截 J 10
7	4.45	3.85	1.90	64	完形 J 11

を測る。3は墳丘東斜面より出土で、長径3.2cm、短径3.0cm、断面径0.7cmを測る。

#### 土玉(第53図)

第1次床面出土で11個出土したが、非常に多くて取り上げ時に4個体は破碎してしまった。現状で形状が観察できるものには大きさは2種類に分けられ、孔の端面も平坦面をなすものと、丸味をもつものに分けられる。暗灰色を呈する。

### 3 鉄 製 品

#### 鉄刀（第54図）

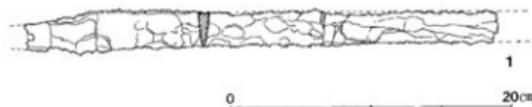
墳丘南東部斜面から出土し、切先と柄部端を欠損している。残存長33.4cm、身の断面は三角形を呈し、厚さ0.8cmを測る。柄部の残存部に径0.4cmの目釘穴がある。

#### 鉄鎌（第55図1～8）

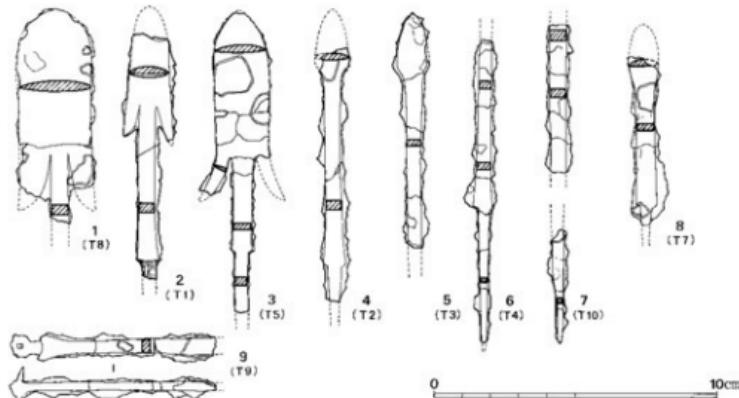
出土した鉄鎌は8本でいずれも破損しており完形のものはない。脇抜平根式の鎌が3本（1～3）、尖根式の鎌が3本ある。平根式の鎌は刃長・刃幅ともすべて異なる。3は比較的形状がわかるもので、残存長10.7cm、刃部幅2.0cm、刃部残存長6.5cm、鎌身長3.5cmを測る。

#### 不明鉄器（第55図9）

破損しており全体の形状は不明である。端部に紙状の突起を有する。残存長7.3cm、断面は中央部で方形をなし、幅0.5cm、厚さ0.3cmを測る。



第54図 C-2号墳出土鐵刀



第55図 C-2号墳出土鐵製品

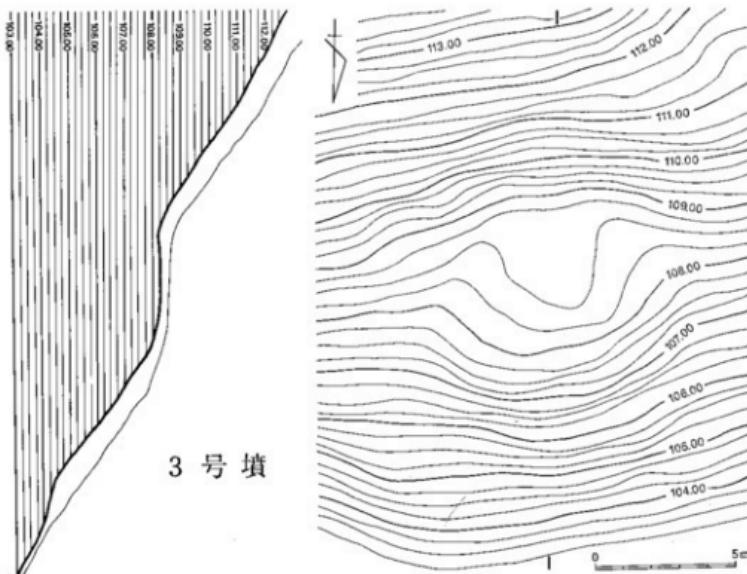
### 3. C—3号墳

#### a 墳丘

C—3号墳は、C—1号墳の北北西約20mの所に位置し、標高104~108mに立地する。平野からの比高差は墳頂部で約13mである。調査前より墳丘を造り出すための削り出し面が幅7m、長さ15mにわたってみられていた。墳頂部の盛り上りは低く、木棺を内部主体とすると思われた。C—3号墳の現存する墳頂部の標高は108.60mで、墳丘南周溝からの比高差0.3m、確認した墳丘北裾部からの比高差4.60mで、墳径は東西主軸方向で5m、主軸に直交した南北方向で11mを測り、平野部にせり出したやや楕円状の形を呈し、墳径約10mの円墳である。

C—3号墳の位置する斜面は、傾斜角40°の急傾斜で、盛土はかなり自然流出したと思われ、墳丘の規模はかなり変化していると思われる。

墳丘は上方の斜面を20×1.5mの扇形に大きく削り出したのち、墳丘部をさらに明確に区画するために幅0.8m、深さ0.2mの弧状の溝を掘削し、それらの掘削土を盛土としたと思われる。



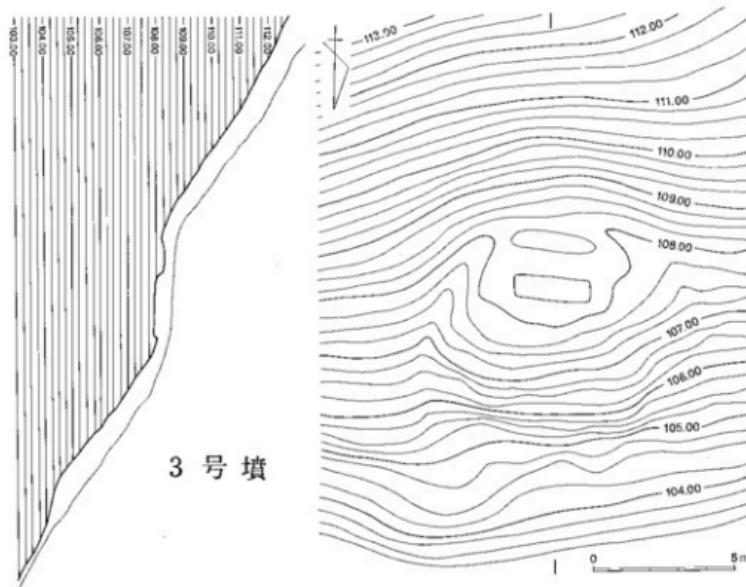
第56図 C—3号墳墳丘測量図（調査前）

## b 埋葬施設

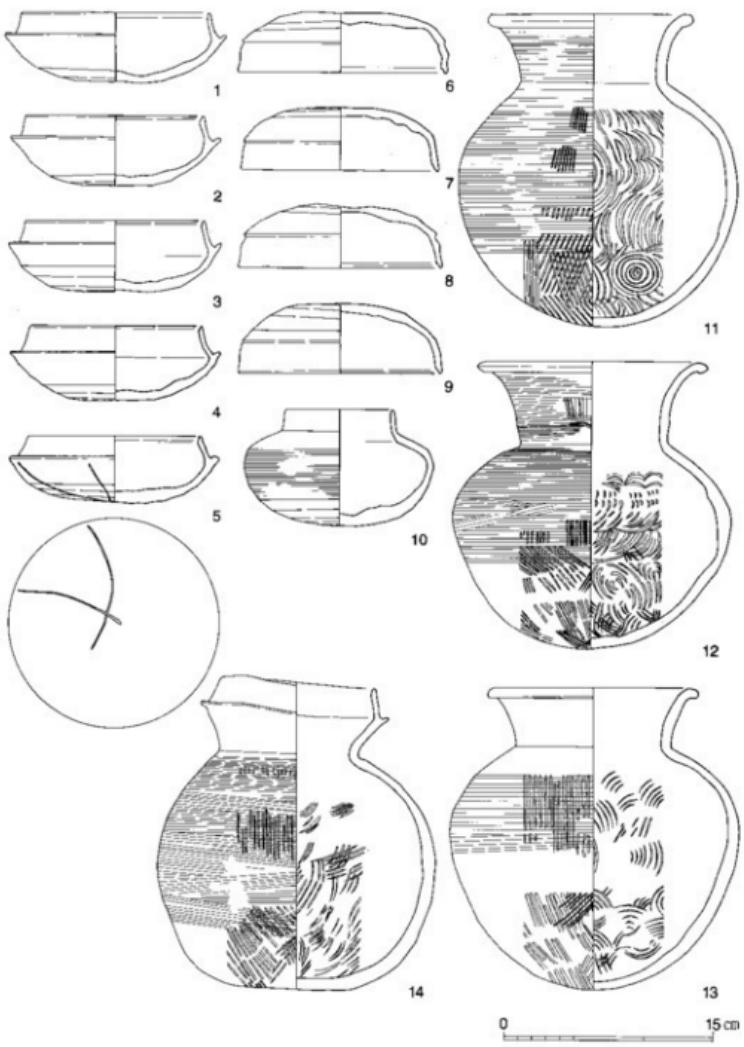
内部主体は木棺1基を検出した。埴頂部の盛土はほとんど流出しており、表土下で検出した。墓塚の北側は埴底面のみをわずかに残すのみであった。墓塚は主軸上で長辺3.85m、短辺は残存部で2.7mを測る。木棺は墓塚の北側に片寄った状態で検出した。木棺の主軸はN87°Wで、長さ2.75m、幅0.9m、深さ25cmを測り、箱形木棺と思われる。

## c 遺物出土状況

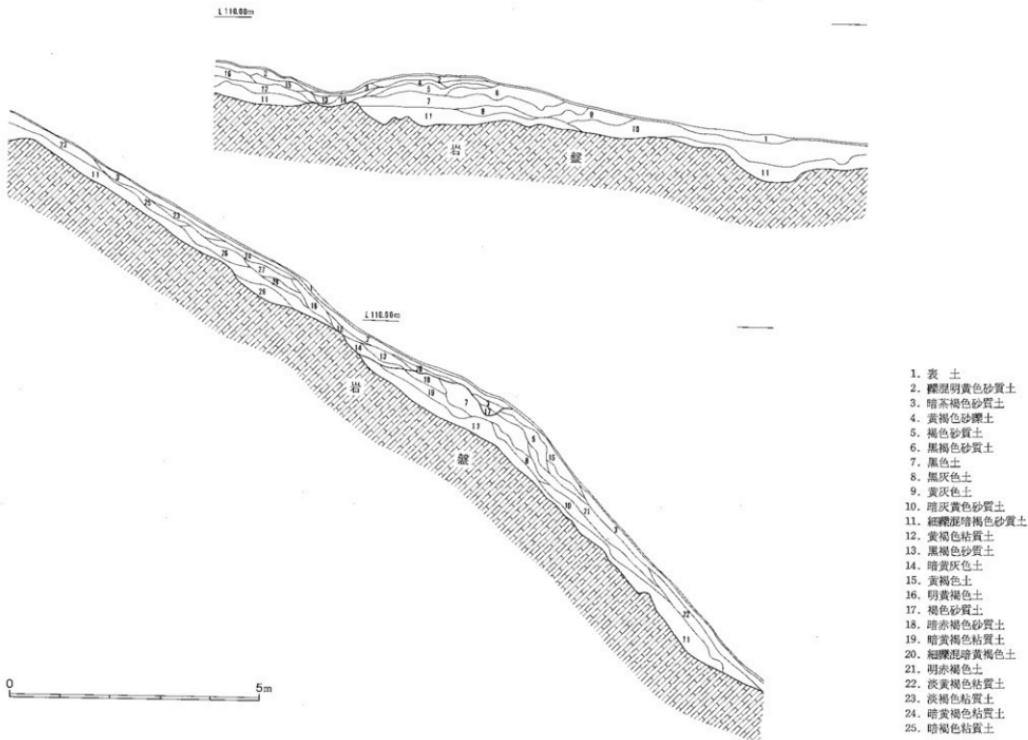
遺物は墓塚検出作業中に表土下より須恵器の大型壺の破片が一括出土した。位置的には墓塚内木棺東木口北側で意図的に破碎されたものと思われる。墓塚内からは木棺中央部北側より須恵器の壺坏、短頸壺、壺が一括で副葬されていた。壺の蓋と身はそれぞれ別々に重ねられており、土器出土状態の北西辺や北東辺が比較的そろっており長方形の箱に納められていたかのようにすき間なく置かれている。これらの副葬品は、棺がなから埋められた段階で置かれたものである。棺内からの遺物は検出されなかった。



第57図 C-3号墳埴丘測量図(調査後)



第58圖 C-3號填出土土器(1)



第59圖 C-3号填土断面図

また、墳丘精査中に、南西斜面側と北斜面側より須恵器の坏蓋片が検出され、接合すると同一個体であった。(第58図7)、墓塙内の副葬品の須恵器の一群は、表土下での検出で、上部は、木の根で若干擾乱されて、蓋坏の1部が欠けているものが何点かあることからみて、墳丘斜面で検出された坏蓋も、当初は墓塙内にあったものが擾乱されて流出したものと思われる。

#### d 出土遺物

出土した遺物の中で鉄製品ではなく、土器のみで、すべて須恵器である。(第58・60図)

器種としては、蓋坏・短頸壺・壺・大型壺がある。高坏、罐はみられない。蓋坏は、蓋と身が別々に重ねて置かれていたため、それぞれのセット関係は不明である。

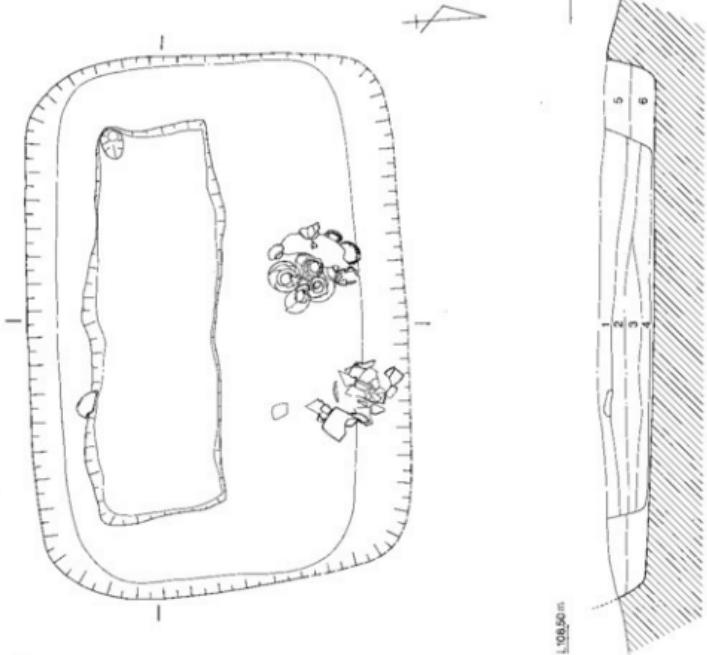
時期は、田辺編年のMT15型式に属すると思われ、C-1号墳出土のものと同一時期である。

坏蓋の口径の大きさはほぼ14~15cm程度である。坏身の口径の大きさは12~13cm程度で、底部に2条の交差するヘラ記号を有するもの(5)がある。蓋坏と一括されて副葬されていた壺は、器高が21~23cm程度のほぼ同じ大きさであるが、口縁部の形態によって同種の3個と異種の1個の2種類がみられる。14の口縁部は、坏身の受け口と同形態をしており、蓋があったかも知れないが、出土した坏蓋の中でこの口径に合うものはなかった。焼成は他の壺に比べて悪く、全体に歪んだ形で丁寧な作りではない。

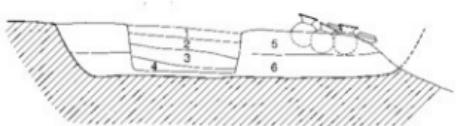
15(第60図)の壺は、破碎されていたが復原したところ口縁部の1部を除いて完形品となつた。器高が53.3cmと中型の大きさである。



第60図 C-3号墳出土土器(2)



108.50m



0 1m

1. 赤黄色粘質土
2. 暗灰黃褐色粘質土
3. 糜混黃褐色粘質土
4. 暗黃褐色粘質土
5. 糜混赤黃褐色粘質土
6. 糜混黃褐色土

第61図 C—3号填主体部

第8表 C-3号墳出土土器観察表

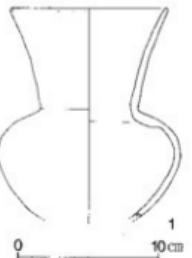
番号 <sup>1</sup>	器種	法量(cm)	出土地	形 築	技 法	備 考
1	坏 身	口径=13.3 器高 5.0	棺外 墓塚内 北一群	口縁部は内傾して立ち上り、端面は浅い凹面をなす。	底部 $\frac{3}{4}$ へラ削り。ロクロ は右回転。	破片 $\frac{1}{2}$ 残存
2	坏 身	口径=12.7 器高 5.2	棺外 墓塚内 北一群	口縁部は内傾して立ち上り、端面は凹面をなす。	底部 $\frac{3}{4}$ へラ削り。ロクロ は右回転。底部内面中央 にナデ調整。	破片 $\frac{1}{2}$ 残存
3	坏 身	口径=12.6 器高 5.1	埴丘北 西掘	口縁部は内傾して立ち上り、端部はやや厚く、端面は凹面をなす。	底部 $\frac{3}{4}$ へラ削り。ロクロ は右回転。底部内面中央 にナデ調整。	口縁部若干 欠損
4	坏 身	口径 12.1 器高 5.4	棺外 墓塚内 北一群	口縁部は内傾して立ち上り、端面は凹面をなす。受部は上 外方にのび、端部は厚く続い。	底部 $\frac{3}{4}$ へラ削り。ロクロ は左回転。	若干欠損
5	坏 身	口径 12.2 器高 4.9	棺外 墓塚内 北一群	口縁部は内傾して立ち上り、端部は厚く端面は浅い凹面を なす。受部端部は厚くて丸い。	底部 $\frac{3}{4}$ へラ削り。ロクロ は左回転。底部 $\frac{1}{4}$ に2条 の交差するヘラ記号	口縁部若干 欠損
6	坏 盖	口径 14.8 器高 4.2	棺外 墓塚内 北一群	天井部と口縁部を画する稜は 短くやや鋭い。口縁部端面は 浅い凹面をなす。	天井部 $\frac{1}{4}$ へラ削り。ロク ロは左回転。	口縁部若干 欠損
7	坏 盖	口径 13.9 器高 4.7	埴丘南 西・北 斜面	天井部と口縁部を画する稜は 短く鋭い。口縁部端面は丸く 凹面をなさない。	天井部 $\frac{1}{4}$ へラ削り。ロク ロは左回転。	口縁部若干 欠損
8	坏 盖	口径=14.4 器高 4.6	棺外 墓塚内 北一群	天井部と口縁部を画する稜は 丸くて鋭い。口縁部端面は浅 い凹面をなす。	天井部 $\frac{1}{4}$ へラ削り。ロク ロは左回転。	破片 $\frac{1}{2}$ 残存
9	坏 盖	口径=14.3 器高 5.0	棺外 墓塚内 北一群	天井部は丸く口縁部を画する 稜はほとんどない。口縁部端 面は浅い凹面をなす。	天井部 $\frac{1}{4}$ へラ削り。ロク ロは右回転。	口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠 損
10	短頸壺	口径 7.5 器高 8.4 体部径13.5	棺外 墓塚内 北一群	口縁部は短くわずかに内傾し て直線的に立ち上る。体部 $\frac{1}{4}$ に最大径を有する。	底部へラ削り。ロクロ回 転は左回転。腹部最大径 付近はカキ目調整。	完形
11	壺	口径 14.1 器高 22.5 体部径19.8	棺外 墓塚内 北一群	外反する口頭部は上端で外方 へ屈曲する。肩はなだらかに 下り体部は丸い。	体部外面平行叩きの上に 底部を除いてカキ目調整。 内面は同心円叩き。	完形 焼成不良
12	壺	口径 15.5 器高 20.7 体部径19.8	棺外 墓塚内 北一群	外反する口頭部は上端で外方 へ屈曲し、粘土を折りまげて 端部を作成。体部は丸い。	体部外面平行叩きの上に 底部を除いてカキ目調整。 内面は同心円叩き。	完形
13	壺	口径 13.7 器高 21.7 体部径20.5	棺外 墓塚内 北一群	外反する口頭部は上端で外方 へ屈曲し、粘土を折りまげて 端部を作る。体部は丸い。	体部外面平行叩きの上に 肩部のみカキ目調整。内 面は同心円叩き。	完形
14	壺	口径 10.7 器高 22.2 体部径19.9	棺外 墓塚内 北一群	口頭部は外反してのび、坏身 と同様の受け口をもつ口縁部 を有する。口縁部は内傾して 立ち上り。端面には若干の凹 面がみられるが、ほとんど丸 い端部をもつ。平底に近い丸 底で、全体に歪んだ形態をな す。	体部内面は同心円叩き、 外表面は平行叩きの上に底 部を除いてカキ目調整。	完形 焼成不良
15	壺	口径 22.2 器高 53.3 体部径48.6	棺外 墓塚内 北東	口頭部は外反してのび、口縁 部はやや内傾ぎみで端部は丸 い。体部最大径は $\frac{1}{4}$ 。丸底だが全体に歪みがある。	体部内面は同心円叩き、 外表面は平行叩き。底部は 不整方向の平行叩き。 他は回転ナデ調整。	口縁部のみ $\frac{1}{2}$ 欠損では は完形。

#### 4. C—4号墳

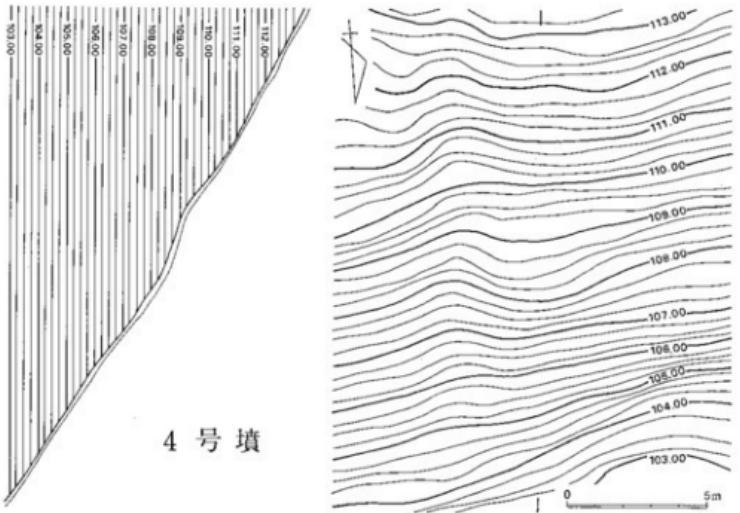
C—4号墳は、C—2号墳とC—3号墳の間に位置し、標高約105~110mに立地する。伐採後の地形測量の際に墳丘らしき高まりがあり、トレーナーを設定して確認調査を行った。その結果、南側斜面と東側に溝状の落ち込みがあり黒色土の堆積が認められた。東側の溝内より土師器の壺1個体分の破片が検出され、この溝は墳丘を画する周溝であると判断された。

C—4号墳の位置する斜面もC—3号墳同様、傾斜角40°の急傾斜で、墳丘上部の盛土はほとんど自然流出しており、墓塚など主体部の検出は出来なかったが、木棺墓であった可能性が強い。墳丘規模も不明であるが、10m程度の円墳であったと思われる。

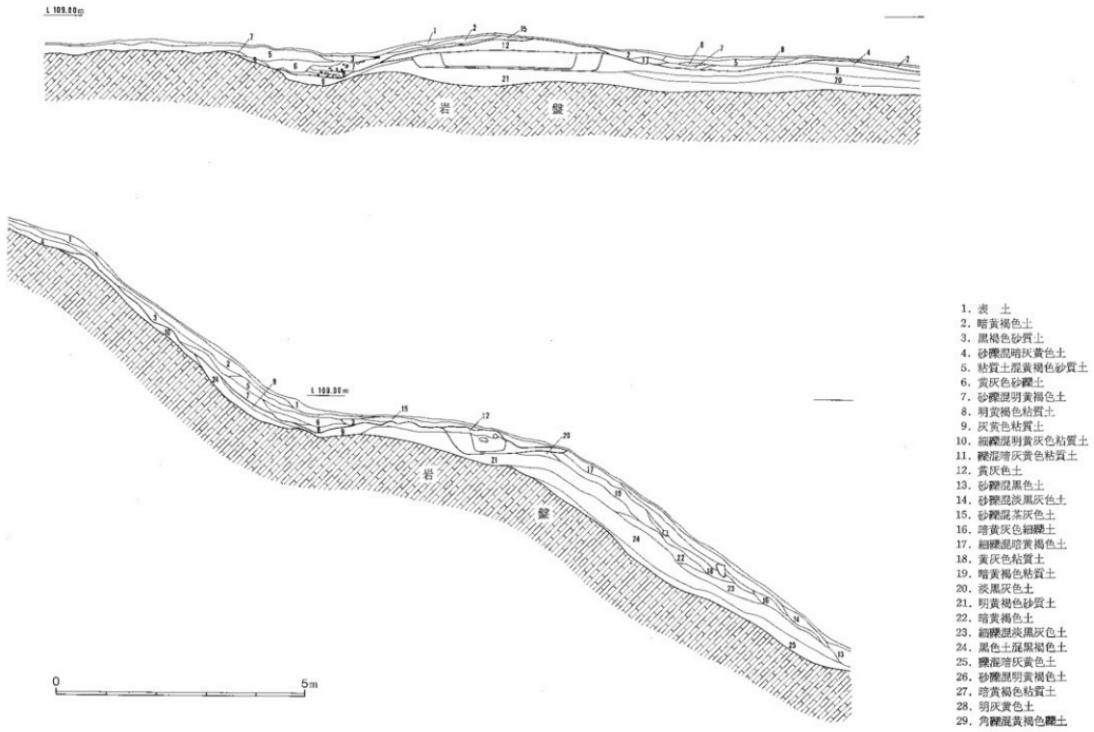
出土した土師器の壺は、器面の風化が激しく調整方法は不明である。底部を欠くが、最初から穿かれたものなのか、破片が流出してしまってないのか不明である。



第62図 C—4号墳出土土器



第63図 C—4号墳墳丘測量図（調査前）



第64図 C-4号填土層断面図

## 小 結

### 位 置

C尾根文群は多利向山古墳群の東端に位置する文群であり、向山山塊から北に派生した尾根のうち、最も東側の文脈突端にのみ存在する4基の円墳で構成される。尾根突端にC-1号墳、そこから北東の尾根後線上にC-2号墳、その西側の斜面にC-3・C-4号墳がそれぞれ築かれている。古墳群からさらに山頂方向へ踏査を行ったが、古墳らしきものは発見されなかった。

古墳が立地する尾根からは多利地区全域が正面に、多田地区が西側に見下せるが、東・南側は山塊に過ぎられている。逆にいえば、多利および多田地区が本古墳群の形成集団の居住地であった可能性がある。しかし、竹田川を挟んだ多田地区は本古墳群から遠い位置にあり、可能性は低いものと思われる。とすれば、多利地区が最も有力な候補地となるのであるが、現段階では古墳時代の聚落跡は確認されていない。

### 墳 丘

4基はいずれも円墳で、墳丘はすべて山側を削ったり、山側に溝を掘削して墓域を画し、その土を盛土として利用しているようである。C-1号墳が尾根突端に位置するのを除けば、すべて急斜面に立地しており、上からは0.5m程の墳丘高であっても、斜面下側からは数mの高さの墳丘に見える。規模が最も大きいのはC-1号墳で、18mを測る。次いでC-2号墳の11m、C-3・C-4号墳の10mと続く。

### 埋 葬 施 設

C尾根文群の埋葬施設は大きく分けると2種あり、木棺直葬と横穴式石室である。木棺直葬のうち、C-1号墳は割竹形木棺、C-3号墳は箱形木棺である。いずれも一墳一埋葬施設となっている。C-1号墳の割竹形木棺は向山古墳群中唯一のもので、松ノ本古墳群においても認められない。棺木の幅、棺底の高さの差および遺物の配列状況から、東側頭位とみては間違いないであろう。C-3号墳の箱形木棺についても東側木口幅が若干広いことから、頭位は東側と推定される。また、C-2号墳横穴式石室玄室内の第2次埋葬面には、棺台石および遺物の配置状況より南東-北西方向の2棺が併列していたようであり、遺物の位置から南東側に頭位があったと考えられる。

C-2号墳の横穴式石室は、方形プランの玄室に短くハの字状に開く羨道が付いたもので、横穴式石室では古式のタイプに属する。この石室の形態については後に詳述するが、付近では水上郡山南町<sup>(1)</sup>に所在する井原至山古墳の石室が、細部では若干異なるものの同タイプに属する。C-2号墳玄室内には最低2次の埋葬が認められ、第1次のものは6世紀前半、第2次ものは棺台石を設けた2棺あり、6世紀中葉と考えられる。

## 出土遺物

鉄器・土玉・耳環・土器が出土しており、土玉と耳環はC-2号墳にのみ認められた。

鉄器は剣・刀・刀子・鎌の種類があり、C-1号墳とC-2号墳から出土している。C-1号墳からは剣1振、刀子2本、鎌6本が出土しているが、刀子1本のみ墳丘外からの出土で、他はすべて棺内に副葬されていた。C-2号墳からは刀1振、刀子1本、鉄鎌8本が出土しており、それぞれの出土位置は、玄室内1次床面より鉄鎌1本、2次床面より鉄鎌3本、羨道部および前庭部から床面より遊離した状態で鉄鎌3本、墳丘裾付近から刀・刀子・鎌が各1本である。

土器はすべての古墳から出土している。このうち、土師器が認められたのはC-2・C-4号墳である。C-2号墳では玄室奥壁と羨道端で、C-4号墳では墳裾より出土している。須恵器はC-1~C-3号墳から出土している。C-1号墳では棺上、墓塙内、墳丘裾から出土しているが、副葬時の原位置を保っているのは棺上および墓塙内である。C-3号墳からも墓塙内より出土している。C-2号墳から出土した須恵器の量は最も多く、玄室内、羨道および前庭部、周溝内、墳丘斜面および墳裾付近から出土している。C-2号墳出土の須恵器をみると、田辺編年のMT 15型式からTK 217型式の間に収まり、4ないし5期に分けることが可能である。したがって、出土土器からみたC-2号墳の埋葬次数は4~5次とみることができるであろう。C-1・C-3号墳がMT 15型式単一時期であるのに対し、横穴式石室への埋葬という特徴をよく反映しているものとみることができる。しかし、石室の構築はMT 15の時期であり、造墓活動はその時期に終わっており、以降は追葬期に入っている。

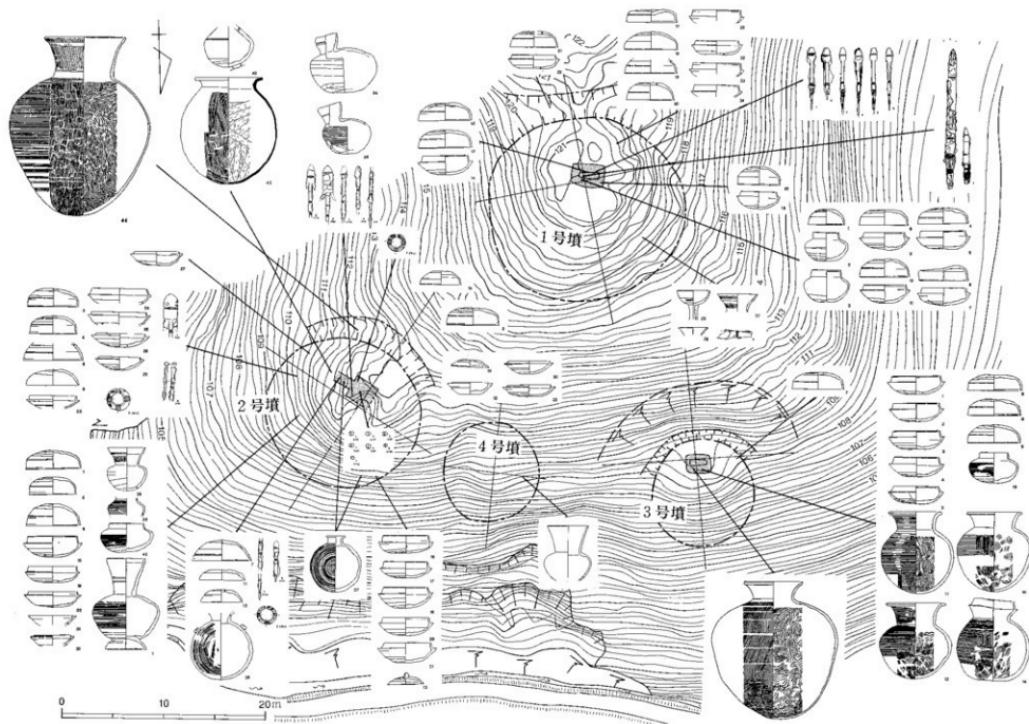
以上のように、4基の古墳は同一尾根上にありながら、異なる様相を示す。C-1号墳は最高所に占地し、割竹形木棺を埋葬施設とし、墓塙の規模は最も大きい。副葬品も豊富で、文群中優位な感がある。しかし、C-2号墳が横穴式石室であり、豊富な副葬品を同様に保有していることを考えれば、同一次元での比較はできない。とはいものの、総合的に判断すればC-3・C-4号墳がC-1・C-2号墳よりも貧弱な感は免れない。

### (註)

(1) 藤井祐介・高島信之・丹治康明・深井明比古『井原至山遺跡』 水上郡山南町 1975年

(2) 田辺昭三『陶邑古窯址群I』 平安学園考古学クラブ 1966年

田辺昭三『須恵器大成』 角川書店 1981年



第65図 C尾根支群出土遺物分布状況

第9表 C尾根支群の概要

	C-1号墳	C-2号墳	C-3号墳	C-4号墳
標高	117.00~120.00m	108.00~113.00m	104.10~108.30m	105.75~109.50m
平野からの比高差	21~24m	12~17m	8.10~12.30m	9.75~13.50m
傾斜角	25°	40°	40°	40°
墳径(主軸上)	18m (東西18.5×南北19.0)	13.5m (東西15.0×南北12.5)	10m (東西7.0×南北10.5)	10m (東西9.0×南北10.0)
墳丘高	南周溝より 0.5m 墳丘北裾より 4.0m	南西尾根より 0.2m 墳丘東裾より 2.75m	南周溝より 0.2m 墳丘北裾より 4.2m	南周溝より 0.2m 墳丘北裾より 3.75m
墓域	主軸方向 5.3m 直交方向 3.4m		主軸方向 夕直交方向	不明
内部主体構造	割竹形木棺 長3.5m×幅0.8m N86°W	横穴式石室 N59°W	箱形木棺 長2.80m×幅0.9m N87°W	不明
内部主体内	鉄劍1、鉄鏃6 鉄刀子1  赤色顔料が木棺底部に残存	(第1次玄室床面) 土玉11、鉄劍1 須恵器环蓋1 土師器細片  (第2次玄室床面) 耳環1、鉄劍3 須恵器平瓶2  (渠道・前底部) 耳環1、鉄劍3 須恵器提瓶2、壺1 环蓋4、土師器蓋1		
土内	(木棺東木口北側) 須恵器 蓋身セッタ4、 蓋付丸頭蓋1、 短頸蓋1  (西端) 須恵器 蓋身セッタ1  (棺蓋上) 須恵器 环蓋2、环身1		(木棺北側) 須恵器 环蓋3、环身5、 短頸蓋1、壺4  (木棺東木口北側) 須恵器大型壺1	
遺物	鉄刀子1 須恵器 环蓋5、环身5 商环1、鏡片1 蓋片1  (周溝内) 須恵器大型壺1	耳環1 鉄刀1 鉄鏃1 須恵器 环蓋8、环身20、 長頸蓋1、環1、 短頸蓋2  (周溝内) 須恵器大型壺1	須恵器环蓋1	土師器壺
備考	南尾根削平 南尾根側に1部周溝  墳頂部の盛土自然流出及び後世に削平	南西尾根削平 南西尾根側に1部周溝  追跡及び盗掘時に石室焼乱、副葬品擾乱	南斜面削り出し 南斜面側に1部周溝  墳頂部の盛土自然流出	南斜面削り出し 南斜面側に1部周溝  墳丘盛土自然流出が激しく主体部不明

## 第4章 まとめ

多利向山古墳群は、由良川の支流である竹田川東岸の山塊支脈上に位置し、兵庫県氷上郡春日町多利字向山に所在する。古墳群は木棺直葬を埋葬施設とする円墳3基、木棺直葬と推定される円墳3基および横穴式石室を埋葬施設とする円墳1基の合計7基で構成される。古墳群はA～Cの3尾根上に分布しており、A尾根支群は1基で、木棺直葬と推定される。B尾根支群は木棺直葬および木棺直葬と推定される古墳各1基であり、B-1号墳は複数の埋葬施設が認められる。C尾根支群は横穴式石室を埋葬施設とするC-2号墳のほか、木棺直葬墳2基、木棺直葬と推定されるもの1基の計4基である。C-1号墳は割竹形木棺を埋葬施設としており、群中やや異なった特徴を示している。また、C-2号墳の横穴式石室は群中唯一の例で、石室の形態が方形プランの玄室をもち、横穴式石室のうちでも古式に属する。

各支群のまとめについては既に記述してあるので、ここでは多利向山古墳群全体のまとめと提起する諸問題について若干の考察を加えてゆきたい。

## 第1節 土 器

多利向山古墳群からは須恵器と土師器が出土しており、土師器はB-1・C-2・C-4号墳において認められた。B-1・C-4号墳では壺、C-2号墳は甕である。須恵器はB-1・C-1・C-2・C-3号墳から出土しており、図示し得たものは総数112点である。そのうち、C-2号墳からの出土量が時期幅もあるためか、最も多い。器種別にみると、壺蓋および坏身が最も多く、全体の65%を占める。次いで、高坏および高坏蓋が10%程度認められる。次に、古墳別の器種構成をみると、B-1号墳では有蓋高坏が目立ち、C-2号墳では坏が圧倒的に多い。また、C-3号墳では直口壺の多さが目立っている。全体的に小型のものが圧倒的に多く、大型の甕・壺はC-2・C-3号墳で出土したのみである。

次に、須恵器を出土した全古墳を通じて認められた壺蓋および坏身についてその変遷をみると、第66図のようになる。他の器種との時期を辿れるセット関係は不明であり、本古墳群が存在する地域の須恵器編年も確立されていない現状では、詳細には明らかにできないが、田辺昭三氏の陶邑古窯址群の須恵器編年にあてはめて考えてみると、第66図のⅠはTK47型式の特徴を示している。この土器はB-1号墳にのみ認められる。ⅡはMT15型式の特徴を示し、C-1・C-2・C-3号墳から出土した土器がこれにあてはまる。Ⅲ以降はC-2号墳の追跡期にのみ認められ、この時期には多利向山古墳群の造墓活動は終息している。ⅢはTK10型式に

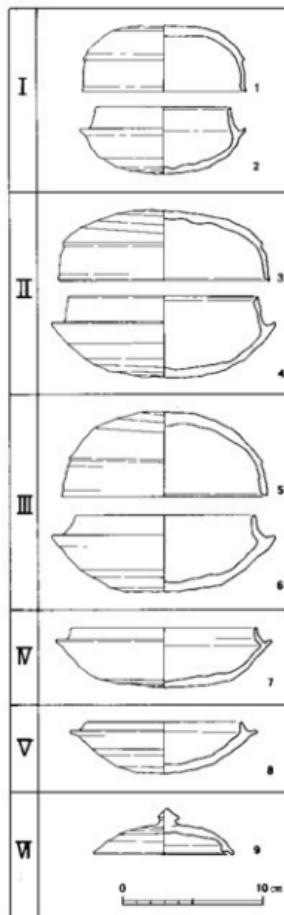
あてはまり、IVはTK 217型式に相当する。

したがって、本古墳群は5世紀末ないし6世紀初頭にB—1号墳が築造され、6世紀前葉にはC尾根支群が一齊に造墓を開始し、直後には早くも造墓を停止して、C—2号墳のみ追葬を行ひ、7世紀前葉にまで及んでいたことが窺える。

多利向山古墳群は非常に短期間に古墳が造営、終息していることが判明し、時代を追って継続的に築造された古墳群ではないことがわかる。

## 第2節 玄室方形プラン横穴式石室について

多利向山古墳群C—2号墳の埋葬施設である横穴式石室は、玄室の平面形が方形を呈し、八字状に聞く短い羨道を持つ、いわゆる初期横穴式石室であるが、管見によれば、このタイプの石室は兵庫県下でも類例が少ない（第10表）。その分布をみると、丹波には本墳を含め2基、播磨では5基存在するのみである。また方形プランの横穴式石室と並び注目されるのがT字形横穴式石室であり、県下では朝来郡和田山町の奥山1号墳、多紀郡篠山町の稻荷山古墳と姫路市鈴東町春日野（飾東）1号墳、神戸市垂水区毘沙門1号墳の4例が認められる。玄室方形プランおよびT字形石室は兵庫県下では、播磨・丹波・但馬にのみ分布しているが、但馬の初期横穴式石室は主として養父郡養父町賴音塚古墳にみられるような、いわゆる堅穴系横口式石室の形態をとっている。播磨に所在する玄室方形プラン横穴式石室の分布をさらに細かくみると、丁第3次1号<sup>(2)</sup>墳は・山頂古墳および山戸0—5号墳姫路市勝原区丁・山戸に所在し、西宮山古墳は竜野町日山、同じく竜野市揖西町長尾にはタイ山1号墳、小丸山古墳は揖保郡御津町中島、前山1号墳は揖保郡揖川町金剛山、最も北の姥塚古墳は揖保郡新宮町馬立に所在する。これらの



第55図 多利向山古墳群出土  
須恵器型式図

古墳はいずれも律令制下の攝保郡内に分布していることが注目されよう（第67図）。しかも、これらの古墳のうち、遺存状態の良好な石室はすべて穹窿式となっている。

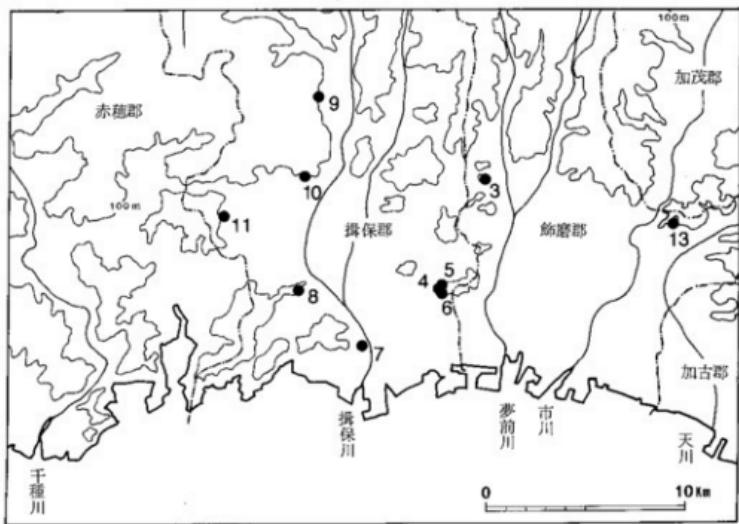
次に、この形態の石室を持つ古墳の時期であるが、須恵器が出土している古墳のうち最も古いものは田辺編年のMT15型式であり、多利向山C—2号墳をはじめ、至山古墳、丁第3次1号墳の3基である。次のTK10型式に含まれるものは西宮山古墳とタイ山古墳である。小山丸古墳および姥塚古墳出土の装飾付須恵器については、6世紀中葉ないし後葉と考えられる。すなわち、兵庫県下の玄室方形プラン横穴式石室は、6世紀前葉に出現し、6世紀中葉ないし後葉には築造されなくなったことがわかる。

玄室方形プランの横穴式石室については、白石太一郎氏が直接中國南朝の磚椁墓に系譜を求めている。<sup>(15)</sup>一方、水野正好氏は、高句麗の諸墳が楽浪・帶方の中国系磚椁墓から導かれるという通説に立って、必ずしも中國が故地であるとは限らないとされている。<sup>(16)</sup>水野氏はさらに、近江国滋賀郡に多く所在する正方形平面・穹窿頂立面玄室の石室について、主として高句麗・百濟に故地を求めており、その被葬者は楽浪・帶方遺民の居住する高句麗・百濟からの帰化系氏族としている。<sup>(17)</sup>さて、水野氏は、滋賀郡大友郷から分枝して滋賀郡古市郷に居住していた大友但波氏族の故地について、和爾氏との関係から、兵庫県多紀郡篠山町に所在する雲部車塚古墳付近に求めており、近接した南小田中の稻荷山古墳が幅長プラン穹窿頂持送り立面の横穴式石室であることに注目している。

播磨の方形平面穹窿式石室の分布は、さきにみたように旧攝保郡内に集中している。そのうち、丁第3次1号墳・山頂墳、山戸0—5号墳が所在するあたりには太田の地名があり、森浩一氏も指摘しているように、『播磨國風土記』に記載のある、朝鮮からの最後の移住地である播磨國大田に比定される。風土記の伝承をそのまま信用するわけにはゆかないが、この地域一帯が朝鮮からの渡来人との関係があったために伝承が残ったものと思われる。したがって、この地域に集中してみられる方形平面穹窿式石室が、この伝承とは無関係であるとは言い難い。

一方、多利向山C—2号墳が存在する一帯は春日部の名称が残っており、『和名抄』記載の春部郷に比定されているが、それを裏付けるように、春日町棚原に所在する山垣遺跡から「春部里長」と記載された奈良時代の木簡が出土している。春部を領有・管理したと考えられる春部氏は和邇氏の一氏族であり、水野氏によれば、和邇氏は渡来系氏族を受け入れ、統轄していたらしい。<sup>(18)</sup>したがって、渡来系氏族とつながりの深い和邇氏と一族の春部氏とC—2号墳の玄室方形プラン横穴式石室とは不可分の関係ではないと考えられる。

以上述べてきたように、多利向山C—2号墳について、玄室方形プランの横穴式石室を持つこと、春部氏と和邇氏との関係から、古墳を管んだ集団は渡来系氏族と何らかの関係を持っていたとする可能性は否定しきれないものと思われる。



第67図 播磨地域の玄室方形プランおよびT字形横穴式石室墳分布図

番号	古墳名	所在地	墳形	石室形	玄室長(m)	玄室幅(m)	玄門幅(m)
1	多利向山C-2号墳	水上郡春日町多利	円	方	2.25	2.25	0.72
2	至山古墳	水上郡山南町井原	円	方(2.00)	2.00	0.75	
3	実法寺3号墳	姫路市鯖町西町実法寺	円	方	2.95	2.50	
4	丁第3次調査1号墳	姫路市勝原区丁	円	方	2.35	2.18	0.56
5	丁山頂古墳	姫路市勝原区丁	円	方	2.93	3.40	1.11
6	山戸0-5号墳	姫路市勝原区山戸	円	方	2.50	2.10	
7	小丸山古墳	揖保郡御津町中島	前方後円?	方	2.80	3.00	1.20
8	前山1号墳	揖保郡揖保川町金剛山	円	方	2.30	2.20	1.23
9	姥塚古墳	揖保郡新宮町馬立	円	方	3.60	3.05	1.20
10	西宮山古墳	龍野市龍野町日山	前方後円	方	3.80	3.40	1.40
11	タイ山1号墳	龍野市鶴西町長尾	円	(方)	(2.55)	(2.47)	—
12	稻荷山古墳	多紀郡篠山町南小田中	前方後円?	T	2.50	3.66	0.95
13	春日野1号墳	姫路市鶴東町春日野	円	T	1.72	2.66	1.13
14	奥山1号墳	朝来郡和田山町		T			
15	尼沙門1号墳	神戸市垂水区舞子坂	円?	T	1.70	4.00	1.00

第10表 兵庫県下の玄室方形プランおよびT字形横穴式石室墳地名表

### 第3節 多利向山古墳群の構造

多利向山古墳群は、向山山塊から北側に派生する3つの支尾根上に存在する計7基の古墳により構成されている。それらは西方よりそれぞれ2基、1基、4基であり、本報告では西方よりA・B・C尾根支群と呼称しているが、ここで使用している支群という名称は、政治的、文化的な社会背景を前提とした名称ではなく、単に3つの支尾根上に分かれて古墳が存在しているといった程度の語義として把えている。したがって、今後本古墳群およびその周辺地域に関してさらに研究が進めば、適切な概念用語をあてはめることができるであろう。また、ここでは3群に分かれて存在する1つの古墳群として把えているが、この点についても今後の研究により、いくつかの古墳群として考えるなどの修正を行わなければならないかもしれません。

さて、多利向山古墳群は5世紀末ないし6世紀初頭から6世紀前葉という極めて限られた期間内に築造されたものであるが、通常の群集墳が6世紀後半にピークをむかえると比べると約半世紀古いことがわかる。また、群集墳においては2~3基の古墳が最小単位となって、その築造過程が辿れるような時間差をもって築かれているのが通常であるが、その点からも多利向山古墳群は一般的な群集墳とはやや趣を異にしていることがわかる。

埋葬施設については、C-2号墳が横穴式石室を採用する以外はすべて木棺直葬であり、しかもB-1・C-2号墳を除いたすべてが单次葬である。また、C-1号墳のみ割竹形木棺を使用しており、他はすべて箱形木棺である。

土器以外の副葬品は、木棺直葬を埋葬施設とする古墳のうち、A-1号墳が管玉およびガラス小玉、B-1号墳が鉄刀・鉄鎌・刀子・鉄斧・鉢で、C-1号墳は鉄劍・鉄鎌・刀子である。横穴式石室のC-2号墳からは、金環・土玉・鉄刀・鉄鎌が出土している。そのうち鉄鎌をみると、B-1・C-1号墳がともに細根式のものであるが、B-1号墳のものはC-1号墳に比べて刃部が長い。C-2号墳は平根式および尖根式の鉄鎌で、細根式のものは認められない。

多利向山古墳群の特徴は、木棺直葬を主体とする一墳一葬の古墳であり、時期的には非常に限られた期間に相次いで築造され、鉄器を副葬する古墳としない古墳がある。

また、群中では立地、墳丘規模、埋葬施設、副葬品からみると、B-1・C-1・C-2号墳がやや優位にあると考えられるが、明確な区別があるわけではなく、全ての古墳は比較的等質であると言えるであろう。したがって、多利向山古墳群中では群の盟主ともいいくべき古墳と他の古墳という関係は認められない。

埋葬主体はB-1・C-2号墳を除いたすべての古墳が单次葬あるいは单次葬と推定され、古墳被葬者は家族を含まない有力家父長のみであったと考えられる。しかも短期間のうちに7基が築造されているところをみると、单一の家族の家父長が家長の死を契機として世代毎に古

墳を造営していった結果のものではないことは明らかであろう。この点について比較的良好なC尾根支群についてみてみよう。C尾根支群は約四半世紀の短い間に4基もの古墳が築造されており、C-2号墳以外は単次葬で、これを4世代の家長墓と考えるには1世代の時間が短か過ぎると考えられ、また、C-2号墳のみ追葬を行っていることを考え合わせて、「一群集墳内の同時期あるいは1世代以上の時間的間隔を持たぬ古墳の数はそのまま同時期の築造単位の数を示す」という考え方方に立てば、この支群の築造主体の単位は、4基の古墳がそのまま4つの別個の家族と考えることができるであろう。しかも、古墳築造の契機は当然ながら各家長の死であったと考えられるのである。また、各単位は1基の古墳を営んだのみで築造を中止しており、唯一C-2号墳が7世紀前葉まで追葬を行っているのである。

#### 第4節 多利地域内の多利向山古墳群の位置

多利地域は竹田川の東岸にあり、西方を除いては周辺を山塊に囲まれており、小盆地のような様相を呈している。1つの小地域のまとまりとして考えるとちょうど良い広さとなっている。この地域内には多利向山古墳群のほかにいくつかの古墳および古墳群が存在している。北側の小富士山東麓および上位段丘面上には柏野古墳群<sup>(24)</sup>が存在しているが、それらは多利集落の北側に所在する南集落側に面している。東方には近畿自動車道に伴って調査が行われた松ノ本古墳群<sup>(25)</sup>、その北側にはカナツキ古墳がある。松ノ本古墳群の南、蓮華寺の南方尾根上には木棺直葬<sup>(26)</sup>を埋葬施設とすると考えられる天神山古墳群(仮称)<sup>(27)</sup>が存在している。多利向山古墳群がある山塊の西麓端には芝ヶ西古墳群と呼称される2基の古墳が存在しているが、この2基の古墳は墳丘高より横穴式石室を埋葬施設としているものと思われる。さらに南方には全長37mを測る前方後円墳の二間塚古墳<sup>(28)</sup>があるが、山塊に阻まれ多利集落を見通すことは不可能で、西および南方に面している。したがって、古墳の造営地はその母胎となった集落を望める位置を選んでいるという前提に立てば、多利周辺の古墳で、この地域内に造営主体の集落があったと推定される古墳は、多利向山古墳群のほかカナツキ古墳、松ノ本古墳群、天神山古墳群、芝ヶ西古墳群である。これらのうち内容の明らかなものは、本古墳群と松ノ本古墳群のみである。

資料的な制約が伴っているが、多利地域の古墳群についての若干の検討を行ってみたい。

多利向山古墳群は一部を除き、単次葬の木棺直葬墳であり、5世紀末ないし6世紀初頭に造営を開始し、6世紀中葉までには終息している。松ノ本古墳群も同じく木棺直葬を埋葬施設とする、9基からなる古墳群で、5世紀末ないし6世紀初頭から6世紀中葉にかけて築造されており、いずれも1墳丘1埋葬施設の法則を守っている。また、天神山古墳群については不明な点が多いが、墳丘高より木棺直葬墳であると考えられる。これら3古墳群が一部を除き、いず

れも山塊支脈上に数基群集して構築されていること、木棺直葬を埋葬施設とすること、1墳丘1埋葬施設となっていること、その築造時期が5世紀末ないし6世紀初頭から6世紀中葉の間であることなど共通する点が多い。これらの共通した要素を持つ古墳をA類とする。A類の古墳群はその示す時期から、いわゆる初期群集墳の範疇に含まれる。一方、カナツキ古墳、芝ヶ西古墳群のように山裾付近に築造され、横穴式石室を埋葬施設とする古墳が1基ないし2基存在している。この特徴を示すものをB類として以下記述を進めたい。

今までみてきた多利地域内に分布する古墳は、いずれもこの地域内で集落を営んでいた集団の墓と考えられる。内容的に異なる二種の古墳群は、A類が5世紀末ないし6世紀初頭に築造を開始し、6世紀中葉には造墓を停止しており、B類は出土遺物が不明で、時期も明確にし難いが、松ノ本古墳群の報告者はA類よりも後出すると考えている。<sup>(31)</sup>一方、二間塚古墳はその位置から律令制下の春部郷一帯を望む地にあり、おそらくこの地域の首長クラスの墳墓であろう。時期は5世紀後葉ないし6世紀の古墳と考えられる。その後、5世紀末ないし6世紀初頭に多利地域においてA類の古墳群が築造され、6世紀中葉には終息するが、かわってB類の古墳が築かれるようになる。

さて、群集墳の築造契機については、「大和政権」が新たに出現しつつあった家父長層に夜して、自己の体制に組み込むために古墳の造営を許したという考え方方が主流を占めている。一方、関川尚功氏は、新たに出現した各地域集団の有力家長層が古墳の築造権を自らの力で獲得していったと考え、全く逆の立場をとっている。<sup>(32)</sup>そこには古墳の築造権をめぐって「下賜」あるいは「獲得」の両極面があるが、いずれにせよ群集墳築造の遠因となったのは、生産力の高まりを背景にした有力家父長層の抬頭によるものであろう。この考えに立って多利地域内の古墳群を見れば、新たに抬頭した有力家父長層によって5世紀末ないし6世紀初頭にA類の古墳が築造されるが、あくまで家長墓によって構成されている。家長とその家族が葬られるのは、次のB類の横穴式石室からである。この1墳丘1主体の木棺直葬から複数主体を葬るための横穴式石室への変化は、葬送思想の変革でもあり、そこに内包する社会的背景がいかなるものであったのか。この点について、井守徳男氏は集団秩序の再編があったと考えている。<sup>(33)</sup>この件に関して言及する力は持ちあわせていないが、少なくとも横穴式石室の採用、A類からB類への変化については、多利向山C—2号墳にその萌芽が認められるのである。

しかしながら、周辺の古墳の様相が明らかでないため、今後の発掘調査の成果に期待し、詳細な検討は今後の課題として残しておきたい。また、多利向山古墳群が前方後円墳や特殊な遺物を持つなどの盟主墳が認められず、等質に近い古墳の集合であり、いわゆる初期群集墳でありながら、その内容が他のものとは異っている件についても言及すべきであったが、この点についても今後の課題として残し、研究材料としての提示にとどめておく。

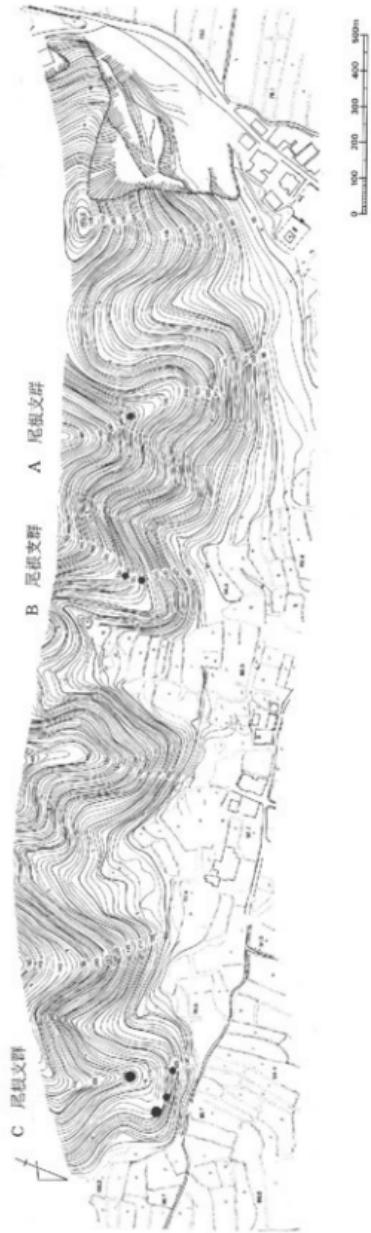
(註)

- (1) 田辺昭三『陶邑古窯跡群Ⅰ』 平安学園考古学クラブ 1966年  
田辺昭三『須恵器大成』 角川書店 1981年
- (2) 衣の作成にあたっては、松本正信氏の御教示を得た。
- (3) 植木誠一「但馬首長墓の系譜」『日本の古代遺跡2 兵庫北部』 保育社 1982年
- (4) 富田好久・亥野 強・勇 正広『小田中・小立周辺の古墳調査』『綾山・多紀町の古墳』 多紀郡教育事務組合教育委員会 1974年
- (5) 亥野 強『兵庫県鈴東1号墳』『古代学研究』34号 1963年
- (6) 池田正男・渡辺 昇『義父・觀音塚古墳』 義父町教育委員会 1980年
- (7) 上田哲也「第3次調査とその成果」『姫路丁古墳群』 東洋大学附属姫路高等学校 1966年
- (8) 武藤 勝『兵庫県竜野市西宮山古墳発掘略報』 1955年  
松本正信『西宮山古墳』『龍野市史』第4巻 龍野市 1984年  
八賀 晋『富雄丸山古墳・西宮山古墳出土遺物』 京都国立博物館 1982年
- (9) 上田哲也「C地区A群(1号墳)」「長尾・タイ山古墳群」 龍野市教育委員会 1982年
- (10) 松木正信『小丸山古墳』『龍野市史』第4巻 史料編1 龍野市 1984年
- (11) 高板 好『馬立の穹窿型古墳』『播磨新宮町史』第2巻上代編 1965年
- △ 註(1)と同じ。
- (12) 藤井祐介・丹治康明・深井朝比吉『井原至山古墳と出土遺物』『井原至山遺跡』 水上郡山南町 1975年
- (13) 岸本雅敏『装飾付須恵器と首長墓』『考古学研究』第22巻第1号 1975年
- △ 白石太一郎『日本における横式石室の系譜』『先史学研究』第5号 1965年
- △ 水野正好『滋賀郡所在の漢人系氏族とその墓制』『滋賀県文化財調査報告書』第4冊 1969年
- △ 註△と同じ。
- △ 註△と同じ。
- (14) 森 浩一「群集墳と古墳の終末」『岩波講座日本歴史』2 古代2 岩波書店 1977年
- △ 渡辺 強『和名類聚抄郷名考証 増訂版』 吉川弘文館 1970年
- △ 加古千恵子・平田博幸『山垣遺跡』 兵庫県教育委員会 1984年
- △ 註△と同じ。
- △ 關川尚功「群集墳をめぐる諸問題一大和を中心として」『桜井市外鏡山北麓古墳群』 奈良県立橿原考古学研究所 1978年
- (16) 丹波史談会『丹波水上郡志』上巻(復刻版) 臨川書店 1985年
- △ 井守徳男・村上泰樹・山下史朗・西尾知恵子『松ノ本古墳群』 兵庫県教育委員会 1985年
- △ 註△と同じ。
- △ 筆者らが踏査した。尾根上に立地する約5基程度の円墳である。
- △ 註△と同じ。
- (19) 植木誠一『丹波の遺跡』『日本の古代遺跡2 兵庫北部』 保育社 1982年
- △ 註△と同じ。

02 白石太一郎「畿内の後期大型群集墳に關する一試考」『古代学研究』42・43合併号 1966年  
水野正好「群集墳の構造と性格」『古代史発掘』6 古墳と國家の成り立ち 講談社 1975年  
広瀬和雄「群集墳論序説」『古代研究』15 元興寺文化財研究所 1978年

03 註録と同じ。

04 註録と同じ。





A 尾根支群 遠 景



A-1号墳 遠 景 (調査前)



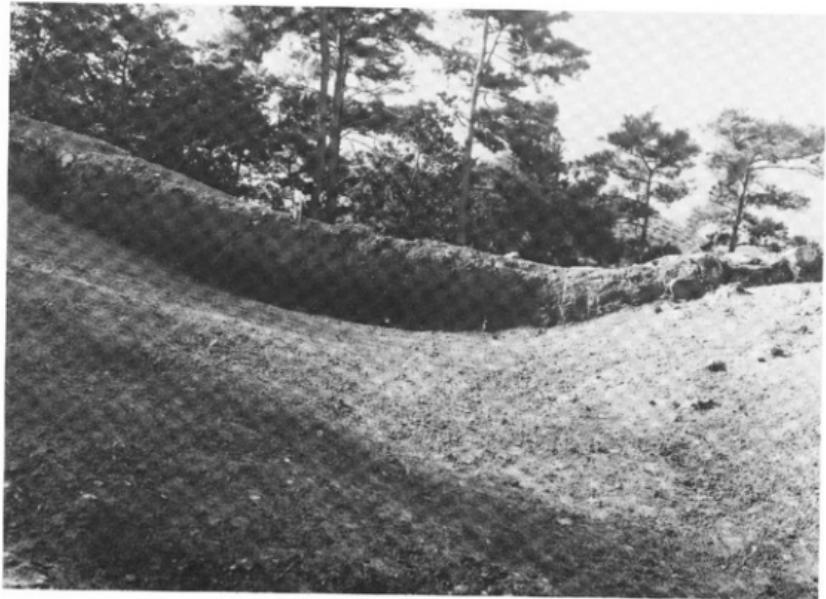
A-1号墳 全 景 (南から)



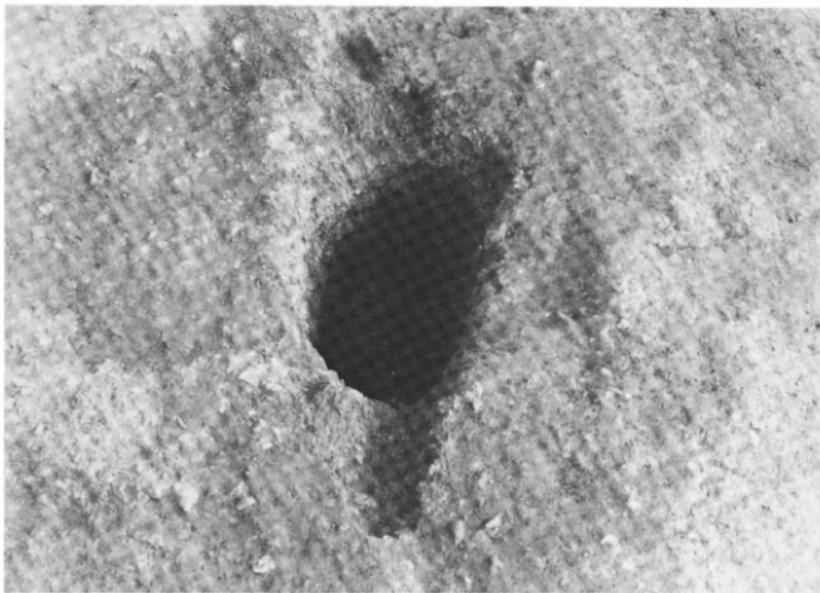
A-1号墳 全 景 (北から)



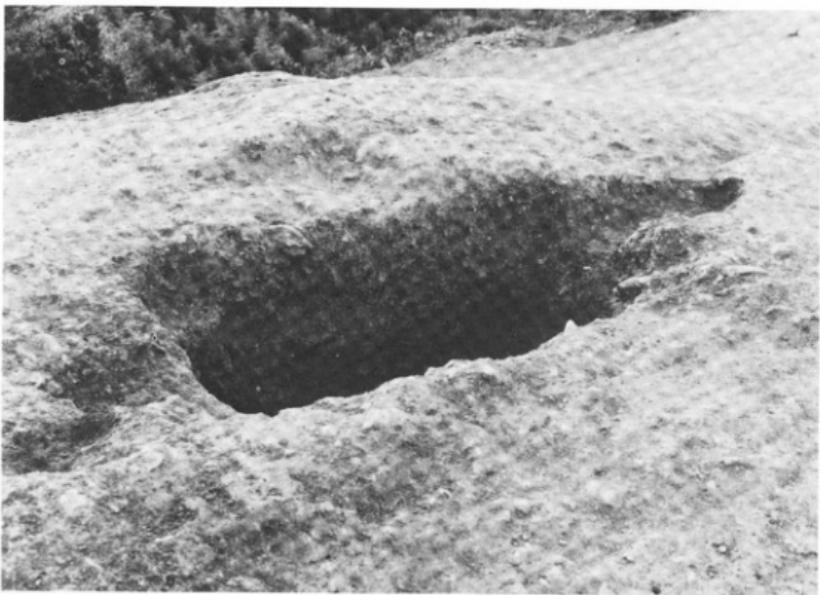
A-1号墳 全 景 (調査後)



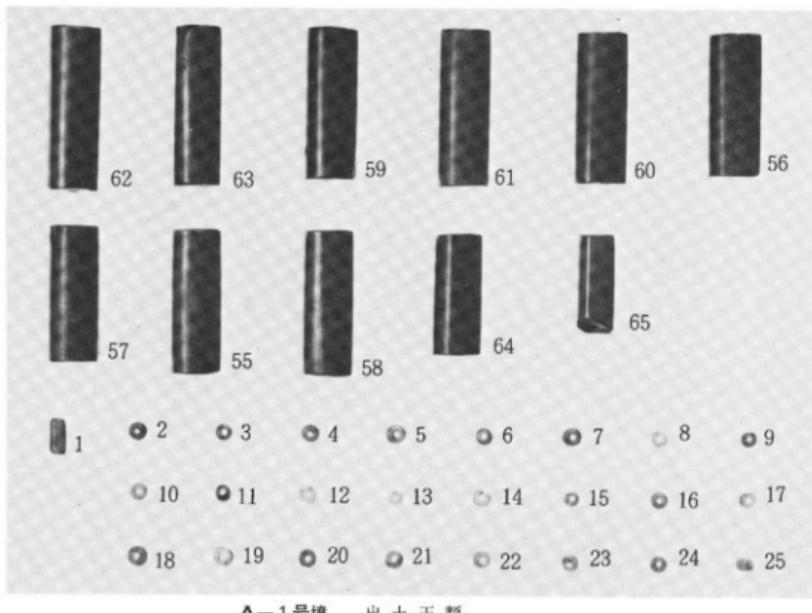
A-1号墳 溝土層堆積状況



A-1号墳 土塚全景（北から）



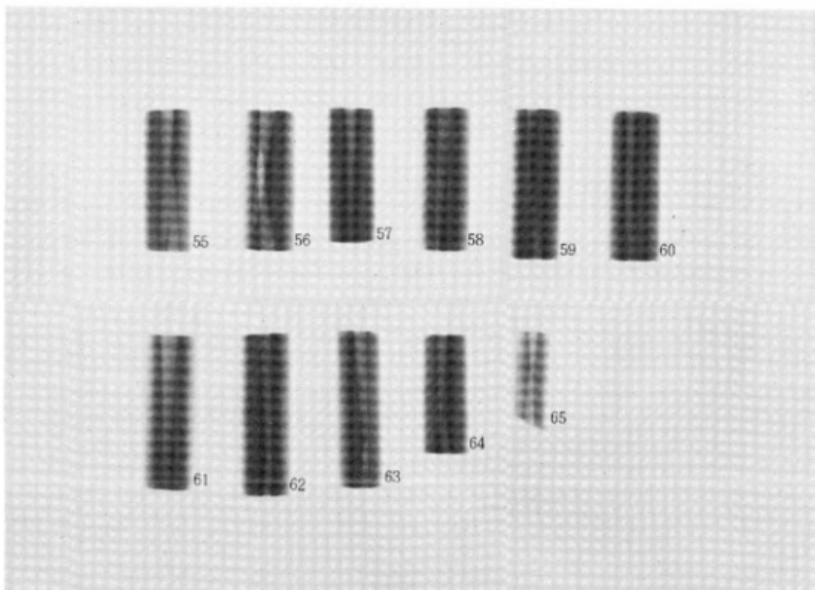
A-1号墳 土塚全景（東から）



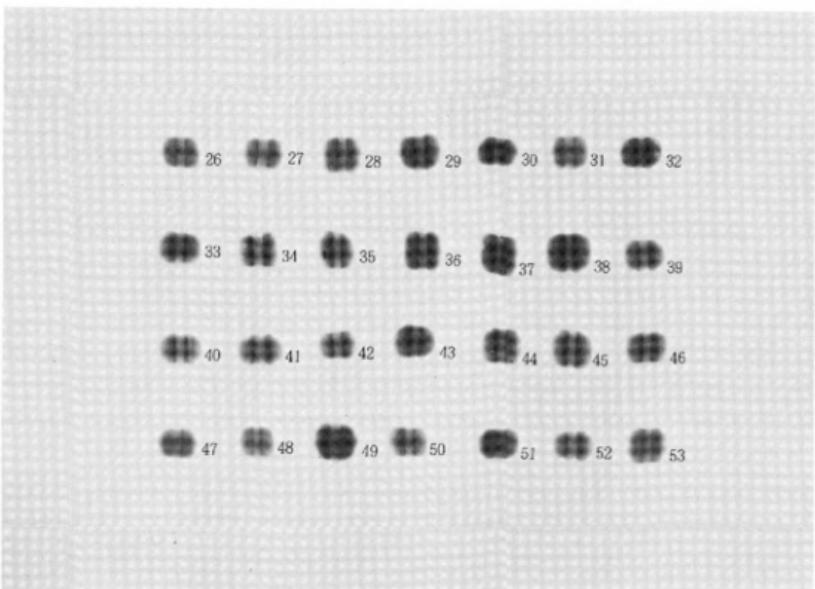
A-1号墳 出土玉類



A-1号墳 出土玉類



A—1号墳 出土玉類X線透過写真



A—1号墳 出土玉類X線透過写真



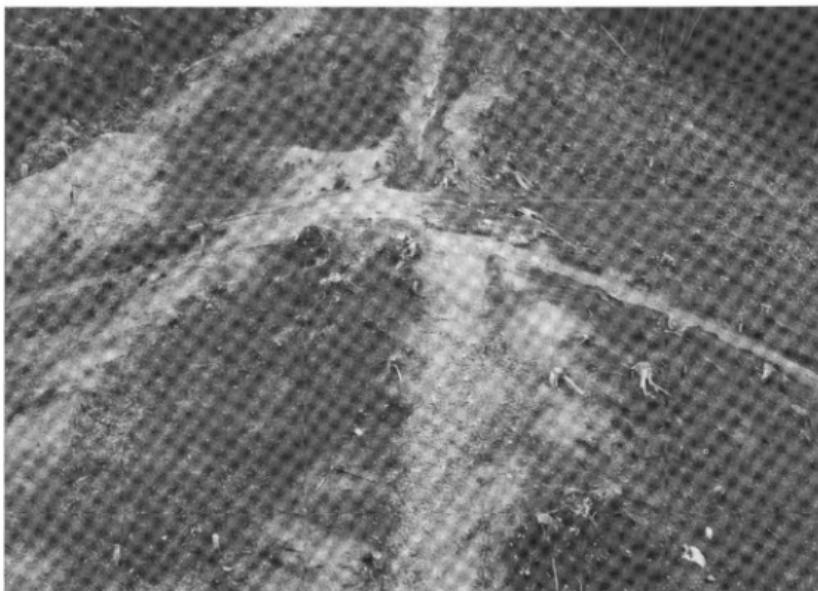
B尾根支群 遠景（北から）



B尾根支群 遠景（北から）



B-1号墳 遠景 (西から)



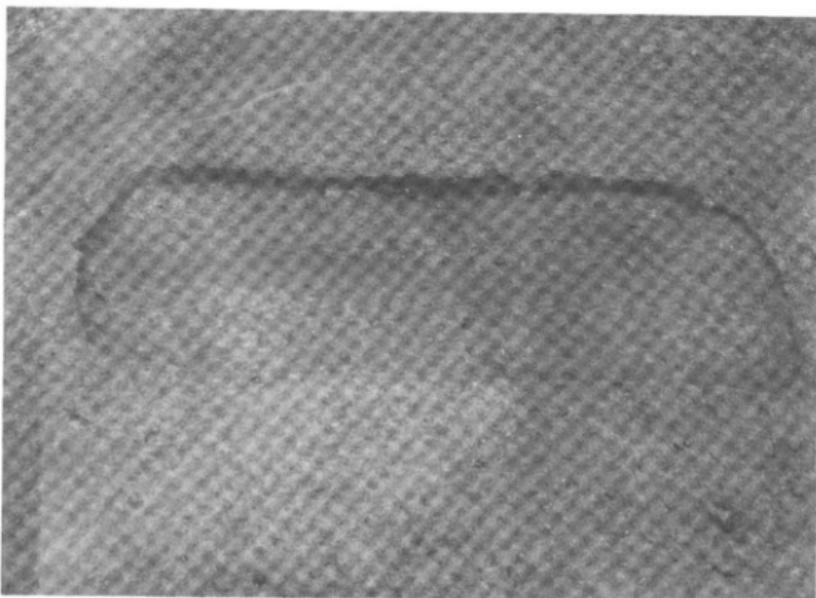
B-1号墳 全景 (調査前)



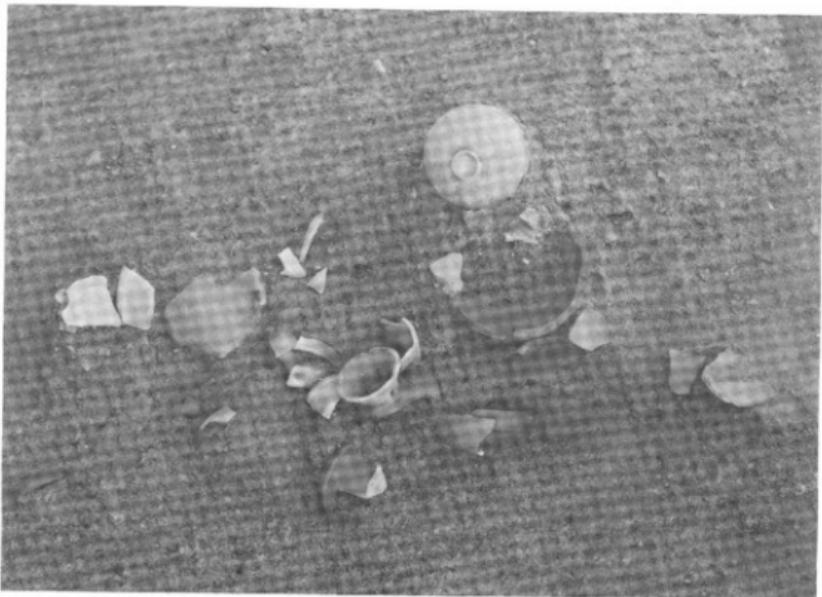
B-1号墳 全 景



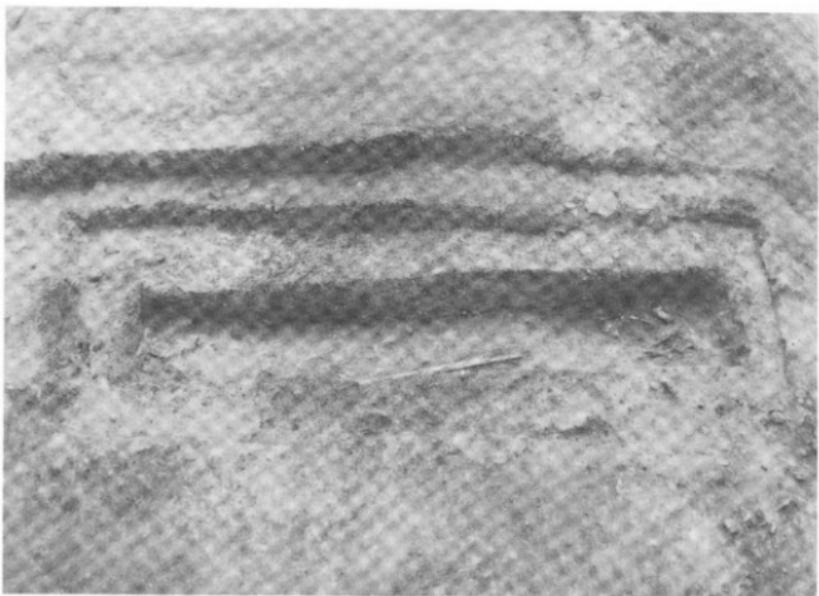
B-1号墳 弧状溝断面（東から）



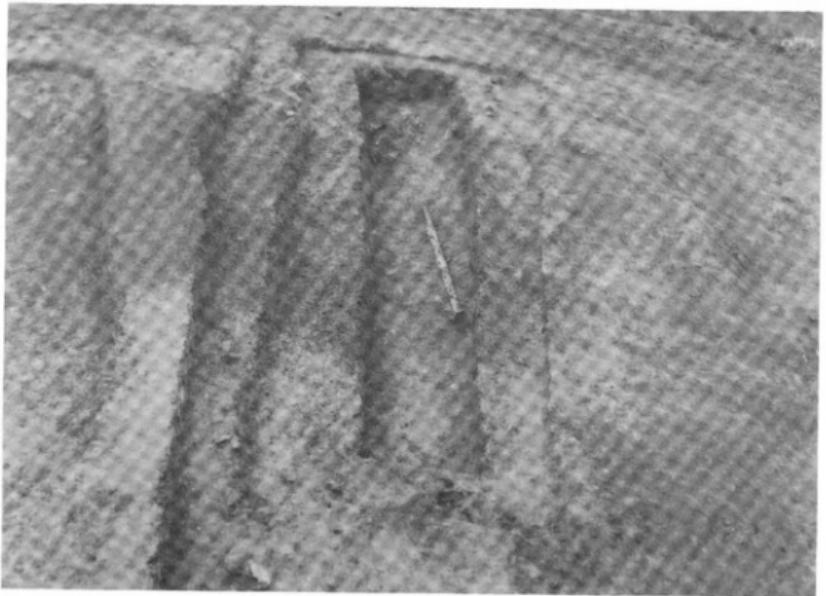
B-1号墳 第1主体部



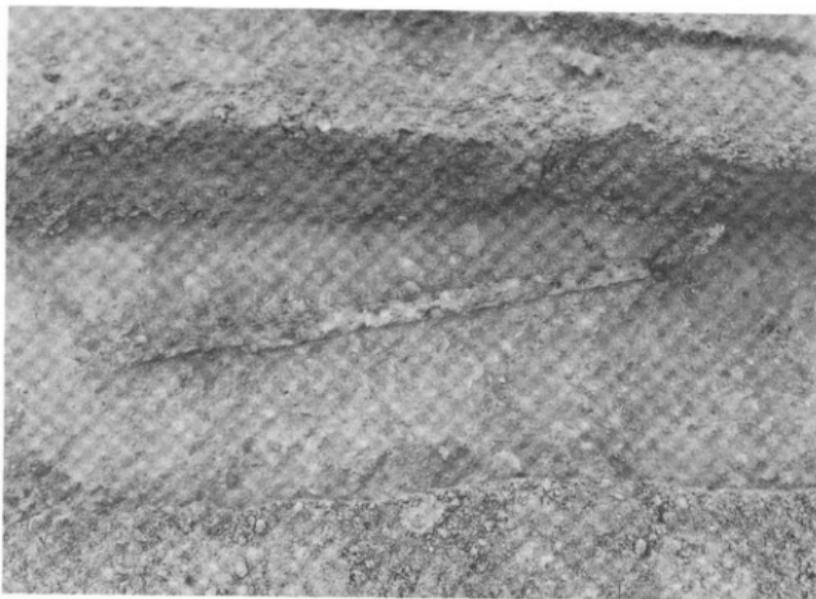
B-1号墳 第2主体部遺物出土状況



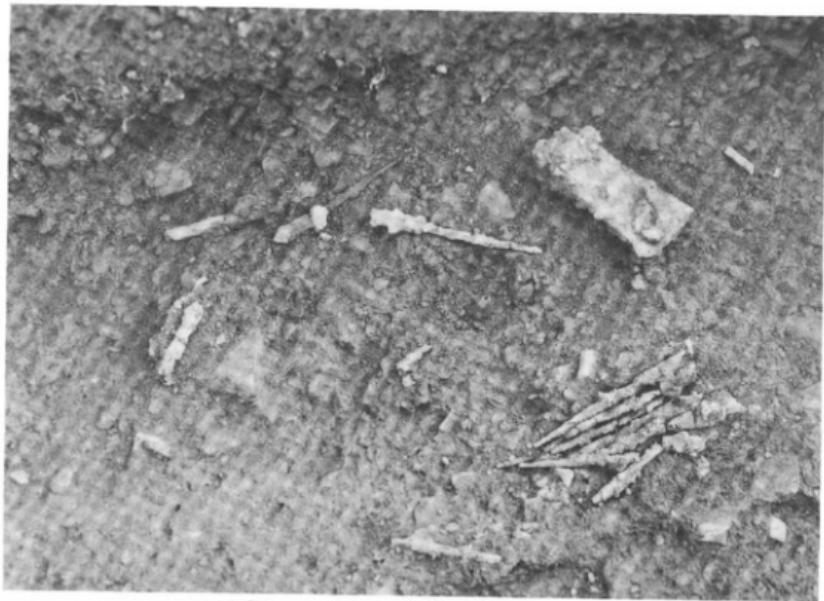
B-1号墳 第2主体部（北から）



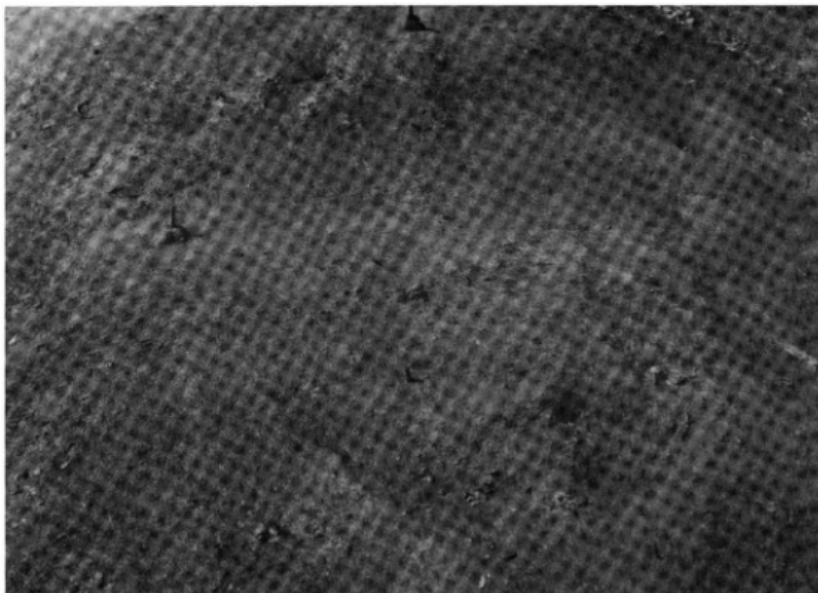
B-1号墳 第2主体部（東から）



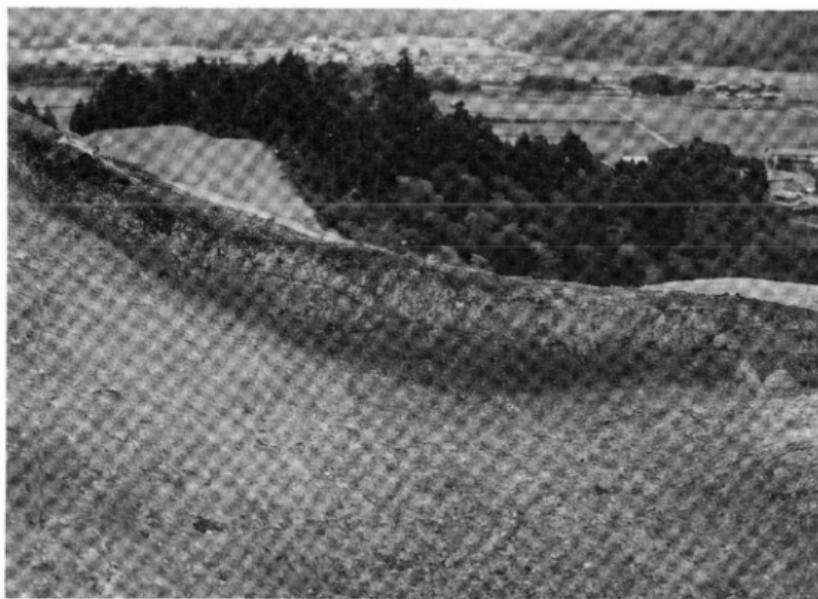
B—1号墳 第2主体部鉄刀出土状況



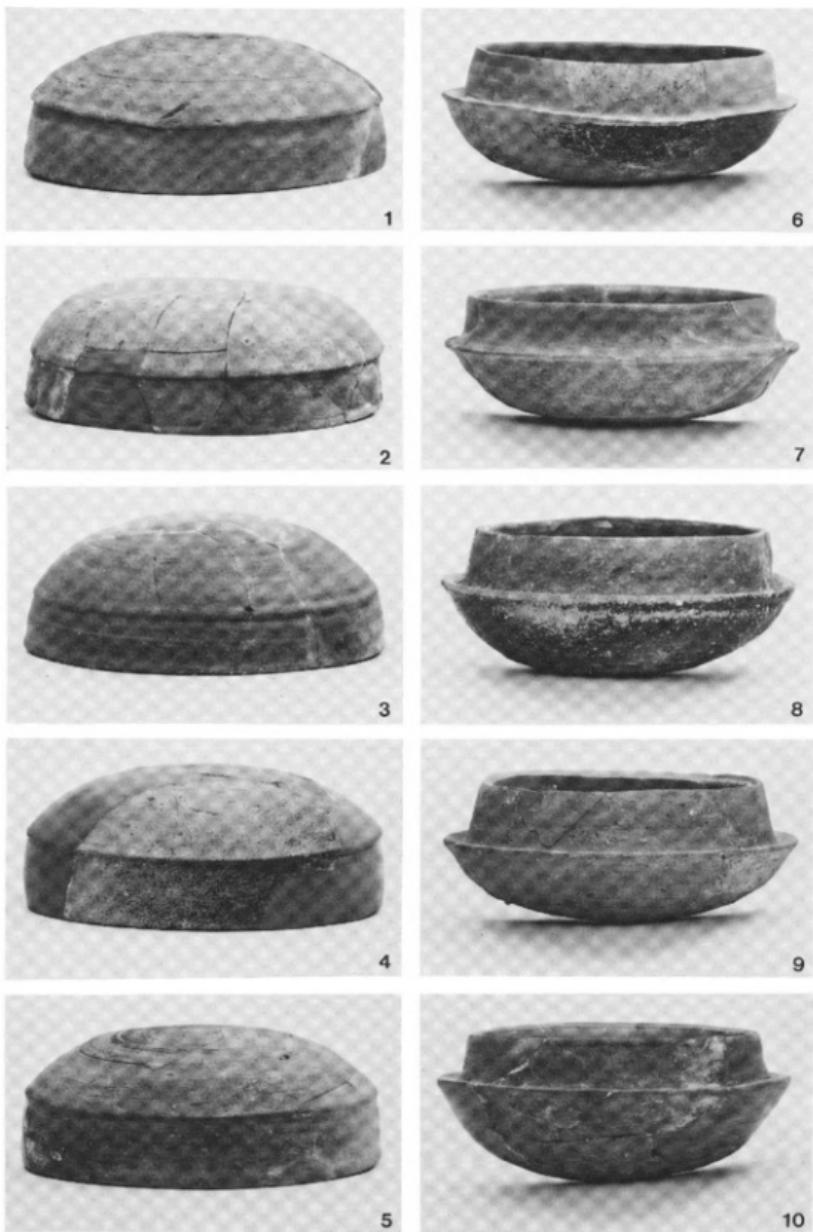
B—1号墳 第2主体部鉄製品出土状況



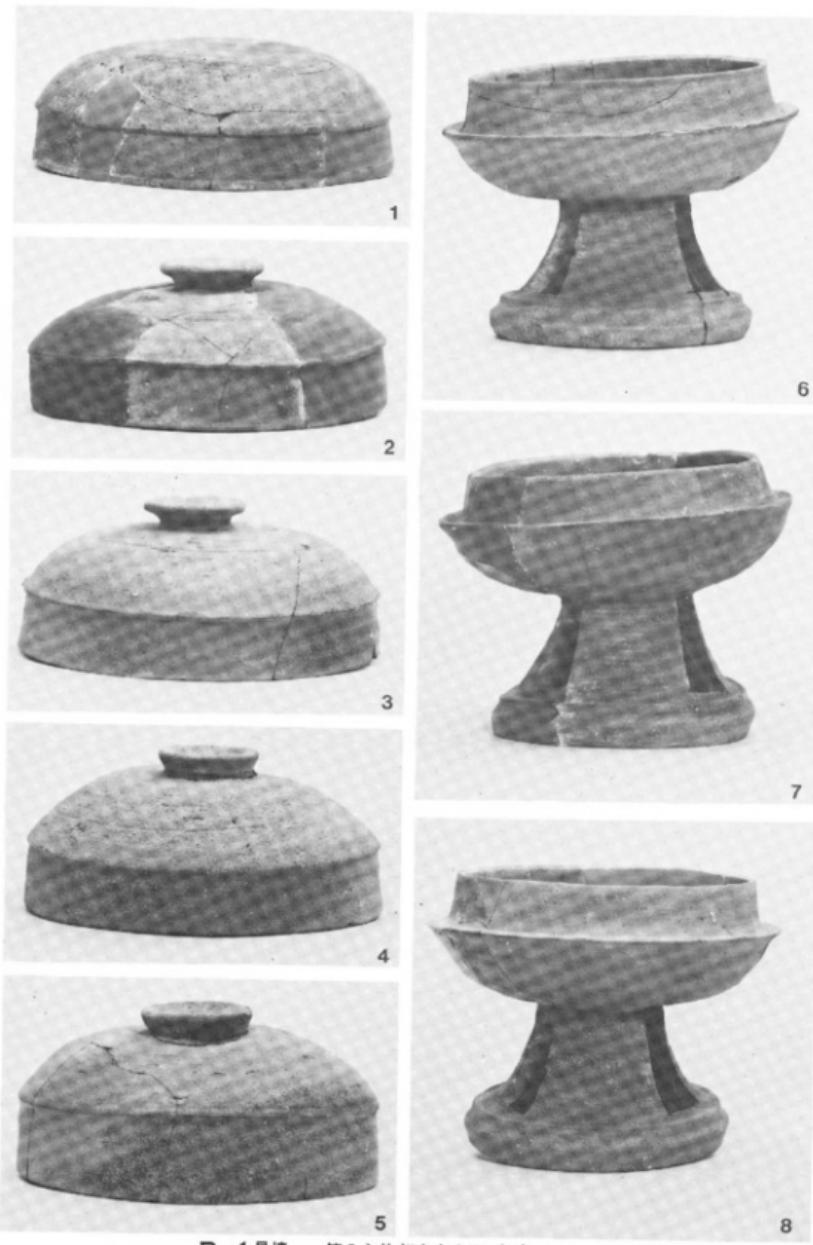
B-3号墳 全 景 (北から)



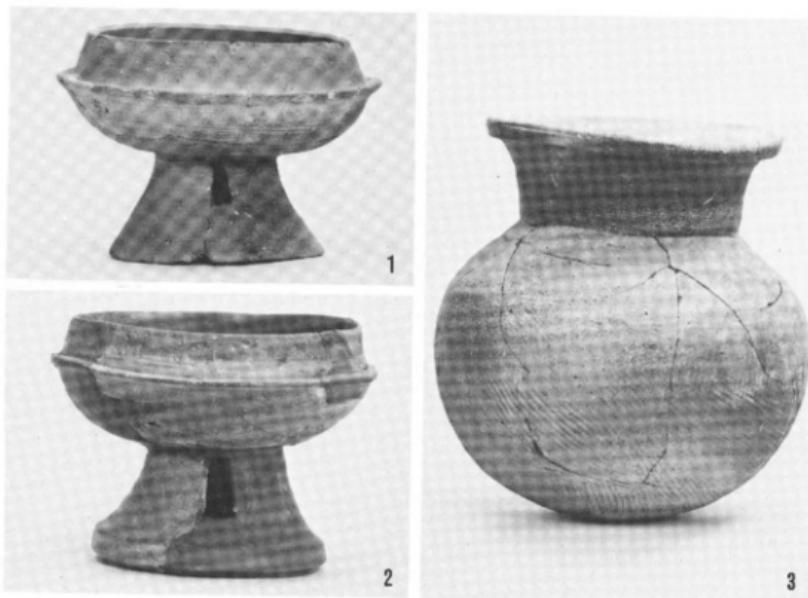
B-3号墳 弧状溝断面 (東から)



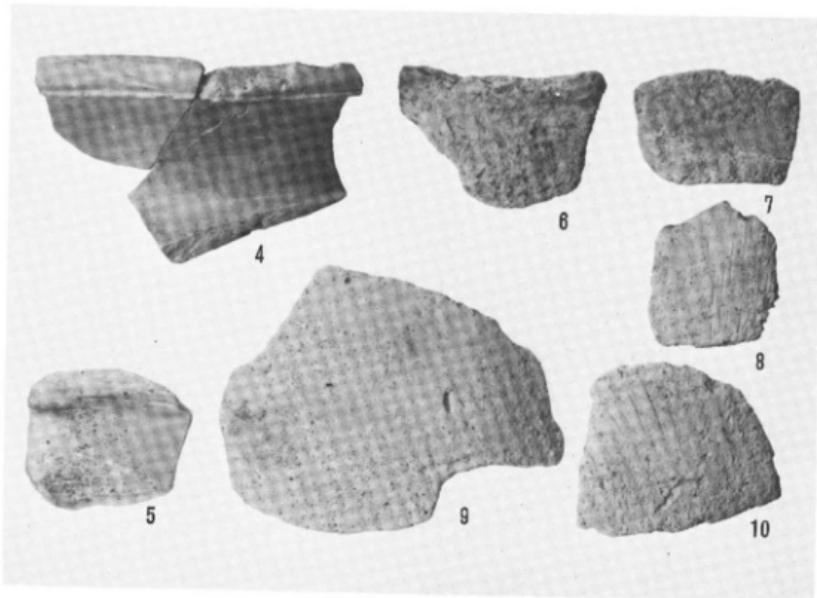
B—1号墳 第2主体部出土土器（1）



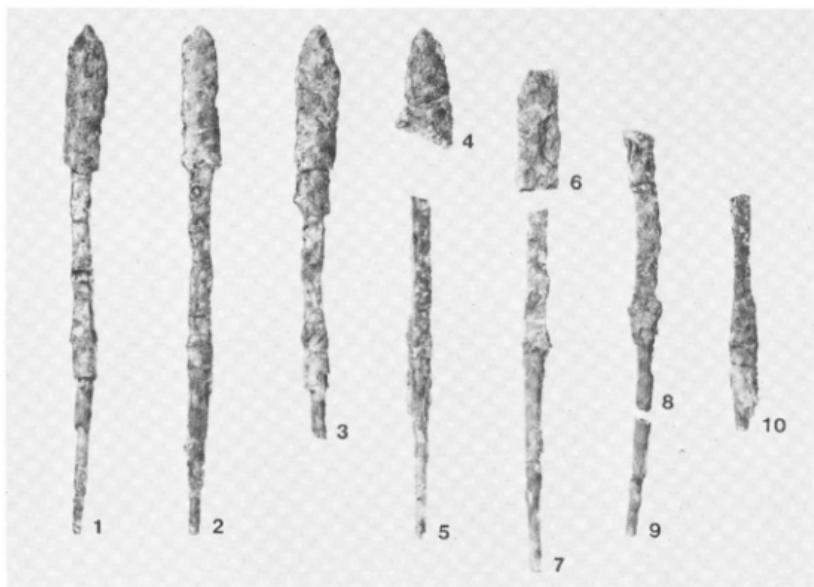
B—1号墳 第2主体部出土土器（2）



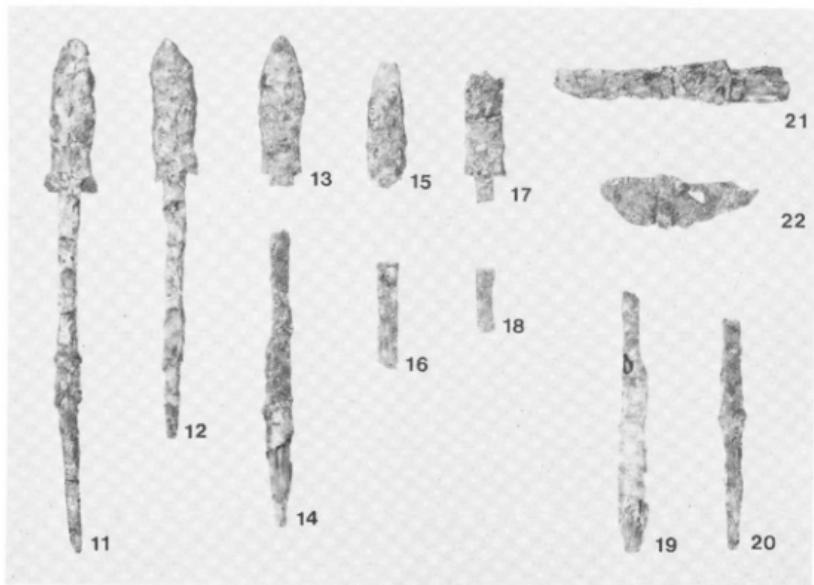
B—1号墳 第2主体部出土土器（3）



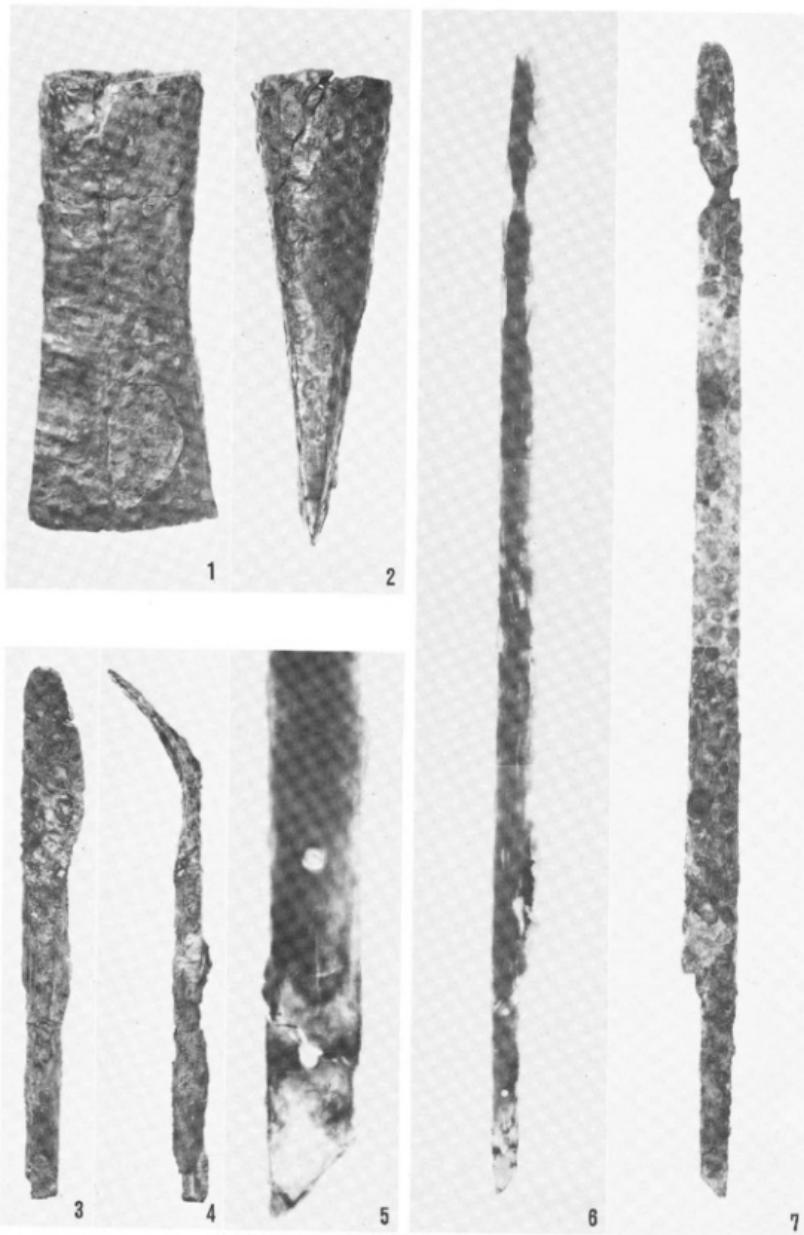
B—1号墳 出土土器



B-1号墳 出土 鉄 鐵



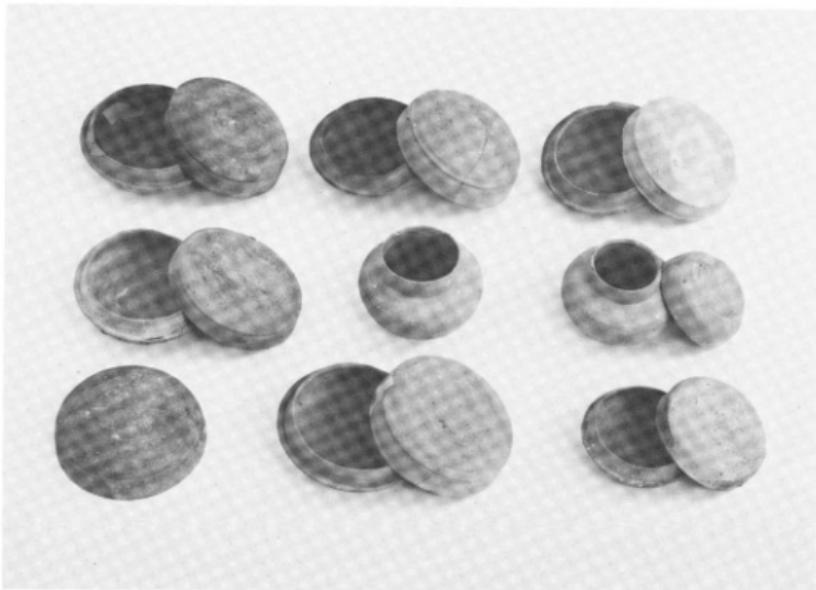
B-1号墳 出土鐵鐵・刀子



B-1号墳 山土鉄製品



C尾根支群 速 景 (調査前)



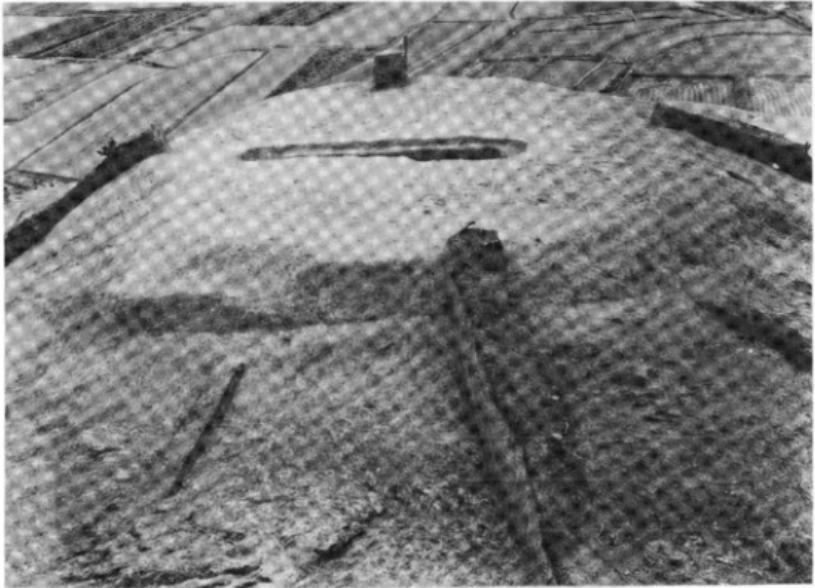
C—1号墳 山土土器



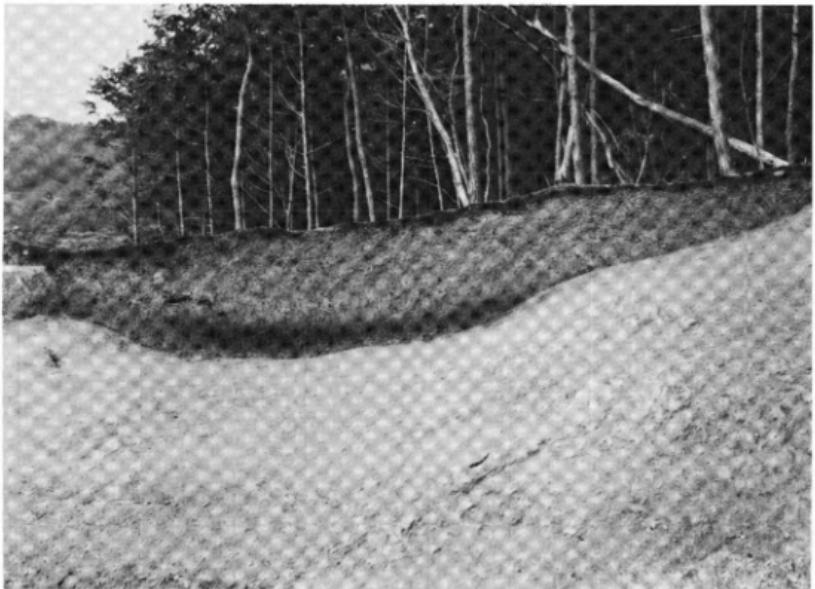
C-2号墳 出土土器



C-3号墳 出土土器



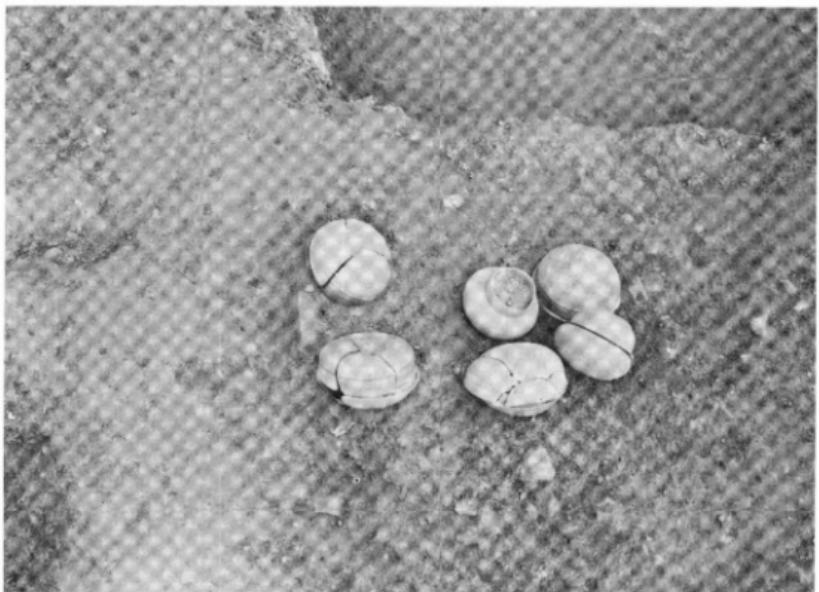
C-1号墳 全景（南から）



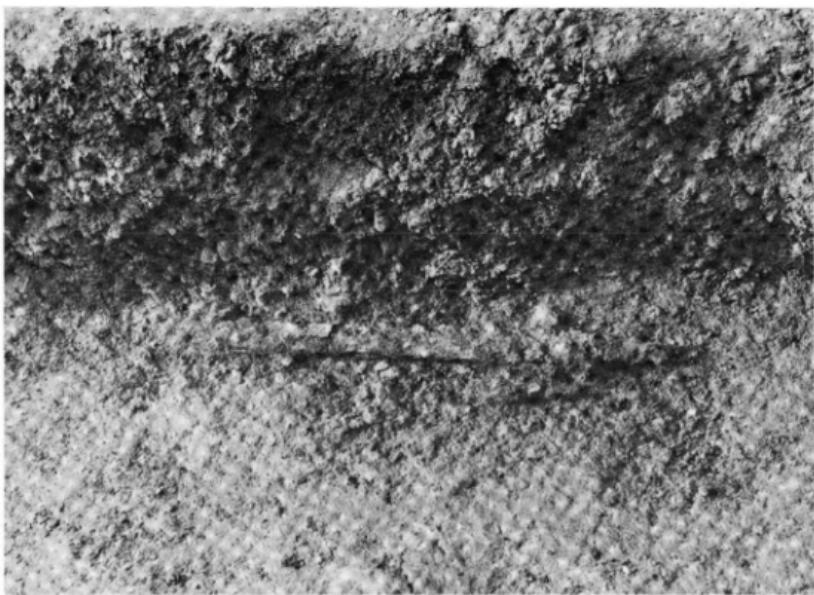
C-1号墳 南尾根周溝



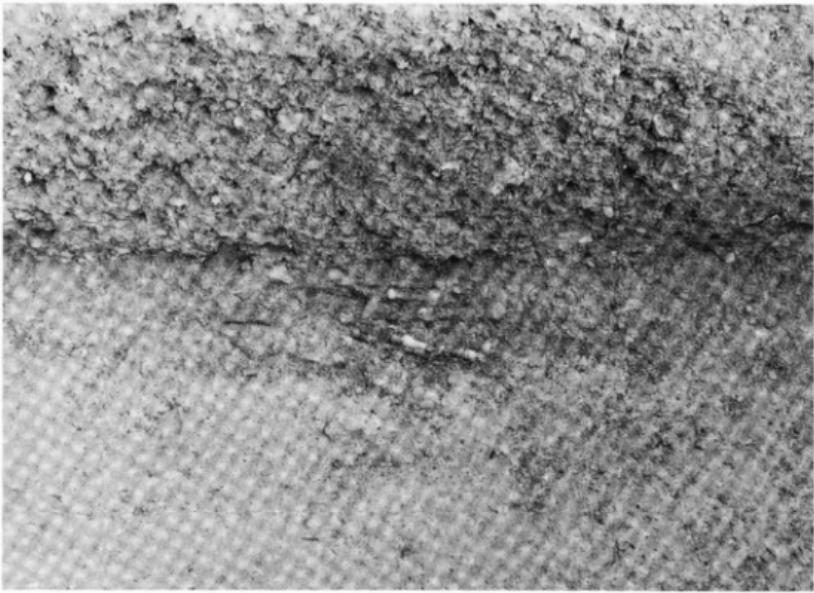
C-1号墳 主体部（東から）



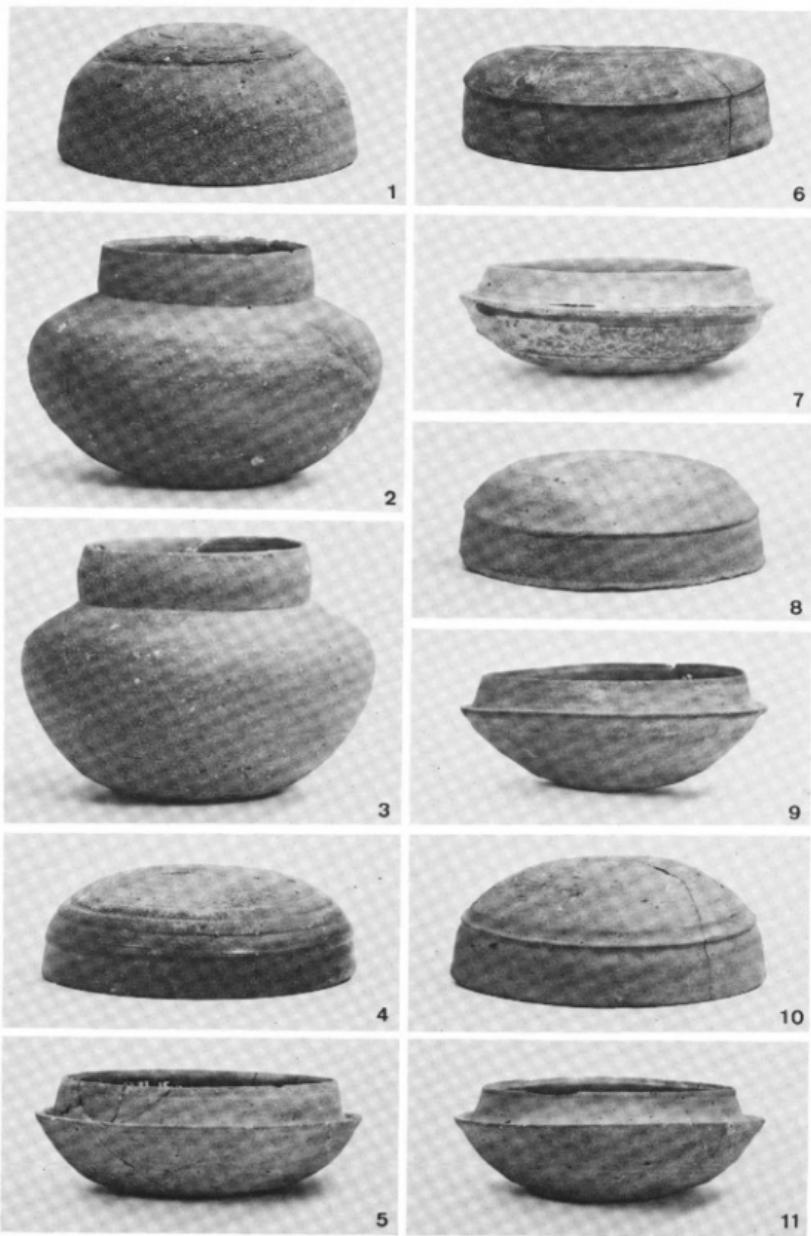
C-1号墳 墓塚内副葬土器一括



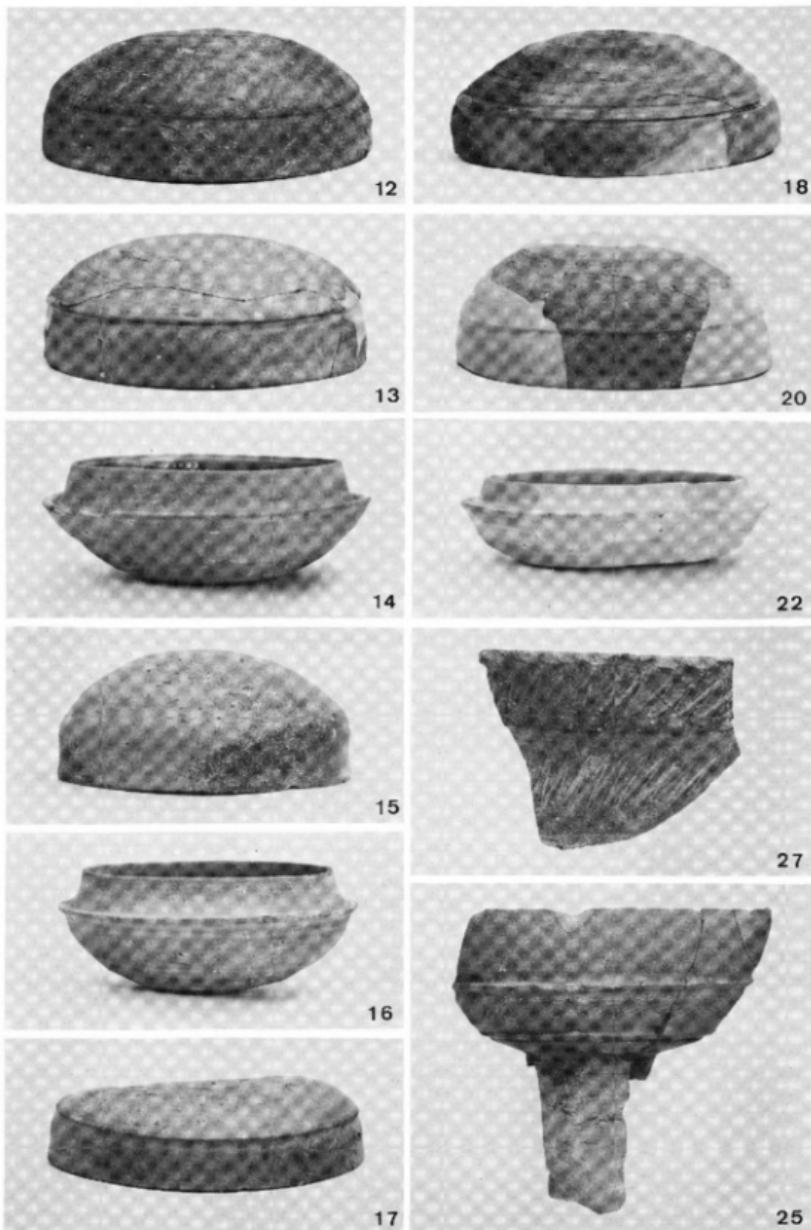
**C-1号墳** 棺内鉄劍出土状況



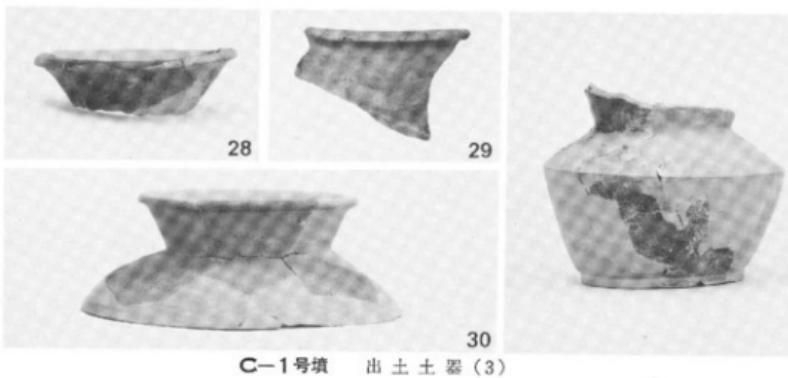
**C-1号墳** 棺内鉄鎌出土状況



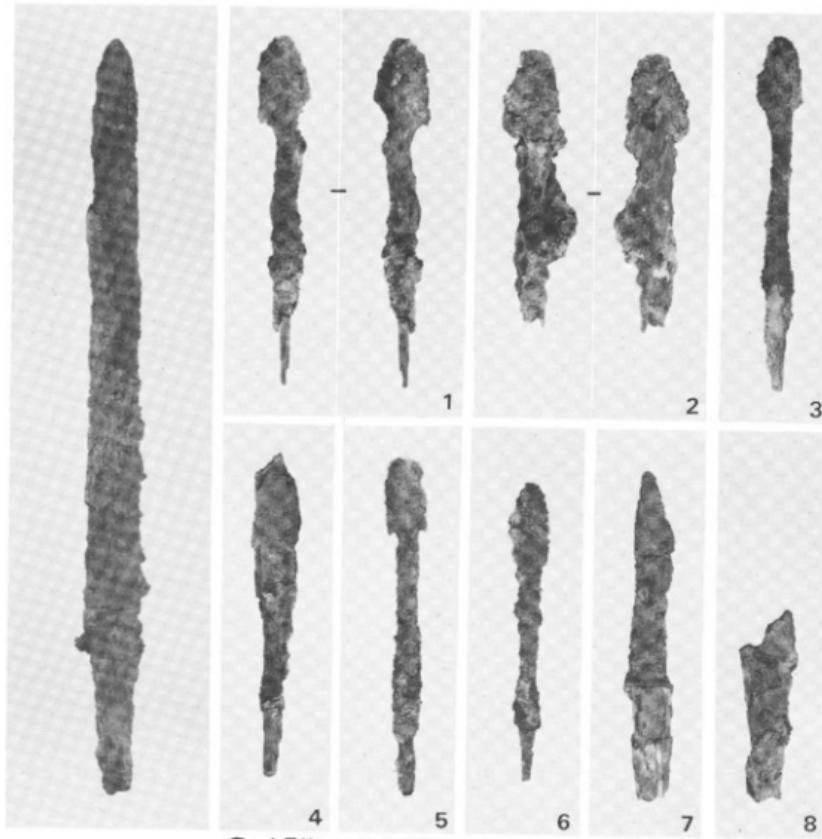
C-1号墳 出土土器 (1)



C-1号墳 出土土器(2)

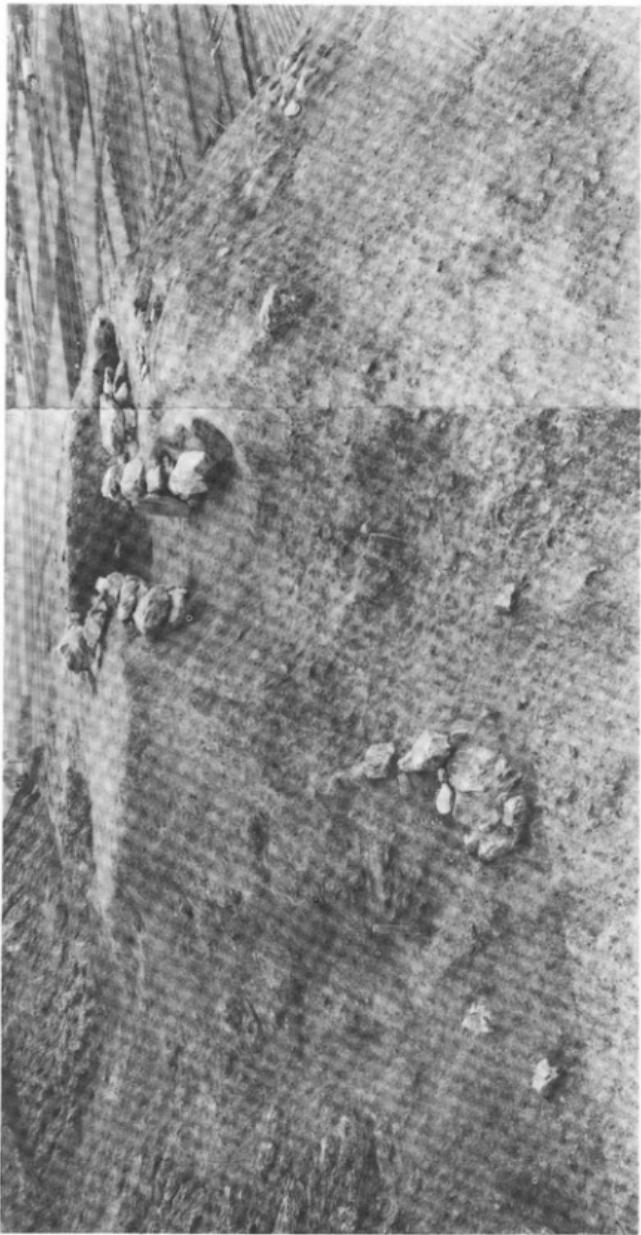


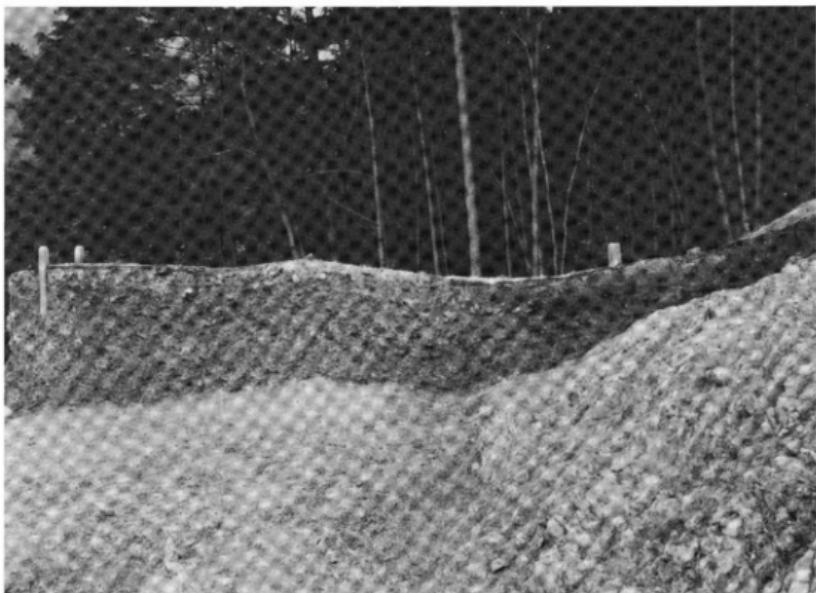
C-1号墳 出土土器(3)



C-1号墳 出土鐵製品

C-2号墳 全景 (調査後)





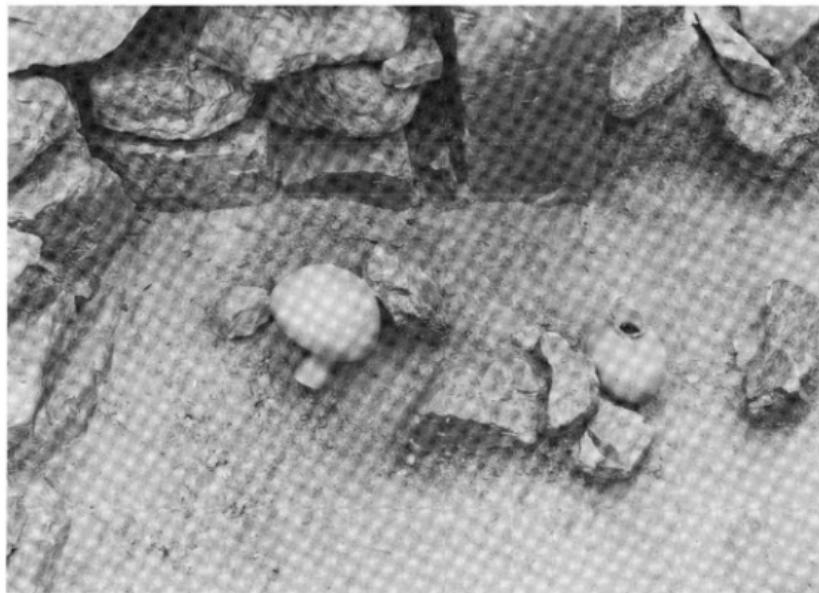
C—2号墳 地山切断状況



C—2号墳 南尾根周溝及び土器出土状況



C—2号墳 閉塞状況



C—2号墳 石室内遺物出土状況



C-2号墳 第2次埋葬石室全景 (北西より)



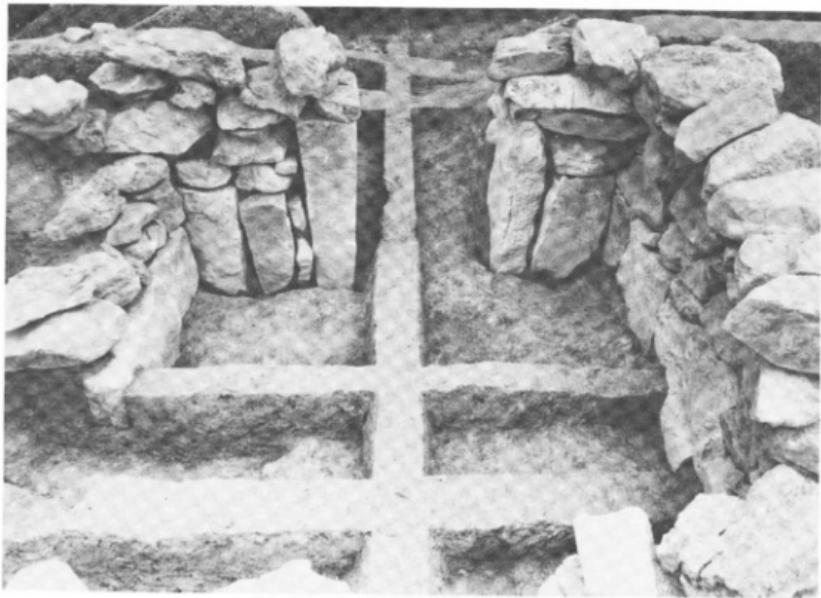
C-2号墳 第2次埋葬石室全景 (北東より)



C—2号墳 第1次埋葬石室全景（北西より）



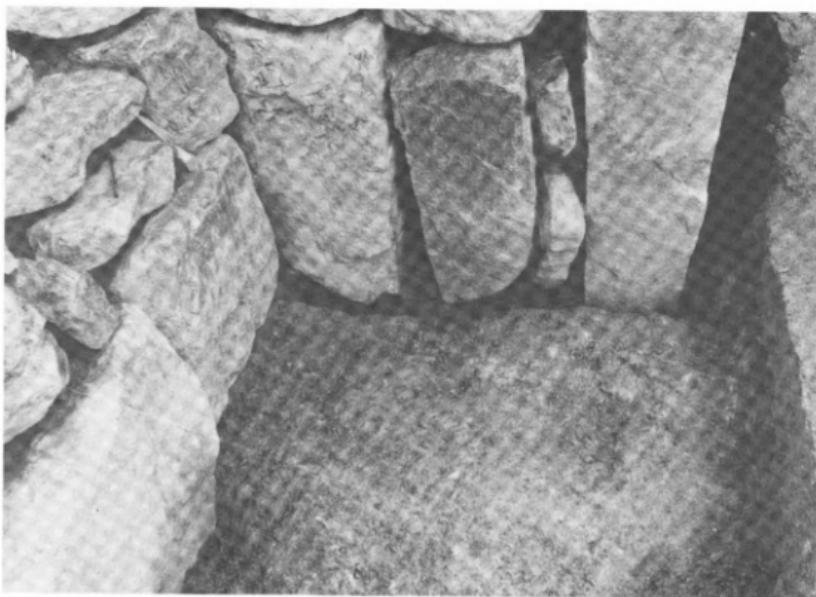
C—2号墳 第1次埋葬石室全景（北東より）



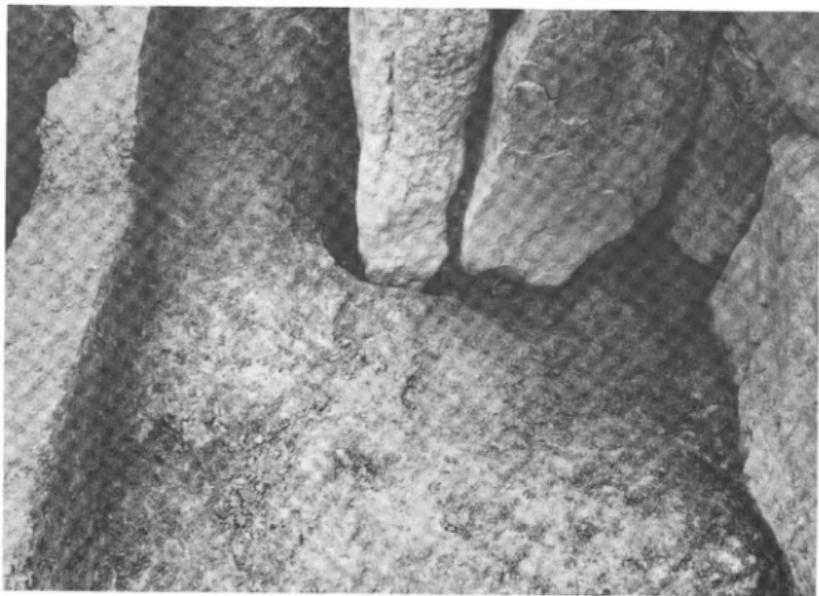
C-2号墳 石室構築状況 (北西より)



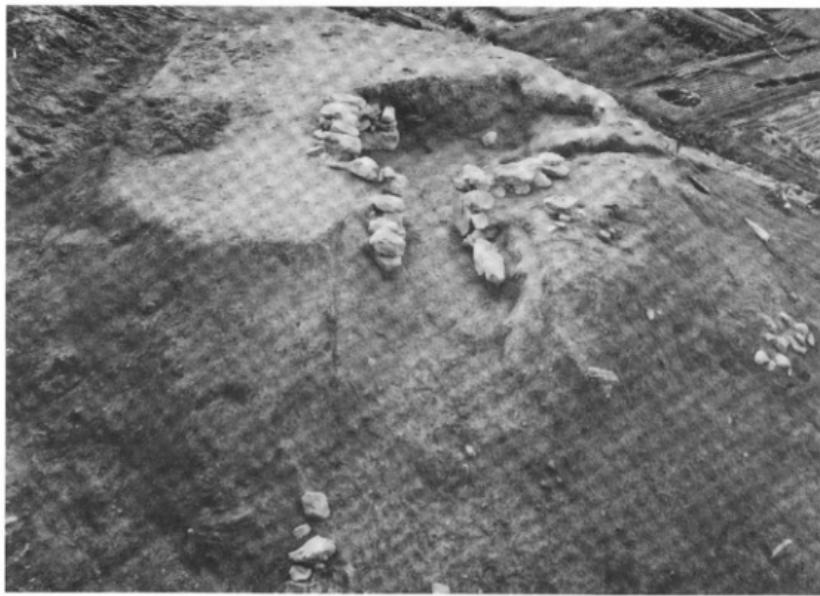
C-2号墳 石室構築状況 (北東より)



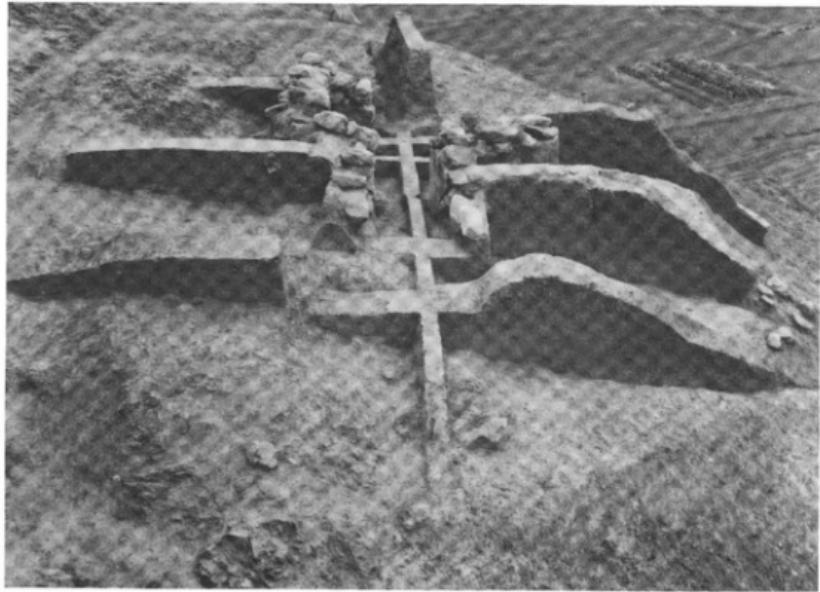
C-2号墳 石室構築状況



C-2号墳 石室構築状況



C-2号墳 全景 (調査後)



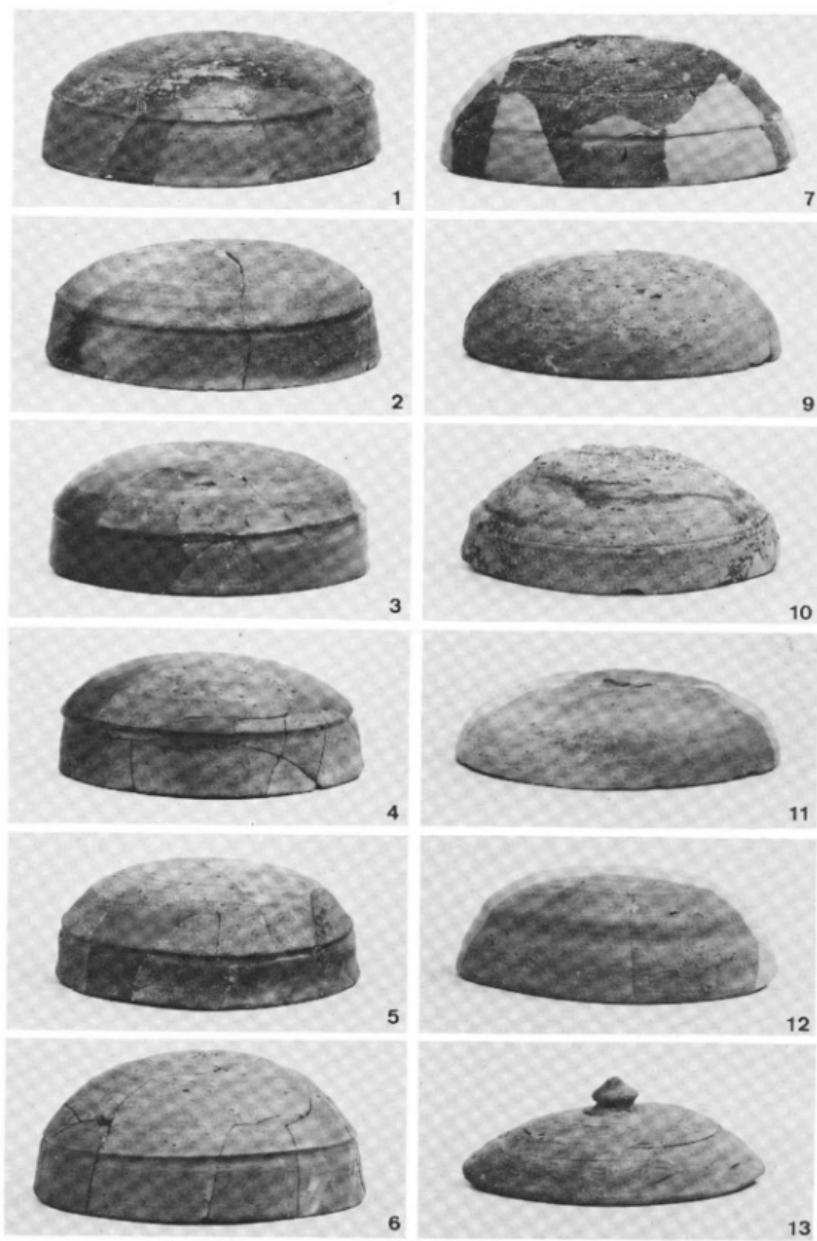
C-2号墳 全景 (盛土除去後)



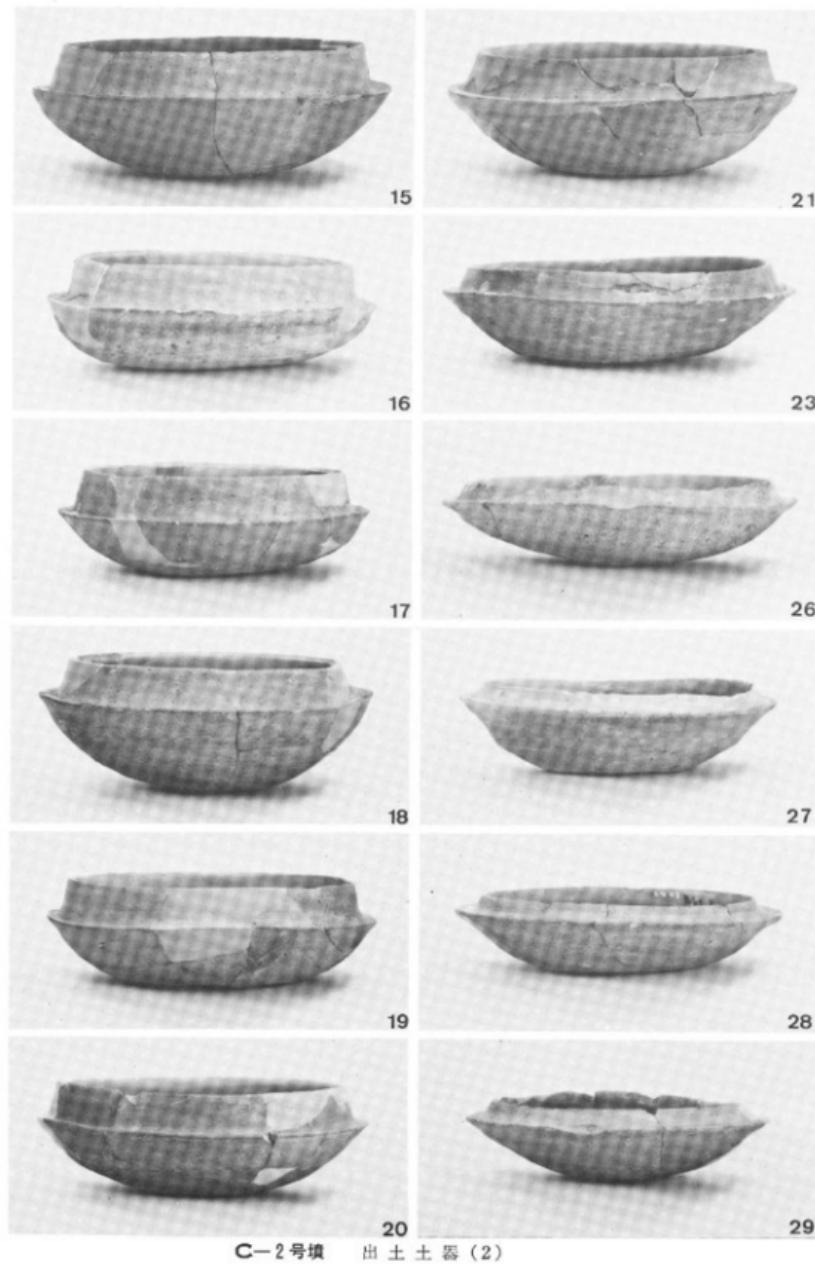
C—2号墳 石室構築状況



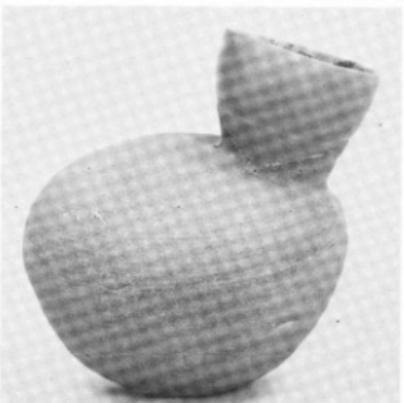
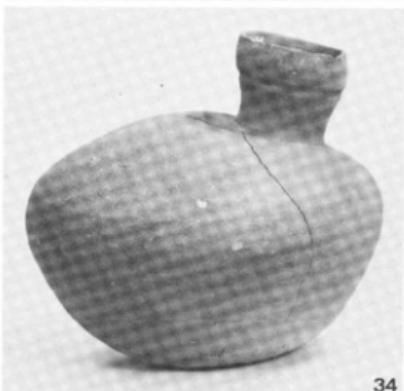
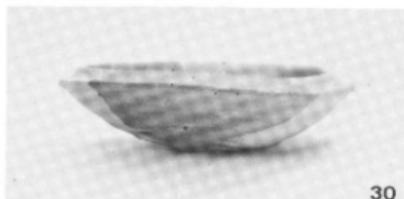
C—2号墳 石室構築状況



C—2号墓  
出土土器(1)



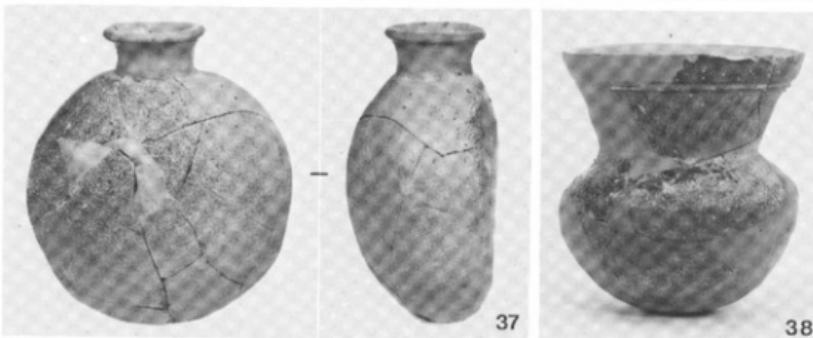
C—2号墳 出土土器(2)



C—2号墳 出土土器(3)

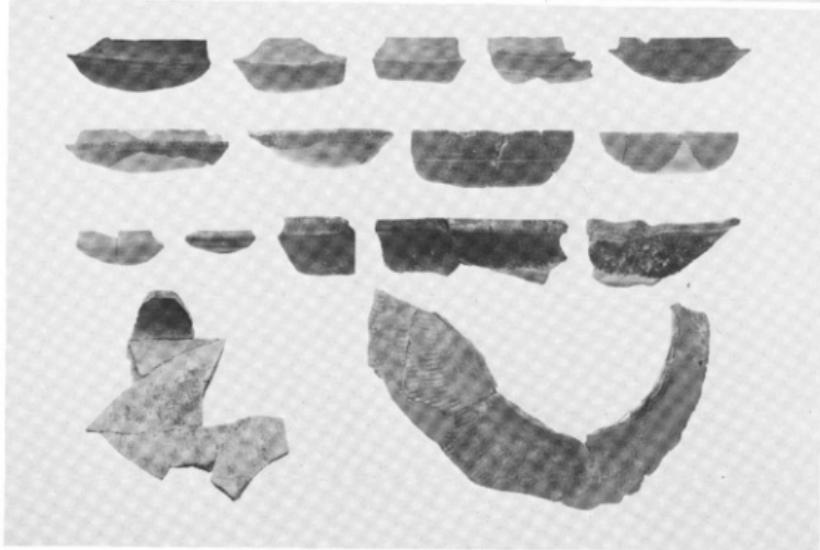


36

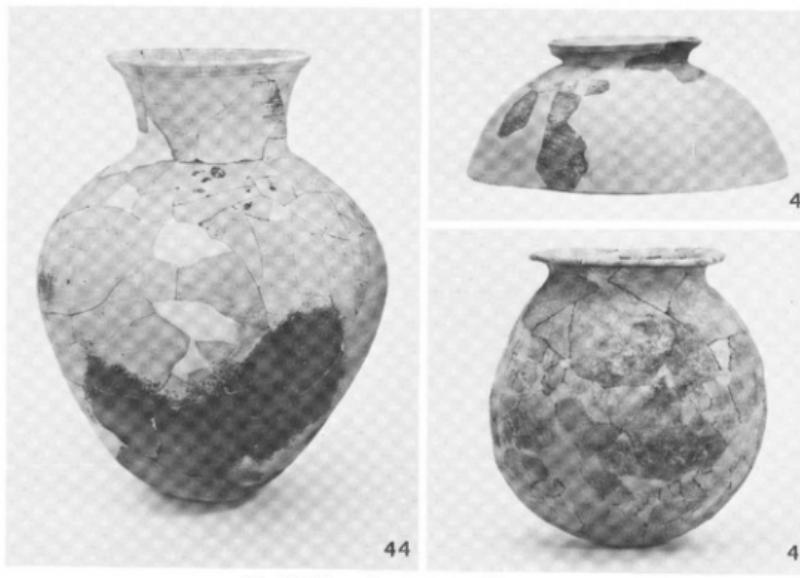


37

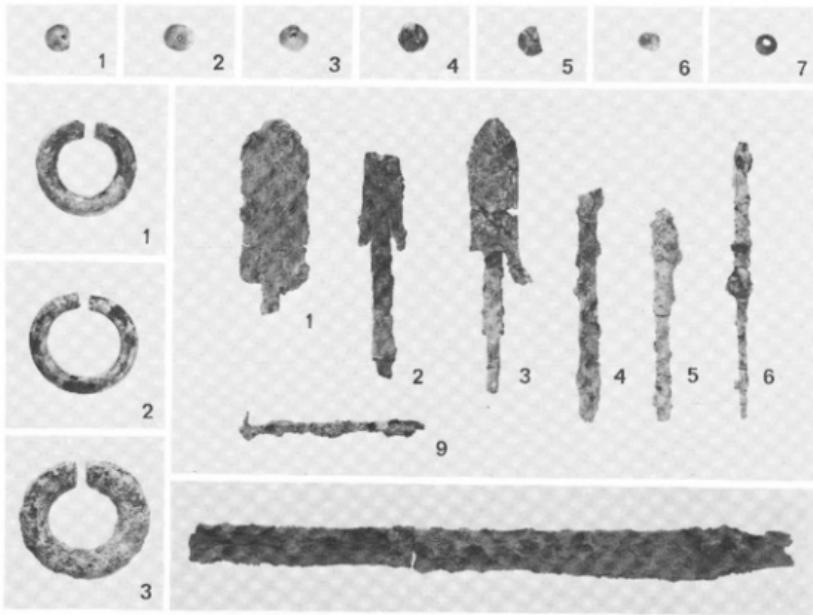
38



C—2号墳 出土土器(4)



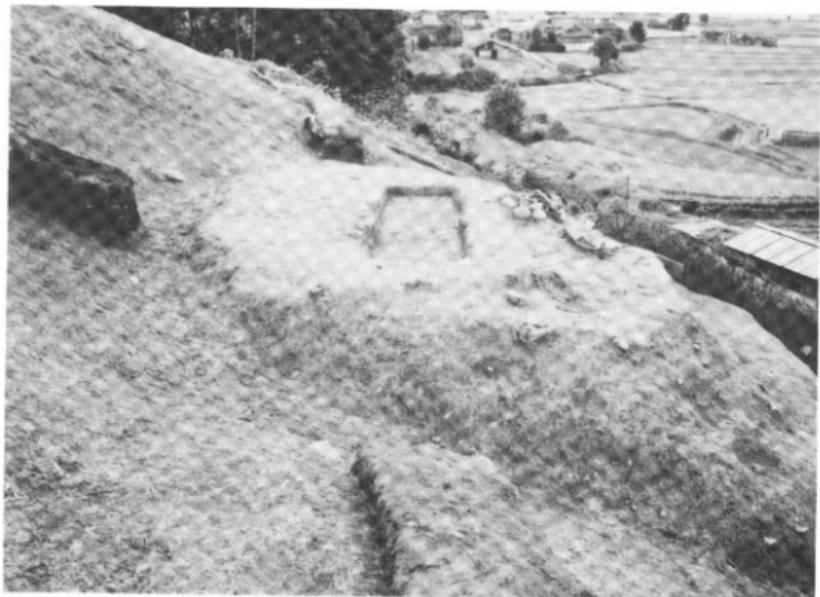
C-2号墳 出土土器(5)



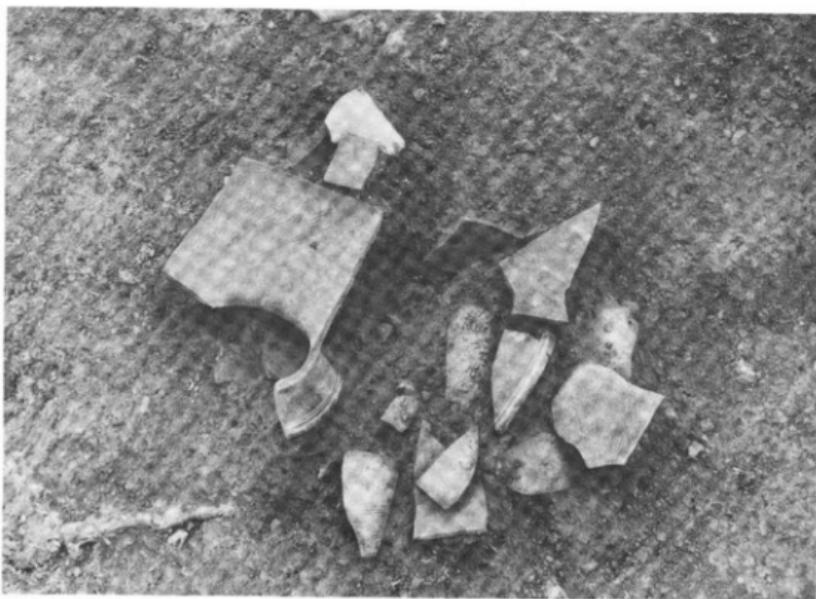
C-2号墳 出土遺物



C-3号墳 全 景 (南より)



C-3号墳 全 景 (東より)

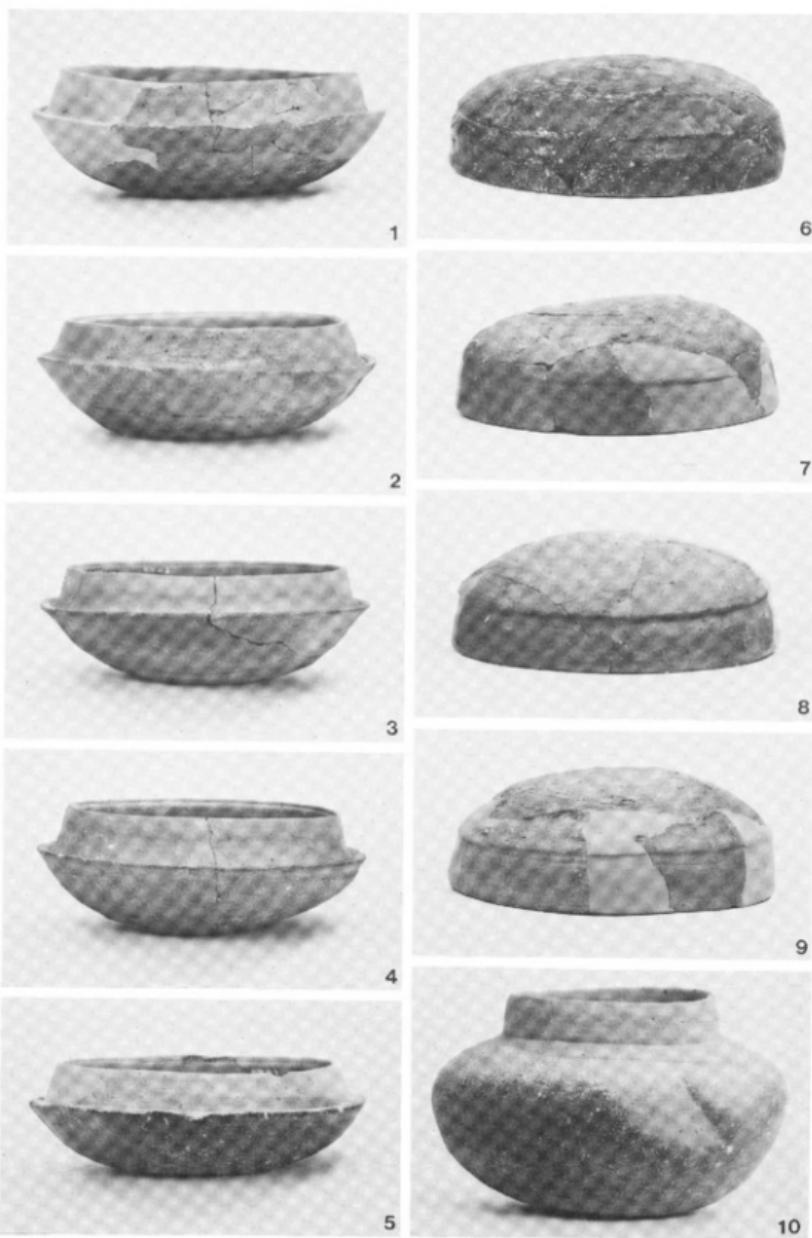


C—3号墳 墓塚内出土遺物



C—3号墳 墓塚内出土遺物

多利向山古墳群 C 尾根支群出土遺物



C-3号墳 出土土器(1)



13



12



11



14



1

C-4号墳 出土土器(1)

---

兵庫県文化財調査報告書 第35冊  
**多利向山古墳群**

1986年3月31日 発行

編集 兵庫県埋蔵文化財調査事務所  
〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5  
TEL (078) 531-7011

発行 貴団法人 兵庫県文化協会  
〒650 神戸市中央区下山手通4丁目16-3  
県民会館内  
TEL (078) 321-2131

印刷 株式会社 精文舎  
〒652 神戸市兵庫区下沢通6丁目2-18  
TEL (078) 575-4729

---